
キングダムハーツ～剣の御遣い？の戦士～

高祖 天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キングダムハーツ 剣の御遣い？の戦士

【Nコード】

N9496T

【作者名】

高祖 天

【あらすじ】

紅魔館に支えていた一人の青年がいた。

その者は、自分の能力故に現実世界から紫に飛ばされ、東方の紅魔館におとされる。

だが、彼は強すぎる故に、またイレギュラー故に東方の世界に拒まれて異世界に飛ばされる。

そして青年はキングダムハーツの世界にとばされる。

彼はどのような生を過ごすか。その彼の物語。

はい！これ注意事項ですよ！

・この作品は不定期に投稿されます。

・作者がゴミなので、「は！？なんだこれ！？消え去れ！！」ってな部分があると思います。

プロローグ

……ん？

ここは何処だ？

まずは自己紹介をしよう。

俺の名前は岸昏零斗^{きしがみれいと}、紅魔館のフランドール・スカーレットにつかえている従者だ。ま、主に遊び相手（戦闘相手）が中心だった。そのおかげで弾幕は扱えるようにはなった。ま、滅多に使わないがな。

そして俺は元々現実世界にいた。だが、八雲紫にスキマ^{やくもかり}で東方の世界に無理矢理おとされた。何故その言い方かというと彼女の能力は“境界を操る程度の能力”の持ち主だからだ。つまり、その境界でスキマというまあ回路みたいなものを開き、俺を無理矢理東方の世界におとした。

落ちた場所が最悪で紅魔館の主、レミリア・スカーレットの玉座だった。マジで最悪だった。

あ、スカーレット姉妹は吸血鬼でフランドールが妹でレミリアが姉だ。

とにかく大変だった。色々と説明したら一応納得してくれた。そこで紫が登場して、俺はただの人間ではないと…つまり能力を持った特別な存在だったことがわかる。その俺の能力が…

“ 剣を司る程度の能力 ”

化け物だ…一言でのべればそれしかない。もはや俺は人ではなくな
っていたらしい。剣が存在する限り滅びず、そして死なない。無限
に本物に近く、性能は本物と同じ物をつくれる。空は何故か飛べた。
もはや人間じゃない…なんか危なく思えてきた。

レミリアにつかえないかと誘われたが、俺は化け物を側におくのは
危ないだろと言って断った。だが彼女はただついてこいしか言わな
かった。そこで出会ったのがフランドール・スカーレットだ。

彼女はいずれ俺が支える者だ。なぜ支える気になったのかというと
彼女の能力に理由があった。彼女は存在するもの全てを破壊出来る。
（多分）だから彼女は地下に閉じ込められた。

そして俺は知った。彼女を支えたい…聞けば聞くほど支えなくなる。
495年閉じ込められていたらしい。そして俺は支えることにした。
そして俺はフランドールに支えていたが、それが寝て起きたら現在
に至る。

また紫の仕業か？

— いや、違うな。 —

誰だ！！

— 私は神だ。 —

何処の神だよ…あつちの世界には神は何故か山ほどいるんでわから

ないがな。

―この世界を作り出した神だ。―

成程、それでなんの用だ？

―お前は強すぎる。私とお前が戦ったらまず私は負けるだろう。だが、お前に頼みたい事がある。―

断る。直ちに元の世界に戻せ。

―いや、お前はあの世界ではかなり強い。故にあの世界からイレギユラーであるお前はあの世界から拒まれた。―

…え！？

衝撃的な言葉だった。この力故に孤独になる…支えるものも、支えてくれるものもいなくなる…

で、お前は どうしたい？ 俺を消滅させるのか？

―いや、違うな。―

ではなんだ？

― 異世界に行き、生きてもらう。―

その言葉に疑問が絶えない。

何故危ないといっときながら俺はまた異世界にとばさるなければならぬ？

能力故に孤独になるのか？

異世界に行く？嫌われるに決まっている。

何故？

何故？

何故？

疑問が俺の頭を渦巻き、そしてだんだん意識が失ってく。何故俺は

苦しまなくてはならない？

俺の意識はここで途絶えた。

主人公設定

名前：岸帛 零斗 きしがみ れいと

身長：177cm

体重：70kg

能力：剣を司る程度の能力

性格

冷静ながらもさりげないムードメーカーみたいな雰囲気。とにかく戦いとなると冷静になる。

趣味：鍛錬、音楽

苦手なもの：説教

技

・『重なりし絶望』

剣を一本相手に投げつける。だがその剣はとんでいる途中で二倍に増えていく。つまり、最初は一本、次は二本、そして二つの剣が二倍になるから四本、そして次は八本………というぐわいで相手を追い詰める。飛ばしている剣の方向を操ることは可能。

・『ブレードマスター』

大量の剣をはどうほうの如くに発射させる。この技はマスタースパークを元にして作った。

顔だち：自然体の髪。色は銀色。

服装

何故か無駄に黒が好きで、黒い半袖と半ズボンを来ている。腰には常に長いフード着きのジャンパーを巻いている。零斗曰く「寒くなったら着れるだろ。」だそうです。とにかく特定の服しか着ないそうです。なのでいつも同じ格好でいる。変だねwww

零「あ？###」

ご、ごめんなさ「『重なりし絶望』」ぎゃあああああああああ
ああ！！

零「これから本編が始まる。楽しみにしてくれ。」

零斗……許すまじ……ガクッ

旅立ちの地（前書き）

うん、俺負けない。

訂正したんだぜ♪

旅立ちの地

「?????side」

俺はいつも通りキープレードの鍛練をしている。

俺の名前はヴェントウス。旅立ちの地でキープレードマスターを目指して修行してる。

??「よし、これにて今日の鍛練は終わりだ。各自、解散してよい。」

この人はエラクウス。俺達の師匠でもありキープレードマスターでもある人。俺達って言った理由は…

??「どうした?もうへばってるのか?」

今話しかけたのはテラ。俺の友達だ。あ、俺は皆からヴェンって呼ばれてる。テラもキープレードの使い手だ。

ヴ「そのくらい、平気だ。」

??「ふふふ…そのわりには随分息があがってるわね。」

彼女はアクア。俺の友達で彼女もキープレードマスターを目指している。

というか、俺ら三人全員目指していることは同じなんだけどな。

ヴ「う、五月蠅いな…ん？」

俺はたまたま空を見たら流れ星があった。けどおかしい…

テ「ん？どうした？」

ヴ「あれを見て。」

俺は流れ星の方を指差した。

ア「流れ星ね。」

ヴ「けどおかしくないか？流れ星にしてはゆっくりすぎるし、それにいつまでたっても消えない。」

テ「確かにな…」

不思議だなあ程度にしか見ていなかったが、だんだんその流れ星が大きくなっていく…

ヴ「ん？テラ！アクア！あの流れ星こっちに落ちてきてないか！？」

テ「た、確かにそうだな。…おいヴェン！アクア！流れ星が丘に落ちたぞ！！」

なんか興味わいてくるな…

ア「わ、私はマスターエラクウスを呼んでくるわ！」

俺は興味をもち、流れ星が落ちた場所へ駆け出した。

テ「ヴェン！くっ！俺はヴェンを追う！マスターエラクスを頼む！」

（ヴェントsend）

…知らない天井だ…いや、知らない空だというべきか？

俺は気絶から目を覚まし、辺りを見回す。

というか、俺どうなってんの？もしかして…落ちた？

何故か俺は何かが落ちた後のようなクレーターの中で倒れていた。

うん、絶対落ちたな。

だって服に土がつきまくりだ。

??「なあ、大丈夫…か？」

上を見上げれば金髪のツンツン頭の少年…いや、ぎりぎり少年がいた。

零「あ、ああ。」

とりあえず返答した。

とにかくこの無駄に深いクレーターから出るか。

俺はジャンプしてその少年のところに行った。

だが……

??「ヴェン!!」

謎のでかい鍵をもった男が俺に斬りかかってきた。

見切れない程のスピードではないな。ただ攻撃力は高いな。

俺は攻撃を避けた。

しかしあの少年はヴェンと言うのか……ヴェン?そして…鍵?あ、この世界はキングダムハーツの世界か。てことはあの鍵はキーブレードか。

てことはあいつはテラだな。そしてヴェンはヴェントウスの事だろう。

テ「ヴェン!大丈夫か?」

ヴ「テ、テラ!??ちが!」

テ「貴様…よくも!」

…なにもしてねえよ…てか、ヴェントウスが止めようとしてるのに…何故気づかない?

ま、危険視するのは分かる…はあ、結構傷つくな…

零「俺は何もしていない。そもそも「黙れ!!」…話しても無駄か…。」

テラってこんなに猪だったか？ま、いいか。

零「後悔はするなよ？」

俺は空中に浮き、戦闘体制をとる。

テ「な!？」

ヴ「え!？」

…空中に浮くのがそんなに珍しいのか？ゼムナスとか普通に浮いてるじゃん。あとザルデインだったけ？それもよく見れば浮いてるじゃん。あ、そっか。あれは例外か。

零「…弾幕勝負開催だ。」

俺は空中から黒い弾幕を放つ。正直に言おう。俺は弾幕より剣を投げつける方が威力も量も上だ。しかも弾幕は広範囲攻撃てるが、一直線しか飛ばない。悲しいほど隙がある。だが…

テ「うおおおお!」

苦戦してる？苦戦してるの？嘘でしょ？ソラなら簡単にかわせるよ。（多分）なのに苦戦？あ、多分戦い方が違うから苦戦してるんだろ

う。うん、そうだと信じよう。

テ「そこだ!!」

嘘でしょ!? もう馴れたの!? やっぱり強いな…。

俺は振り下ろされるキープレードをかわし、地上に降りた。

零「…やるな。だがこれ以上止めないか? 俺はお前を傷つけたくない。」

テ「なんだと!? それだと俺の方が弱いということか!!」

零「違う。お前は強い。だが、俺はお前と戦う理由がない。」

テ「お前には無くても俺にはある!!」

ち! 仕方ない… 気絶させる。

てかさっきの攻撃、どうやった? 俺空中に浮いてたよ? 空飛んでたよ? なんで地上からキープレードで戦えるの? てか、もしかしてさっきの攻撃、ジャンプしたの? 神じゃね?

零「…慌てろ… 奥義『重なりし絶望』」

俺は普通の剣を投げつける。あ、普通の剣だけど堅さはかなり堅いぞ。魔法と打ち合っても負けないぐらいだな。

剣を操り、テラの目の前で剣を二つに分けさせる。そして段々剣が増えていき、テラが混乱してる。

テ「なんなんだこれは…なんだこれはー!!」

零「爆発しろ…」

ボカーン!!

俺の放った剣が全て爆発する。けど威力はないよ。証拠にクレータ
ーすらできてないよ。いくつかは目眩まし程度の爆発。頭の上にあ
るものは少し打撃を与えた程度のものだ。

ヴ「テラー!!」

ヴェントウスがテラを心配する。

零「気にする必要はない。気絶させたただけだ。理由すら聞かない奴
にはこれくらいはしとかなくては話をききやしないからな。」

ヴ「ふう…よかった…それにしても強いな。俺はヴェントス。皆
からヴェンって呼ばれてる。」

俺は驚いた。大抵のやつは俺の力を恐ろしく思い逃げる。人間でこ
んな接し方されるのは初めてだ。

ヴ「ん?どうしたの?」

零「(。口。;)」

ヴ「おゝい。」

零「…いや、なんでもない。ここでは珍しいかな?俺は岸帛零斗だ。」

ヴ「キシガミレイト？変な名前だな。」

零「発音が違うぞ。岸帛零斗だ。」

ヴ「キシガミレイト？」

零「だから…もういいよ、これからは零斗と呼んでくれ。」

ヴ「わかった、レイト。」

零「…もう俺は気にしないぞ…気にしない、気にしないぞ。」

仕方ないか。この世界ではこんな名前の奴はいない。いたら見てみたいぐらいだ。

零「さてと…そいつを気絶させたのは俺だ。俺が背負うからこいつの家まで案内してくれ。」

ヴ「わかった。」

俺はテラを背負う。ん？何故知らないふりをするかつて？異世界からきたとしてもなんかこの物語全てを知っていたらなんか天の御遣いだのと勘違いされるだろ。それだけはやだな。

零「…意外と重いな。凄い鍛えてるな、こいつは。」

ヴ「そりゃね。テラは努力家だからよく一人でも鍛練してるよ。」

ほう？それなら強いのも頷けるな。

??「テラ！ヴェン！」

??「む？そこの君は誰だ？」

歩いているとアクアとエラクウスと遭遇。

ヴ「あ、アクアとマスターエラクウス。流れ星が落ちた場所に向かったらいまテラを担いでる人が倒れていたんだ。俺が助けようとしたら…」

零「テラとか言ったな。テラが俺を妖怪かなんかと思って攻撃してきた。何度か俺は理由を説明しようとした。だけどテラが黙れ！！とか言つてでかい鍵で斬りかかってきた。だから俺は仕方なしに気絶させた。テラは完全に俺を殺しにかかってたからな。」

エ「そうか、すまなかった。我が弟子がそのようなことを…」

零「いや、別にいい。誰だって見ず知らずの危険人物を見たらそうなるよ。」

俺は鼻で笑った。凄く悲しい。何故俺はあの世界で生きられない…

何故俺を拒んだ…ただ俺は孤独で温もりを知らない少女を少しでも救おうとしただけなのに…彼女も俺に心を許してきて、破壊本能を制御出来るようになってやっと孤独の壁をぶち壊したのに…何故？俺は何をしたんだ？

エ「私はエラクウス。とにかくいろいろ聞きたいことがあるからついてきてくれ。」

零「わかった。俺は岸帛零斗だ。零斗って呼んでくれ。」

ア「レイト？不思議な名前ですね。私はアクアと申します。」

零「発音が…いいや。それと敬語は止めてくれ。」

ア「いや、しかし…」

零「アゝクゝアゝ？」

ア「…わかりました。いや、わかったわ。宜しく、零斗。」

零「ああ、そっちの方がいいな。」

エ「レイトとやら、ついてきてるか？」

意外と心配症なんだな…

零「平気だったの。」

俺はエラクウスの後ろをついていった。

目的地に到着した。けど…

零「広いな、よく迷子にならないよな…」

今俺は客室に案内された。テラはヴェンがみていてくれている。ここにはアクアとエラクウスがいる。

零「それで、話とは？」

エ「それは、先程レイトは自分の事を危険と言っていたな。それは何故？」

その話か…

零「その話をするためには条件がある。まず、どんなあり得ない話をして信じてもらうことだ。いいな？アクアも。」

エ「わかった。」

ア「それで、その理由は？」

零「それは…」

くアクア side

私は不思議な人と出会った。テラを担いでる彼、名前はキシガミレイトという不思議な名前だった。それとテラを気絶させるほどの力…

彼は危険だと思う。けど、彼は話している時にもの凄く悲しい目をする。

彼は何かを抱えている…私はそれを知りたい。すると彼は話す条件としてどんなあり得ない話でも信じろといってきた。どんな話だろう…

零「まず俺はこの世界の住民ではない。」

それはだいたいわかる。流れ星みたいに落ちてきたのだもの…あまり驚かない。

零「だが、その意味は他の星からきたとかなんちゃらじゃない。」

え？そういう意味じゃないとしたら、どういう意味？

零「俺はもはや違う次元から来ている。だからどの星を探しても俺の住んでいた世界は見つからない。」

次元？どういう意味？

エ「つまりそれはどういう意味なのだ？」

私が思った事をマスターが述べた。

零「つまり世界そのもの…つまり君達の星全て何もかも違う世界から来たとして考えればいい。」

意味はよく分からないけど、とにかくこの世界に存在しない世界から来たということね…やっぱり分かりにくい…

零「まだこれからだ。これからが本題だ。」

つまりこれよりまだ有り得ない話がある…こんがらなければいいけど…

くアクアendく

さて、俺が異世界から来たのはわかってもらえたかな。ま、いいだろう。

ボタンッ

…テラとヴェントウスが入ってきた。

テ「…先程はすまなかった。ヴェンから聞いた。」

零「いや、いいんだ。それより、ちょうどいいときにきた。重用な話がある。あ、君の名前はもう聞いてるから自己紹介はいい。俺は岸帛零斗だ。零斗って呼んでくれ。」

テ「レイト？不思議な名前だな。」

やっぱり発音が違う…畜生。

零「それより、まずは俺の話を聞いてくれ。」

ヴ「ええっと、つまり俺らの世界には存在しない世界から来たの？」

成程…そういう捉え方が…ま、間違っではないが、ややこしい考えだな。

零「ああ、そうだ。だがまだこれからが本題だ。」

テ「今のよりこんがらがる話か？」

何故そう思う…絶対単純だ。

ヴ「(？?)(？?)」

零「あ、さっきのよりも単純だ。」

ヴ「ふう…もう頭が…」

なんか凄い考えてるね、この子…

零「とにかく、話すぞ。その世界は、人だけが存在する世界ではない。妖怪や鬼、神が共存（？）している世界だ。」

エ「妖怪…」

ア「鬼…」

テ「神…」

ヴ「……。」

零「そこはまず、普通では考えられない力を持つ。まずは能力だ。ほら、君達はさっきのテラみたいに鍵をだせる？」

エ「キーブレードのことか。」

しかしキーブレードって強いよな…だいたいわかるけど心に攻撃…なんかすげえ…

零「つまり、君達はキーブレードを出現させたり消滅させたり、必要な時に自分のがだせるように、こつちの世界では能力という力を持つ者がいる。」

エ「能力…」

零「その能力を持つ者は、はっきりいって大抵な奴は死なない。」

ア「…死なない？」

あら、やっぱりくいつくよな。ま、考えられないよな。人間は生を受ける歳をとり、死ぬ。刺されても死ぬ。なのにまず死なない存在がいる…その時点で可笑しいとおもうだろう…

零「あ、一言いうぞ。死なないって言っても寿命がないだけの奴が多いぞ。」

エ「すまぬが、ひとつ聞きたい。」

零「どうした？」

エ「レイトよ、お主いくつだ？」

零「ああ、俺は440歳だぞ。」

エ「…真か？」

零「真だ。」

エ「……（。；）（う、羨ましい…歳をとらないと…）」

ア「（まさか、見た目は普通なのに440歳！？これで師匠よりも歳上！？）」

テ「（師匠羨ましそうに驚いたな…眼福。）」

ヴ「（てことは、また更に何百年何千年たとうがこの姿のまま！？）」

こいつら、絶対なんか思ってるな…

零「まあ、とにかく話の続きだ。その能力はこの世界よりも強力だったり、弱かったりだな。」

テ「その能力とは例えばどんなものがあるんだ？（キラキラ）」

ちよつと！なぜそこでくいつく！キャラ違うだろ！

零「そうだな…俺が見たなかで強かったのは“境界を操る程度の能力”“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”だな。」

はあ、本当に悲しくなってくる…

テ「…破壊の方はわかった。だが境界とは？」

零「そうだな。つまり、大抵のことは思い通りでことが運ぶって感じ。」

エ「そのような奴がいたとは…」

テ「まさしく、有り得ない…」

ま、そうだろうな。みんなは能力の話でカポーンとしてるが、俺は話を続けることにした。

零「俺はその能力のせいで、俺はその世界から拒まれた。そして現在にいたる。」

ア「つまり、貴方の能力が強すぎてその世界が貴方の存在を拒み、そして私達の世界にとばしたと…」

凄い推察力だな…

零「ああ。そして、俺の能力は“剣を司る程度の能力”だ。」

…皆が沈黙した。

零「司る…すなわち支配…俺は剣の存在がなくなる限り俺はよみがえる。」

はつきりいおう。皆信じられない的な目で見てくる。

零「あと剣の事だが、偽物にはかわりはないが本物に近い、いや、たまにそれ以上の物をだせる。そうだな…テラ、さっきのキープレード、俺が出現させよう。」

そう言い、俺は立ち上がった。そして、俺は両手にキープレードを出現させる。

エ「…選ばれし者しか持てないキープレードを両手に持つとは…」

零「だから偽物だって。だが、量で勝つ。さらに俺は剣を支配しているからその能力も扱える。」

皆がポカーンとしている。

零「…以上が俺の話だ。すなわち、その能力で俺は世界に拒まれ、俺はここにいます。」

零「所詮、俺は孤独を生きなければならぬ存在…危険な能力のせいで…」

俺は…

零「あつちの世界で支えるべき存在があるのに…仲間がいたのに…」

何故…

零「…その能力故に世界に拒絶され…制御できるのに…とばされて…」

何故世界は俺を拒んだ…ただ仲間、友と時を過ごしていただけなのに…

何故！何故…俺がこんなに苦しい思いをしなければならぬ…くそ！

俺は気づかぬ内に涙を流していた。

もう、戻れない…奪われた…時間を、友を、支えるものも…全て！
今俺に残っているのは苦しみ、孤独…

ア「マスター…」

テ「俺からも、宜しく願います。」

ヴ「マスター、頼みます。」

エ「うむ…レイトよ、我らの元にこないか？」

…え？

零「……何故？俺は、いつ暴れだすか分からない…テラ、知っていただろう…あれで俺は本気なんて出していなかったことを…俺の力に…呑まれないのか？破壊されたいのか？」

ア「それは違う。レイト、確かに貴方は危険。だけど、それは心に空いた穴のせい。」

……心？

心…俺にそんなもの…もう存在するはずない…

零「…もう、心は捨てた。」

ア「違うわ。貴方に心がないはずはない。貴方はその証拠に涙を流せる…現に自分は危険だなんて言っただけで私達の安全のために遠ざけようとしたじゃない。」

……

ア「それに、貴方は自分一人で全てを抱え込んで。人を頼る事も必用よ。貴方にも支えていた人がいたように、私達が貴方を支えちゃ駄目？」

支えられる……か。

なんか変な感じだな。400年以上支えていたんだから支えられる感情を忘れてるのかな…

零「……………」

俯き、涙を流していた顔を、涙を止めて顔を上げる。

零「では、世話になることにしよう。テラ、ヴェン、アクア、そして…「エラクウスと呼んでよい。」…エラクウス、宜しくな。」

俺は満面の笑み、今までにこんなに本当に、自然に出た笑顔は久しぶりだ。笑みを浮かべた。

エ「うむ。」

ヴ「宜しくな。」

テ「修行の相手を頼むぞ。」

…最後のは聞かなかったことにしよう。

俺はアクアの目の前に立つ。

零「アクア、君には本当に感謝する。心のそこから笑えたのは君のおかげだ。」

ナデナデ

俺はアクアの頭を撫でた。

ア「な！な！／＼／＼」

零「有り難う、アクア。（ニコッ）」

ア「／＼／＼／＼」

アクアは顔を俯せた。

照れてるのかな？ああ…スカーレット家に支えていたときもこうしてスカーレット姉妹を撫でたもんだなあ…なんか咲夜と居眠り門番は羨ましそうに、こあ（小悪魔）やパチュリーは撫でてや撫でなさいなど頼んできてたなあ…

テ「……アクア、おちたな…（ヒソヒソ）」

ヴ「アクア、あんなに顔赤くして…（ヒソヒソ）」

テ「だけどレイトも鈍感だな…（ヒソヒソ）」

ヴ「そうだな…（ヒソヒソ）」

なんか二人で話してる…なんか俺を可哀想な目で見てない？なんで？

パッ

俺は撫でるのを止めた。

ア「あ……」

なぜ残念そうな顔するの？ま、いいか。

エ「レイトよ、部屋は私が用意しよう。今から案内する。」

零「ああ、有り難う。」

そして俺は部屋に案内され、今日の終わりを上げた。

旅立ちの地におりた俺は、これから何が待ち受けるのか…そういえば、原作を思い出したらゼアノートとヴァニタスがいたよな…いずれ戦うから気を付けるか。

エラクウスvs零斗（前書き）

っしゅー！！かいたー！！

超生暖かい目で見てやってください。

エラクウスvs零斗

チュンチュン

ん？朝か…

俺は部屋に案内されたあと、ま、疲れていたためかすぐに寝た。

ってか、あの昨日のテラの猪っぷりってなんだったんだ？

あと、この部屋は意外に便利だ。原作は少し知ってるんだが、部屋の中までは知らない。日常的に使うもの、水道やトイレ、更に風呂場まであった。歯ブラシもあり、本当に充実し過ぎだ。けっこう驚いた。特に風呂場。便所と風呂場は別になっているし、本当に都合良すぎないかと心配してしまう程だ。あと、何故風呂場があるんだ？シャワールーム程度だと思っていたんだが…気にしたら負けだ。

家具は仕方ない。はつきり言ってベットとクローゼットしかない。中を覗いたらタンスがある。しかも小さい。俺の身長の下半分以下くらいだな。タンスを覗いたら俺のお気に入り、黒い半袖半ズボンが三着ずつ、そして長く黒いフード着きのジャンパーは二着入っていた。

ジャンパーはまずいだろと愚痴りながら見ていたら紙が入っていた。内容は…

“ 零斗へ

異世界の移動の事はすまなかった。私が謝ることではないが、代わりに私が謝罪しよう。

せめてもの贈り物だ。お前の服を送ってやった。大切に使えよ。

神より

追伸

たまには他の服も着たらどうだ？”

あの手紙は余計だった。特に追伸。別に良いじゃないか。好みは人それぞれさ。な？皆もそう思うだろ？いつも同じ服でも普通だよな？

な？な？？な？？？

おっと、つい昨日の出来事を振り返っていたら興奮しちゃった。

ベットからおりて、朝の便所へ…何故か俺の朝はいつも便所で踏ん張る事から始まる。

ジャ～

ふっスッキリした。さてと…って、流石に着替えるか。なんか汗が服についてるしな。

クローゼットに行き、服を選び（全部同じだが…）、そしていつもの服に着替えようと上着をぬいで「レイト」？朝食で…」……

零「……………」。

最悪だ…

てかノックもせずに入ってくるって…ノックぐらいは知ってるよね？しかも入ってきた人物が…

アクアだった…

ア「……き／／／」

零「……この…」

ア「キャアアアアア！／／／」

零「変態がああああああああ！！！！ノックぐらいしろおおおお！！！！」

ア「ご、御免なさい／＼／」

ヴ「…アクアに男の着替えを覗く趣味があったなんて…」

テ「違うだろ。どちらかと言えば襲うだろ。」

ア「そんな趣味ないわよ！！！！／＼／」

ヴ「レイトだからなあ…あっても可笑しくないような…」

テ「だろ？」

ア「どういう意味よ！！！！／＼／」

あの後全員集まって結構処理が大変だった。今は食堂らしきところで飯を食ってる。

…こいつら、本当にいずれのあの勇者三人組なのか？特にアクア…お前いずれキーブレードマスターになるやつだろ？大丈夫か？

零「あ、そういえばエラクウス、ちょっと相談事があるんだが…」

エ「うん？どうした？」

零「どうやらこの世界と俺のいた世界では魔法が随分ちがうみたいなんだ。」

俺は弾幕だな。特に量を中心とした戦い方。そして相手をピチューンさせるんだけど、こっちはほぼ一撃一撃を強くしている魔法の率の方が高い。あと魔法覚えといった方が便利じゃん。

あの究極魔法の『アルテマ』も使えたりするかもしれないからな。
なんか雰囲気的にも覚えておきたいしな。

零「そんなことだからさ、魔法を教えて貰いたいんだよ。」

ア「それなら私にやらせてください!」

…アクア、なんか恐い。

なぜそこまでくいつく?ある意味恐怖なんですが…

零「んじゃ、お願いするかな。宜しくな、アクア。(ニコッ)」

ア「／／はい。／／／」

テ「本当はレイトと会える時間を増やしたいだけだよ…(ヒソヒソ)」

ヴ「アクア、どこまでほれてんだよ…(ヒソヒソ)」

あ、またなんか二人で話し会ってる。なに話してんだろう…

ア「……(ギロツ!!)」

ヴ・テ「!!!(ビクッ!)」「」

…今、アクアが物凄い殺気を出してなかったか?

エ「うむ。ではレイト、その代わりっていうてはなんだが、私と一つ、

手合わせ願いたいのだが、宜しいかな？」

ふうん…教えて貰う変わりに手合わせか…悪くない条件だって、言えるかー！

零「ちょっと待て！あのな！キープレードマスターの奴とたたかえだ？ムリムリ！絶対無理！死ぬー！」

エ「安心なさい。手加減は…」

良かった…なら平気だ。

エ「せずに本気で殺るから。」

…ちょっと待て待て待て待て待て待て！馬鹿馬鹿！そこは手加減してやるだろ！？しかも字が危ない！不味いつて！これはヤバイ！

テ「マスターとレイトとの戦いか…これは見逃せないな。」

ヴ「これは楽しみだなあ。」

ア「これは学習になる…」

…マジで？断れない雰囲気じゃねえか？

まさか、これは罠か！？

罠だ…これは罠だ！

エ「では行こうか。」

俺は引きずられて鍛練場へ連れていかれた。

鍛練場にて

エ「さあ何処からでもかかって来い！」

いやあんたねえ…俺の意見は無視というか、話すら聞いてないよな…まったく…

ってか、キーブレードマスターだろ？どう見たって死亡フラグだろ？死ぬよ？マジでわたっちゃいけない川わたりにいつちまうぜ？いや、逝っちまうぜ？

ア「レイト…！頑張ってね〜！」

テ「さて、マスター相手にどれだけいけるか…」

ヴ「レイト！頑張れ！！！」

うわぁ…なんか応援されちゃってるよ…畜生。

死亡フラグ回避不可能。

溜め息を吐き、エラクウスに顔を向けた。

ま、当然キープレードを構えてるわな。仕方ない…

右手に俺の作り出した見た目普通の剣を出現させた。

エ「では…参ろうか!!」

零「弹幕勝負(?)の開幕だ!!」

魔力(?)を集中させて空中にわずかに浮く。

両者にらみ合い、先手を打ったのはエラクウスの方だ。

エ「ふん!!」

エラクウスは素早く俺の懐に踏み込み、キープレードをふりおろす。
だが、俺は飛んでいることを忘れずに。

普通に俺はエラクウスの攻撃を紙一重でかわし、空中に浮いた。

エ「あまい!!」

エラクウスは俺にホーリーらしき魔法を放つ。

それを俺は持っている剣で斬り裂き、攻撃を防いだ。

エ「どうした?防いでばっかりでは私に攻撃できないぞ?」

挑発のつもりか？それとも誘いか？まあどちらにせよ…

零「その誘い…のるぜ！」

黒い弾幕をエラクウスに放つ。対してエラクウスは当然のように防ぐ。上等…いいぜ。これから貴様に敗北の二文字を送ろう。

俺は一気に急降下し、エラクウスに勢いを武器に剣をふりおろす。

エラクウスはかわせないと見たか、キープレードでそれを防ぐ。

だが、力勝負では勝利は目に見えていた。

エラクウスは反動で後ろへ吹き飛び、足で踏ん張り倒れるのを抑えた。

もう隙だらけだ。当然のように俺は追撃をかける。

が…

そこにはエラクウスはいなかった。

エ「油断は禁物だ！」

後ろか…

エラクウスはキープレードをふりおろすが、左手に剣を出現させ、防いだ。

殺気をエラクウスに飛ばし、エラクウスを威圧する。

不味いと判断したのか、エラクウスは大きく後ろに跳んだ。

零「…やるね。」

エ「レイトもな…」

まさか、人間相手にこれ程までもつとは思っていなかった。

まあ当然か。マスターだし。とにかく確認出来たのが死亡フラグではなさそうだ。最初はビビったけど戦ってみると意外にも普通だった。

けど、これで終わりだな。

零「だが、俺の方が強い。」

ア「！！？（マスターと対等に戦ってる様には見えるが、実際マスターが押されている。しかも、マスターは肩で息をしているのにレイトは汗すらかいてない！？しかもあの発言…まさかあれは手加減して戦っていたとも言っの！？）」

テ「！？（まさか…俺はあんな化け物を相手していたとは…負ける筈だ。今なら分かる…勝てる訳がないと感じてしまう…）」

ヴ「あ…ああ…（あり得ない…レイト、君ってもしかしてキープレードマスター？）」

さて、そろそろ始めるか。

この俺の能力の力…

“ 剣を司る程度の能力 ”

一見別に強くもなければ弱くもないと見えるが、俺は操るじゃない。司るだ。この能力の恐怖を教えてやろう…。

殺気を解放し、俺はざっと十本の剣を背中に浮かせた。

くエラクウス side く

信じられない…

その言葉しか浮かばない。

私は、これ程の強敵と手合わせしているのか…

やはり何処かで慢心していたのか？

私はキープレードマスターだ。

その言葉が原因で相手の強さも見切れぬ者になってしまったとは…

これはあくまでも手合わせ。本場ではない。まず死ぬことはないが、頭の中ではこのことが流れている。

奴には勝てない

確実に殺される

今すぐ逃げろ

彼には失礼だが、世界が拒んだ理由が頷ける。

本当に化け物ではないか…。

彼は剣を左手に一本、右手に一本、そして新たに出現させ、背中に剣が浮いていた。計、十二本の剣があった。

まったく、恐ろしい。

私はキープレードを構え、戦闘体制をとる。

くエラクウスendく

さあ、どこまで耐えられるかな？

エラクウスは戦闘体制をとっている。へえく？あの殺気に耐えたんだ。

じゃあそう簡単に壊れないよな。

先手は俺がうった。

エ「!？」

一撃目は防いだ。が、防がれたと同時に蹴りを放つ。

エ「グハッ!？」

エラクウスは吹き飛び、なんとか着地は成功。

俺は追撃はかけず、背中に浮いている剣を操り、エラクウスに向けて放つ。

エ「なんの…まだ!!」

キーブレードで剣を弾く。だが、これが運のつき。弾いて剣に意識が向いたときに俺は全力でエラクウスに駆け、エラクウスの首筋に剣を構える。

それと同時にエラクウスに弾かれた剣もエラクウスの周りを囲むように刃をエラクウスに向けていた。

…やっちゃった…畜生。能力の影響で若干フランドール化しちまつたよ…はあ…

エ「…私の負けだ。」

白黒は見ての通りだ。

エラクウスはキーブレードをしまった。

俺もいい加減剣をしまうか。

零「いやゝ能力の持たない人間にここまで戦えるとは…正直ビックリしたわ。」

エ「私も、まだまだ強くならねばならないな。マスターとして、弟子たちを導く力を持たなくてはな。」

ヴ・テ・ア「マスター…」

へえ？結構言うじゃんか。普通なら負け惜しみとか言うのについて、エラクウスはそんなキャラじゃないか。

さて、本題へ入るか。

零「それで、魔法の事なんだけど…」

エ「ああ、いいぞ。…アクア。」

ア「はい。」

エ「レイトに魔法を教える事だが、修行後でいいか？」

ア「はい、お任せください。」

エ「では頼んだぞ。」

零「改めて宜しくな、アクア。（ニコッ）」

ア「／／／」

さて、これで魔法は大丈「レイトよ、そしてもう一つ頼みがあるのだが…」

エラクウスめ…条件を付け足すとは…

エ「ついでに弟子達に稽古つけてやってくれないか？私の出す修行でレイトとの勝負も入れようかと思うのだが…」

…へ？

エ「よし、決まりだ。」

決まってねー！ー！！

マジで！？

あの勇者三人に修行相手をメニューに出す！？死ぬ！死亡フラグだ！！（当然、死亡フラグでは無いことが修行時に分かる。）

もう、どうにでもなれ！

零「よ、宜しくな、三人とも。（二、ニコッ？）」

ア「／／／」

ヴ「どこまでほれてんだよ…」（ヒソヒソ）「

テ「今のは確実に疑問系の笑顔だったぞ？…」（ヒソヒソ）「

なに話してるんだろっ…

それで、結局修行のメニューを引き受けることになった。

ゼアノートと御対面（前書き）

私は神となった…そう、私は誤字の頂点に君臨したのだ！

ゼアノートと御対面

ア「そう！レイトはやっぱり凄いよ！」

はい、零斗です。

エラクスとの勝負からはや一週間たった。

魔法もだいぶ出来るようになった。

アクアも教えて良かった的なことを言いながら教えてくれる。

今放てる魔法がファイア系の上級魔法まで放て、ブリザド系は上級、サンダー系はサンダラ“なら”放てる。

何故かサンダーは放てず、サンダラは放てる。可笑しすぎるよな。

回復魔法はケアル系が上級までいける。

そしてなんとか無理矢理頑張ったのはファイガを応用してフレアを放とうと自主トレで頑張ったらできた。

まあそのぐらいだ。ん？なんで全部魔法放てないのか？無理言うな！いくら魔力はあろうとあっちの世界とは別な魔法なんだよ！無理に決まってるだろ！

ま、それはさておき、何故かアクアは魔法を放ったんびに…

ア「じゃあ次はこれを…」

零「…までアクア。顔が非常に近いぞ。」

ア「べ、別にいいじゃない。／＼／＼そっちの方が教えてやすいんだから。／＼／」

何故か最近話したんびに、または教えるたんびに顔を近づけてくる。ってか近い。マジで近い。吐息が…って

零「な、なな何してててんだだよ！！／＼／」

耳にフア～ってする風が…体がゾワゾワってしてウヒヤッ！ってな
って…

ア「ふふふ…」

やべーアクアこんなに積極的だったか！？原作さっそく崩壊してんのか！？テラといいアクアといいエラクウスといい…無事なのがヴェンだけか…

ん～…そろそろ終わりかな。もう眠くなってきたしな。

零「今日はこんくらいで終わりにしないか？ちょっと眠くなってきた…ふあ～…」

ア「ふふ…そうね。それじゃあ今日はここまでね。」

零「ああ、おやすみ。」

ア「おやすみ。」

こうして俺とアクアはそれぞれ部屋に戻り、平和な1日が終わりを
つけた。

B
a
d

e
n
d

つてなるわけないよ。
なんで嫌な終わりがたなの！？ってか、まだ終わってないわ！！

ぶるるるあああああああ！！！！

ガバツ！！

…夢…かな？

今凄いい共演を見た気がする。

夢の内容は…

あのドラ○ンボールのセ○とあの恋○十無双のあの魔神さんとの
世界のゼムナスさんが共演してた…

恐かった…いや、マジで…本気で恐かった…。

ベットから降りて毎朝恒例の便所へ行き、しばらく踏ん張る。

ジャ〜

うん、今日は長かった。長い長い永い永井名我る戦いだった。

そして、俺はいつも通り着替え…と、ここで俺はドアに…

ボタン

ア「レイ>ボタン！<ちよっ！レイト！！」

アクアがドアを開けてきたと同時に俺はドアを閉めた。

何故かいつもアクアが朝食の知らせにくる。それはいい。いいのだが…

ア「ちよっと！なんでいきなり閉めるのよ！早く開けなさい！」

零「無理言っな！！今俺がどういう状況なのか分かるのか？着替えてる真っ最中だぞ！」

ア「そ、それなら早く言いなさいよ！／／／」

零「ってかなんでいきなり入ってくる！そして言っただな！？入る前にノックをしろと！ここ最近全てノックせずに入ってそして着替えてる姿を見られてしま…というより、なんでいつも着替えてる時に入ってくるの！？あり得ないでしょ！なんかストーカー行為でもしてるのか！？」

そうなんです。

今の会話のようにいつもいつもこのタイミングでしかも“必ず”入ってくるんだよ…“偶然”から“必ず”に変わるよ…いつもやられちゃってるから…そして俺は防衛が成功した。

ボタン！！

テ「…ついに襲いにかかったか…（ヒソヒソ）」

ヴ「アクア、多分心の準備が出来てなかったから襲わず叫んだんだと思う…（ヒソヒソ）」

ア「聞こえてるわよ！／＼わざとじゃないんだからしょうがないじゃない！／＼／」

今は朝食タイムです。

またいつものメンバーで食事を楽しんでいます。

てか、アクアが地獄耳になってきてるな。俺にはあの二人のヒソヒソ話が聞こえない。ただわかったことがアクアと騒ぎがあった時に良く話してる。ま、多分馬鹿にしていることじゃないし、アクアをおちよくってるかなんかだろう。あれ？けどそれならなんで面と向かって話さないんだ？

けどアクアの反応をみるかぎりおちよくられてるように見えるが…。

エ「レイトよ。」

そこでエラクウスが話しかけてくる。アクア達はギャーピーーギャーピーー騒いでる。きにしないで良いな。

零「ん？どした？」

エラクウスは口を静かに開く。

エ「すまないが、少し頼み事がある。」

またか。どうせ勝負とかなんちゃらだろ？

エ「いや、今回は違う。私はそのような戦い好きではない。」

零「いや、戦い好きだろ。というか、人の心をよむなよ……」

エ「それで今回は……」

しかとですか。はい、そうですね。所詮俺はこんなもんですよ。（

……ω……）

エ「客人が来る。その目的はレイトと話がしたいそうだ。」

なんだ、そんなもんか。

このときはまだわからなかった。それが素晴らしい死亡フラグ（？）が立つことを。

零「で、そいつはだれ？」

エ「……マスター・ゼアノートだ。」

……………。

零「……………」

エ「……………」

虚しい沈黙が続き、それをかちわるかのように俺は……

零「人生オワタッ（^o^）」

…狂いました。

流石のアクア、テラ、ヴェントスも零斗を止めにかかる。

しかし

エ「どうしたのだ！？しっかりするのだ！」

零「かるかるかるかるかる……」

ヴ「レイト！レイト！！」

零「Summerはグリコに限る。（´・ω´・）+」

ア「レイト！目を覚まして！」

零「ペポラピプバペ！」

悲しいことに誰も俺を止められなかった。

さらに

??「…儂にあうのがそんなに嫌じゃったか？」

そこにはマスター・ゼアノートが既にいた。

ゼア「…エラクウスよ、さすがに傷つくぞ。」

エ「レイトー!!」

一時間経過。

やっと俺の暴走がおさまった。ゼアノートも俺の暴走をおさえるのに手を貸したらしい。

そして皆は鍛練を始めていて邪魔にならないように俺とゼアノートは場所を移動して庭にいる。

零「それで、お前がゼアノートか。先程はすまない。」

ゼア「いや、いいのだ。そもそもここに異世界とやらから来た者がおると聞いて会いにきたのは僕のほう。それに、こちらが悪かった。」

正直、あまり話したくはない。どうせ、闇がなんちゃらで印象を良くしようとかなんちゃらだろうな。

会話はちゃんと答えている様で実は余り良く思っていない話し方で対応した。

（ゼアノートside）

…不思議な奴…

その言葉一言で言い表せる。

レイトとか言った。そいつは普通に会話しているように見えて事実、僕を嫌っている。

やつの瞳は、まるでこれからおこる“全て”を知っているようだ。

更に付け加えれば奴の心が不気味だ。

奴は、奴の心は“一般的”な心だ。

光もあり、闇もある。だが、大抵の奴は闇にうぼれたりする。怒り、憎しみ、欲望…そして人はそれが徐々に大きくなり、闇にのまれる。

だが、奴は違う。一般的だが一般的ではない。

光と闇の両立、まさにこの光と闇の関係が崩れることがないかのような心…

その気になれば闇にのまれることもなく、闇を扱えるかもしれない。あと一つ、奴しか持っていないものがある。奴は本当に人か？何故かやつを見ているとそう思う。

何百年も行き続けている様な存在だ。歳を重ねる程力をつけてくる。そんな感じがする。

…とりあえず試すか。

（ゼアノートend）

…何かの力を感じる。

ゼアノートからか？多分奴は俺を試す気だろうな。

この闇の力…成る程、ハートレスか。

闇の心に染まった存在ってどこか。

闇を操れるのならばハートレスを操れて当然か。

いいだろう。俺の力、“剣を司る程度の能力”を見て絶望するがい。

すると黒く、小さい四本足で歩く？ハートレス、シャドウが出現した。

ゼア「!？」

ゼアノートは驚いたようなふりをする。演技は完璧だな。普通に見たら誰だって奴は怪しいとすら思わないだろうな。

俺は剣を出現させる。

零「…弾幕勝負の始まりだ。」

雑魚の集いだけあって群れでこうどうするんだな。呆れた。

先手をとったのは俺だ。

零「…雑魚は何匹集まっても所詮雑魚。」

剣をシャドウの群れに次々にふりおろす。

斬られたハートレスは消滅していく。

零「悪いが、貴様らには俺の練習相手になってもらう。」

この世界で習った魔法を使う。

零「…『フレア』。」

すると巨大な赤い弾幕が飛んでいき、シャドウの群れにあたる。爆発した反動にて周りのシャドウも消滅していく。

零「…終わったのか？」

剣をおさめようとした時、またゼアノートから闇の魔力が感じられた。

すると、現れたのは俺の影だった。

あの戦闘をしていた時の武器を構えていた。

零「…少し抵抗感があるが、やるか。」

そして俺は本格的に戦闘を行うことにした。

零「…さあ、避けられるか？」

俺は空中に浮く。

すると影も浮いてくる。うざったい。

魔法の練習をしていたので弾幕も上手く使えるかもしれない。

俺は黒い弾幕を放つ。

ここに来た時より断然良かった。隙はなくすることはできていた。

が、影は避けている。うざったい、ああうざったい。

影は俺に近づき、無理矢理剣を俺にふりおろした。

当然の如く攻撃を防いだら。どうやら俺の力を三割…二割程度真似ているのだろう。

避けるのは随分出来ている。ならば…

俺は影を弾きとばし、距離をおく。

零「…慌てろ、『重なりし絶望』。」

剣を一本投げつける。そして俺の剣は、二本、四本、八本…と増えていき、相手を追い込む。

影は焦っているのか、だが避けていることは避けている。

剣を消滅させ、背後に移動する。あれは見せかけで、別に当てても良かったが、なんとなくあれが出したい気分だった。

零「…おもしろい、『ブレードマスター』。」

手をかざすと一直線に大量の剣が出現し、影に当たる。

影は剣によって遠くへ押されてそして地面に倒れた。そして追い討ちの如く一直線につながっている剣を操り、影へ飛ばす。

俺の能力で剣をあやつり、影にぶつかる剣が爆発していく。

影は倒せたが、向こう側をみると巨大クレーターが…やっちゃった。

ゼア「(。A ;)」

ゼアノートは果てしなくびびっていた。

零「ゼアノート？終わったぞ。」

ゼア「(。A ;)」

…駄目だこりゃ。

ゼア「はっ!？」

やっと意識が戻ったゼアノート。少しビビらせるつもりだったんだがな…。

ゼア「い、いやぁ実に素晴らしい戦い…儂の手を出す前にかたずいてしまった…。」

絶対嘘だ。もう嘘とわかりきっているがとりあえずわからなさそうに対応するか。

零「そりゃどうも。で、用とはなんだ？」

ゼア「いや、異世界から来た奴はどんな奴か見たかったただけだ。今日は帰らせてもらおう。」

ゼアノートが階段を降りていく。俺はゼアノートにぎりぎり聞こえる程度に話す。

零「…余計なことはするなよ。」

ゼア「!?!」

ゼアノートは振り向いてきたが、俺の方から今度は去るようにならなく、クウスの元に去った。

絆、結ばれる（前書き）

更新遅くなりました。すんません。あまり自信ありませんが、ご覧
ください。

絆、結ばれる

零「……………」

俺は今、ベッドの上に寝転がっている。窓から夜空を見ている。

零「……フラン。」

ボオーツとしているとどうしても前の世界の事を思い出してしまう。

フランドール・スカーレット、今の俺なら少し、君の気持ちがわかる気がする。

俺は彼女と同じで、能力故に拒まれた。だが、俺はまだましな方だな。

彼女は俺と違って閉じ込められていた。まだ俺は幸せな方だな。

…止めよう、前の世界の事を考えるのは止めよう。だが、なんだか気持ちがいまいちよくない。

……………。

雲ひとつなく、星が数倍輝いて見える。

ん？流れ星か…。

丁度いいや。気晴らしだ。外にでて流れ星でも見に行くか。

すこし風通しがいいな。結構涼しい。

丘に向かおうと階段をおりていったらヴェンが走って更に下の階段を駆けおりていくのが見えた。

多分ヴェンも流れ星かな。

しかし流れ星多すぎない？綺麗だから許すけど…やっぱり不思議だな。

階段をおりていき、遊び場らしき広場を空を眺めながらゆっくり歩いて目的地へ向かった。

目的地についたら既に先客がいた。ヴェンは勿論、テラもアクアもいた。

3人は夜空を見上げており、俺の存在に気付いていないみたいだった。

零「三人も夜空が目的かい？」

三人は座っており、その後ろに俺は立ち止まり、声をかけた。

ヴ「あ、レイト。レイトも流れ星を見に来たのか？」

三人は振り向いてきた。

零「ああ、まあな。窓を眺めてたら丁度流れ星が見えたからな。」

ア「どう？この世界の星空は。」

アクアが聞いてくる。

零「こんな星空は初めてだな。とくに流れ星が。」

ア「ふふふ。」

アクアが軽く微笑む。本当にアクアってこんなキャラだったか？

ヴ「いよいよ明日だね。」

明日？なんかの集会か？

零「なあ、明日ってなんかあったっけ？」

テ「レイト知らなかったのか？明日は俺とアクアのキーブレードマスターの承認試験だ。」

あ！忘れてた。そうだったそうだった。

零「ごめん、忘れてたわ。じゃあ見に行かなくちゃな。」

ヴ「じゃあ一緒に応援しに行こうか！」

零「そうだな。特にテラ、お前はうからなくちゃだめだぞ！なんつったってうかつてもらわなくちゃ俺が教えたかいが無いからな！期待してるぞ！！」

テ「ああ、任せろ！！」

しばらく俺達の雑談が続いた。

この時間、凄く楽しいな。本当に何年ぶりだ？ただの（？）人間と話したのはな。もやもやが消えるというか…人間に恐れられないなんてな。

ア「そうだ。忘れちゃいけないから…。」

アクアがいきなり立ち上がり、ポケットをあさる。

ア「さっき話したように明日はテラと私の承認試験でしょ？」

そして取り出したのが…

ア「お守り作ってきたの。」

四つの星の形をした…なんだろう、花？いや、やっぱり星であって
るのか？

その飾り物らしき物は青、緑、オレンジ…かな？そして…銀色。

そしてテラ、ヴェン、俺という順番で立ち上がる。

テラにオレンジ色、ヴェンには緑色が渡された。

ヴ「俺にもくれるの？」

ヴェンは驚いてアクアに聞く。

ア「勿論。それと、レイトにも。」

俺は銀色が渡された。このかざりは…たしか…

零「アクア、俺にもか？」

ア「うふふ…当然よ。貴方だけ渡さないなんて何処の意地悪さんよ。」

笑いながらアクアは答える。結構嬉しいな。

本当に感謝の気持ちをこめて

零「アクア、ありがとう（ニコッ）。」

満面の笑みで答える。

ア「…／／／」

アクアが赤い顔をして俯く。照れてるのかな？

零「とりあえず、みんなおそろいだな。」

銀色の飾り物を手に持って前にだす。

ヴェン、テラ、アクアもそれと同時にそれぞれの飾り物を前にだす。

零「…こうして改めて見ると本当に綺麗だな。」

テ「そうだな。…くく。」

テラが笑いを堪えながら話す。

零「ちょっと待てよ！なんで笑い堪えてんだよ！」

テ「だってな……くく……レイトの口からその……綺麗だななんて……」

ヴ「確かに……はははは。」

それにつられてヴェンも笑いだす。おい、結構傷つくぞ。

零「それよりさ、なんでこの形にしたんだ？」

話をそらさせ、アクアにたずねた。

ア「それは、この世界の何処かに星形の実をつける木があつて、その実はつながりの契りになるんだつて。そして、その実を貝殻で模したお守りを持っていると、例え離ればなれになつたとしても必ず再会できるらしいの。」

成る程、つまりパオプの実に似せて作つたんだな。

ア「本物の材料は手に入らないからそれっぽく作つてみただけなんだけどね。」

へえ？しかしいいできだな。パオプの実よりもこっちの方が俺はいいな。

テ「そういうところは女の子なんだな。」

からかいなのか、ま、そうでなきゃあり得ないな。つてか、そういうところつて、こっちはまだ可愛い方じゃん。あっちなんて戦える奴がたいてい女だぞ？あ、あっちつて東方の世界のことだぞ。

ア「そういつとこってなんなのよ？ねえ、レイトは違うよね？」

零「俺は普通に可愛い女の子に見えるが。」

ア「か、可愛い…／＼／」

ありゃ、俯いちゃった。そんなに嬉しかったか？

テ「レイトって本当に鈍感だな。はっはっはっは。」

笑いながら俺に話してくる。鈍感？別に鈍くないぞ、俺は。いつも鍛えてるし。

ヴ「…本物じゃないと効果ないの？」

ヴェンが話しかけてくる。不安そうに。

ア「うーん、効果はまだわからないけど魔法をかけておいたよ。」

ヴ「え！？どんな？」

ヴェンがくいついてくる。まったく、俺は一応わかったぞ。その魔法。

ア・零「“繋がり”だよ（だろ）。」「」

俺とアクアの声が重なる。テラはよくわかったなって顔で見てる。そしてしばらく俺らはそれぞれのお守りを見つめ、沈黙の時間が続

く。

そこを割るように俺は語り始める。

零「繋がりか… ってことは、“繋がりのお守り”だな。」

ア「そうね。… うん、いい名前だね。」

テ「名前つけるセンスもあつたんだな。」

ヴ「繋がり、か。」

アクア、テラ、ヴェンと続く。おいちよつとまで、テラさんよ、何故そこまで意外そうな顔してんだよ。

零「あ、そういえばこの形の木の实、一応知ってるぞ。」

ヴ「え！？どんな実なの！？」

ア「私も気になる。」

テ「で、どんな実なんだ？」

約一名、かぶりつき度がハンパないな。

零「その木の实はパオプの実って言って、その木の实はアクアの言
つてた様に星形なんだ。その実を二人で食べあわせると、その二人
は例えどんなに離れていてもいつか必ず結ばれる。そんな感じだな。」

ヴ「へ？さっき言ってた二人って…。」

零「ああ、正解。恋人同士が食べさせあったりするな。」

ア「こ、恋人…／＼／」

ほら、アクアってこんなに女らしい。恋人に憧れて頼った真っ赤にして俯いてる。

零「な？アクアも女の子だろ？」

テ「…どこまで鈍感なんだよ…。」

呆れてなんか言うテラ。別に気にしないけどな。

ヴ「だったら、このお守りの意味も少し違ってくるんじゃないか？」

零「そんなことはない。アクアが俺達の心の絆、親友の証として作ってくれたんだから。」

ヴェンの質問に答える。

テ「親友、か。そうだな。俺達は親友だな。」

ア「うふふ、そうね。」

零「まさに“繋がりのお守り”だな。」

俺は銀色に輝くお守りを上に掲げる。

それに続き、ヴェン、テラ、アクアもお守りを上に掲げる。

この瞬間、俺はこの世界で初めての親友ができたのであった。

おまけ

部屋に戻り、今とても大変な戦いを繰り広げている。

トイレで。

零「うゝうゝうゝ…腹冷えた…畜生。」

グギョルギョル

零「うゝ…!?マジで危ない…なにか食ったわけでもないのに…出

すもん全て出したのにまだ腹いてえ……てか、何故腹鳴る？おっと、今はそんなこと……」

グギョルギョル

零「うゝうゝうゝ……！」

旅立ち（前書き）

最後の方が少し雑になってしまったと思いますが、ご覧ください。

旅立ち

朝日が窓からさしこんでくる。

目が覚め、ベッドからおりる。

さて、今日も素晴らしい一日が始まる。今日もいっちょ頑張るか。

とその前に、朝の始まりはいつも…

トイレから。

ジャ〜

やっぱり爽やかな俺は無理だな。どうやっても朝の爽やかさを出してもトイレで全てがぶち壊れる。はあ、やっぱり向いてないのかね。うん、俺は気にしないがな。うん、気にしない。

さて、今日は遂にあの二人のマスター承認試験だな。原作だとアクアのみだが、俺が稽古つけてやったから多分大丈夫だろう。

そして試験会場（？）へとむかった。

なんかスキップしすぎだな、今回。

只今ヴェンと一緒に試験会場らしい、玉座…っていうのかな？とにかく、それがあある部屋の隅っこに立って、その中央にテラとアクアがいる。

玉座（？）にはエラクウスとゼアノートが座っている。俺は一応原

作知ってるが、俺というイレギュラーがいるからどうなるかわからない。多分俺が加わって原作にはそるようになってると思うが…。

ヴ「レイト、テラとアクア大丈夫かな？」

ヴェンがソワソワしながら俺に話しかけてくる。余程心配なんだろうな。ってか、普通逆じゃね？テラとアクアが普通ソワソワする方じゃね？ま、そんなことじゃ試験うけるまえから悲しい結果になるのはわかってるんだろうけどな。

零「ヴェン、あのふたりなら大丈夫だ。俺達で修行したじゃんかな。」

ヴ「…ああ、そうだよな。そうだよな。そうだよな？」

…どれだけ心配なんだよ…繰り返し言葉を使うし、最後だけなぜ疑問？

零「ほら、始まるぞ。」

エラクウスが玉座（？）から立ち上がり、テラ、アクアに近づく。

エ「…これより、マスター承認試験を行う。」

玉座の近くには三段程度のわずかな段差がある。アクア、テラは上にいるエラクウスを軽く見上げてこれから言うことの話しを真剣に聞く。

エ「此度は候補者が二人であるが、いずれかの優劣を問うものに非ず。」

……ん？あ！！マジか！？今思い出した！俺のやり方はただ単に強さを上げるだけだった！そうだった！

あるえ？てことは俺が二人とやった稽古って…無価値？いや、価値はあるだろうな。けど、あまり必要じゃないだけだ。マスターになったら強さは必要だからな。うん、そうだ。無価値はない。

エ「キーブレードに選ばれし者としての心のありようが試されるものである。この久しい若きマスターの誕生に際し、幸いな事に遠方よりマスター・ゼアノートが足を運んでくれた。」

幸い？不幸の間違いだろ？原作知識という言葉は何回も使いたくないが、これでゼアノートがいろいろいる邪魔すんだよな。いや、邪魔っていうのかな？ま、とにかく邪魔してくるんだ。

ゼアノートが軽くお辞儀をする。そして、本当に軽くだが俺のことをチラッと見た。

俺って魅力的？

いや、冗談はよそう。多分警戒かなんかだろう。あんなこと言ったんだかな。

エ「二人とも心して臨むように。」

テ・ア「はい。」

これは緊張するな。今ならヴェンの気持ちも分かる気がする。

エ「では始めるとしよう。」

エラクウスはキープレードを出現させ、構える。

そしてキープレードに魔力を送り、光の玉をいくつか出す。

テラとアクアもそれぞれのキープレードを構え、戦闘体勢をとる。
というか、なんで三人は武器を自分の体より後ろで構えるんだろう
…テラとアクアは構えが似ている。というか、三人の中で計算して
戦うってアクアしかないかも。

それとヴェンってなんで逆手持ち？いや、別にいいんだけどせめて
体より前に構えればいいのになんで後ろ？隙がありすぎだよな。

さて、俺の感想はともかく、試験が始まった。

しかし、やはりと言うべきか、ゼアノートから魔力が感じられる。
部類は闇。闇の魔力を光に送り込んでるのがわかる。

さてさて、どうなるか…。

光の玉が暴走を始める。

テラとアクアは一瞬戸惑ったが、光の玉をそれぞれまず一つと撃破
する。

すると光の玉が俺とヴェンにも向かってくる。

ア・テ「ヴェン！レイト！」

ヴェンもキープレードを構える。さて、俺もいつも使っている剣を

だすか。つつても、普通の剣だな。いや、今回は長剣にしよう。

俺は右手に深紅に染まった長剣を出現させた。

ヴ「はあああ！」

向かってくる光の玉をヴェンも撃破する。

零「…雑魚。」

俺は素早く動き、とりあえずヴェンと俺に集まってきた光の玉を撃破させる。

ヴ「俺達の事なら大丈夫。」

本当に大丈夫か？

零「テラ、アクア。今は試験中だぜ？とにかくヴェンは俺が守るから平気だ。」

ア「でも、ここにいたら危ないわ！部屋に戻って待ってて！」

はあ、俺って意外に弱い様に見られてる？いや、それはないな。

ヴ「嫌だ！俺は楽しみにしてたんだぞ！テラとアクアがマスターになるのを、この目で見届けたいんだ！」

まあまあだな。なかなかいい台詞だったぞ。

テ「ヴェンなら大丈夫だ。俺達と一緒に修行してきたんだからな。」

ヴ「うん！」

テラとヴェンの会話…そして、俺が出てこない。畜生。いつそのこと、この光の玉全部俺が殺ろうか？いや、駄目だな。止めとこう。

零「大丈夫だっていったろ？それとも、俺の言った言葉、嘘に聞こえたか？」

テ「そうだな。ヴェンは確実に言って良いほど安全だったことを忘れてたな。」

テラは若干笑いながら俺に話す。

零「さあ、お喋りはここまでだ。くるぞ！」

それと同時に光の玉が襲いかかる。

テラとアクアは光をほぼ順調に倒していく。

問題は…

ヴ「はあああ！うりやあああ！」

ヴェンだ。いくらなんでも突っ込み過ぎだ。キーブレードを振り回し。光の玉を切り裂いてく。一応技と速さがうりなヴェン。だが、やっぱりまだまだ未熟。

ヴ「うわっ！？」

どうやらステップ踏むときにちょっとつまずいたらしい。ヴェンはこけて、それを好機と言わんばかりに突っ込む光の玉。

零「ヴェンに触れるなよ？」

ヴェンを囲んだ光の玉を斬り裂く。手応え無さすぎる。抵抗を見せるよ。

零「突っ込み過ぎだ、少しは自重しろ。」

ヴ「ご、ごめん。」

ヴェンは俯き、自分の失態にきずいたようだ。

俺は手をさしのべる。

零「ほら、早く立て。試験、最後まで見たいんだろ？」

ヴ「ああ。」

ヴェンは俺の手を素直に受け取る。立ち上がり、そして光の玉とまた戦った。

あれから数十分経過、光の玉は完全に無くなった。

俺とヴェンは元の配置き戻って、テラとアクアを見る。

テラとアクアも元の配置に戻り、次の指示を待つ。

するとエラクウスが話し始める。

エ「不測の事態であつたが、いかなる状況においても心を平穩に保てるかを試すいい機会であつた故、あえて止めなかった。…試験を続けるでしょう。」

エラクウス、結構考えてるな。さて、次はなんなのかな？

エラクウスは配置を指示し、次の試験の説明をする。

エ「次に、テラ、アクアの二人の立候補者同士の模擬戦を見せてもらう。勝敗は問わず。能力がきつ抗する相手と相対した時こそ、心は浮き彫りになるのだ。」

テラとアクアは互いに構える。

エ「…始め！」

二人は一気に駆け出し、キープレードを交える。

テラはどちらかと言うと野生本能的な戦い方をする。とにかく、強大な力でねじ伏せる。

一方アクアは相手の動きを読み、力が無い分、勢いを利用して戦ったりさせる。つまり、今やりあっている戦いは空手と合気道が戦ってる様なもの。

確かにテラは強い。だが、強いだけだ。本当に力任せの戦いなら多分勝てるだろう。

そして今の状況はテラが連撃を出す、アクアは避けたり勢いをそえるような感じで防ぐ。そしてわずかな隙をつく。

今度はテラが押され始める。

テ「ぐ！」

アクアは勢いにのり、ヴェン程ではないが素早い動きでテラに攻める。

そしてこれは無理だと判断したのか、いったん距離をとる。

少し焦ったのか、テラは自分の拳を少し見て、再びアクアとぶつかる。

しかし何故拳を？あ、心がなんちゃらってやつか。ついつい俺は戦いに夢中になっちまってそこをよむのを忘れてた。

しばらくし、そして試験が終了した。

少し訂正があった。先程の空手と合気道ってやつ、流石に言い過ぎた。

そしてまた再びテラ、アクアは元の配置に戻り、結果を待つ。

エ「承認試験の結果を伝える。」

この瞬間、なんか静電気が身体にはしつたような、ピリピリした感覚が…。

エ「テラ、アクアともに優秀であったが、此度は、アクアをマスタ―として承認する。」

ガビン！まではいかないか。まあ驚き程度だろう。テラは悔しいのか悲しいのかわからない顔をしている。

エ「テラは心の闇を制御する力が不十分であると判断した。」

成程、あの模擬戦でテラのとった不思議な行動（つつても自分の拳を見ただけだが…）が闇がどうたらこうたらだったのか。

エ「更なる修行と精進に期待する、以上だ。」

テラ、多分相当心に傷ついた様だな。

エ「アクアはキーブレードマスターとしての心得を伝える故、しばしここで待つように。」

マスターの二人が去っていく。

それと同時に俺、ヴェン、アクアがテラに駆け寄る。

ア「テラ…。」

ヴ「俺は、テラも…。」

零「……。」

話せない、今では何を言ってもテラの心に傷つけるだけだ。

テ「俺の心に…闇…。」

しばらく沈黙が続く。

そして…

テ「すまない、一人にしてくれ。」

テラはこの場を去った。

ア「………。」

ヴ「………。」

こちらもこちらでなんか嫌な空気が流れる。

零「アクア、まずは試験合格おめでとう。」

ア「…私一人がなっても……。」

だよなあ。仕方がない事なんだが…。

アクアの肩に手をおく。

零「まずは自分の事に集中しろ。アクア、テラは俺が何とかする。」

そついい、テラが向かった庭へと駆け出した。

くテラ side く

…俺の心に闇があるだと？

俺はマスター承認試験のあと、ついムカツときてしまい、今、庭の階段に腰を下ろしている。

…闇がある、だからなんだっていうんだ！

俺は異世界からきたとても強い親友、レイトからにも戦い方を教わってきた…

テ「…俺には心の闇に負けない力がある。」

??「そつだ。」

声に軽く出してしまった。だが、それに反応する様に…

マスター・ゼアノートが返答してきた。

振り向き、マスター・ゼアノートを見る。

ゼア「お前には力がある。」

マスター・ゼアノートが階段をおりてきて、俺のところにくる。

ゼア「闇を恐れる必要はない。」

テ「マスター・ゼアノート…。」

改めて認識し、声に出してしまった。

ゼア「だが、エラクウスは決して闇を認めない。」

確かに…そうだ。

ゼア「このままエラクウスの元で修行を続けてもマスターになれるかどうか…。」

テ「教えて下さい！マスター・ゼアノート！俺は何を学べば良いのですか？」

声を出してしまった。俺は感じた。この人は、俺の力をどう扱えば良いかしている。そう感じた。だから俺は知りたくなり、マスター・ゼアノートにたずねた。

ゼア「…そのまま良い。」

だが、返ってきたのはこの言葉。俺が期待していた言葉と全く違った。

ゼア「心の闇を消すのではなく、力で制するのだ。」

マスター・ゼアノートは俺のもとを通りすぎ、歩きながらも話す。

テ「はい、マスター・ゼアノート。」

それと同時に鐘が鳴った。なにがあったのかと急いで俺は城へ戻った。

くテラendく

……ゼアノート、あれほど余計なことするなと言ったのに…。

俺はテラを追い、外にでたらテラとゼアノートがいた。そして話し終わった後、鐘が鳴った。テラは階段をかけのぼり、ゼアノートは闇の空間を開いて去っていった。

はあ、便利そうだね、それ。確か闇の回路とかいったかな。

テ「!? レイト!?」

テラは俺の存在に気付きつつというか、隣にいるんだけどね。

テ「なにかあったのか!?」

多分鐘のことかな。

零「さあ、わからん。とりあえず中に行こうか。」

そして俺とテラは城の中に入っっていた。

試験会場だった場所にアクアがいた。

俺達はアクアにかけより、聞く。

零「なにかあったのか？」

ア「わからない…。」

はい、即答。こん畜生。

ア「…ヴェンは何をしているの？」

あれ？確かにいないな。どうしたんだろう…。

エ「では、私の弟子達を調査に向かわせましょう。」

エラクウスは玉座の後ろで壁と話している。遂に頭が逝ったか？いや、それはないな。多分誰かと話してるんだろうな。

エ「うむ、承知いたした。失礼する。」

どうやら話がすんだようだ。

エラクウスが俺らのところにくる。

エ「…私の古い友人、イエン・シッドはマスターからも身を退いた後も、絶えず光と闇の動向に目を向け、我々キープレードの使い手の進むべき道に標を与えてくれている。」

イエン・シッドって誰だっけ？ま、いつか。とりあえずそのイエン・シッドとかいう奴がいるということにしとこう。

エ「そのイエン・シッドからの報告では、光のプリンセスに脅威が迫りつつあるという。」

光のプリンセス？どこぞのハオー・ポッオーだよ…。え？聞き違い？あ、本当だ。プリンセスだった。

エ「しかも、その脅威は闇だけに非ず。言うなれば、負の感情にのみ芽生え溢れだす存在、イエン・シッドは此を生命に精通しない者、“アンヴァース”と称した。」

…動き出したか、ゼアノート。俺も旅時かな？

エ「キーブレードの使い手として、光に侵食し闇との均衡を崩そうとする脅威、アンヴァースを放つてはおけない。また、この凶事を伝えようとしたが、マスター・ゼアノートとの連絡が途絶えた。この事態と無関係だとは思うが、嫌な予感がする。」

ゼアノート、か。あれ？結構昔にやったから忘れたよ…なんかゼアノートに引っ付いてた奴、いたよな？誰だっけ…ってか、記憶を本当に頑張っ探ってるぞ。正直きつい。

零「つまり、俺達にこの事態の収拾に努めてもらいたい、と？」

エ「うむ。だがレイトよ、お前にも行ってもらいたいが、他の世界に行く手段がない…。」

…確かに。

零「まあ何とかなる。俺はこれでも長年生きているから闇にのまれるなんてことはないから。あと、空も一応飛べるんだぜ？だから、その手段をこの二人に…いや、見てできると思う。」

エ「……本当に大丈夫か？」

零「ああ、大丈夫だ。」

心配するのも無理はない。だって仕方ないよな。

まあ、闇の回路…想像で任せてできるかな？

確かゼアノートは魔力を集中さすてる感じがした…そして手をかざ

す。

すると、あら不思議。闇の回路ではなく、異空の回路が扱えた。

ア・テ・エ「……。」「」

まあびるよな。そりゃ、誰にも教えてもらってないからな。え？
なんで異空の回路だってわかったかって？なんか原作知識がだんだ
んよみがえってきたんだ。

零「ゼアノート搜索と、アンヴァース討伐だな？」

エ「あ、ああ。」

零「わかった。じゃあ行ってくる。」

そして異空の回路に足を踏み入れた。

さて、旅立ちの始まりだな。

ドワーフ・ウッドランド(前書き)

フラグ(?)がたったぜ!さあ、今回はちょっと…てな場面がある
かもしれませんが、ご覧ください!

ドワーフ・ウッドランド

…旅立ちの地を出た俺は、今…物凄く困ってます。

はい、ちゃんとね、他の世界に着いたんだけどね、え？どうやって来たんだって？俺、一応空飛べるんだぜ？さらに異空の回路をわたったんだけど、あんまりたいしたことなかったぜ？

おっと、それはさておき、今、何故困っているかというところ…。

??「あら？目が覚めた？」

…いや、何故？

俺は、誰だかわからない女の人に、膝枕してもらってます。

それも、気が付いたらですよ。

はい、はい。どうやら俺は異空の回路から出てくる時に、丁度ね、岩の目の前だったんです。

俺の飛んでる体制がね、たまたま愛と勇気だけしか友達がない孤独な孤独なア○パ○マ○の形になっていたわけで、それでね、いちよゴチーン！っと頭ぶつけてね、それで目をあけたら、ね。いや、違うんだよ。もっと早く気絶から回復してたんだよ。けどね、あまりにも気持ちよくて…って何言わすんだよ！

そんで目をあけたらね。

零「あゝ…貴女は誰でしゅか…／／／」

か、噛んだ…恥ずかしい。畜生、一生の不覚！

??「ふふふ…私は白雪、宜しくね。」

はい、白雪…え、？白雪姫??あ、そつか。キンハの世界じゃ当たり前か。

ってそこじゃねえ！

零「いやいや！あのさ、なんでこの状況なのさ!？」

白「え？貴女が気絶しているところを助けたんだけど…。」

零「いやいやいやいや！そこじゃない！今の状況だよ！ってか、貴女って、俺女じゃねえ！」

なに!?!なんなのこの子!?!天然!?!天然なの!?!やだ!危ない!

白「それより、貴方は？」

零「ああ、俺は岸帛零斗だ。零斗と呼んでくれ。って違うだろ。」

白「レイト?変わった名前ね。」

零「いや違う。発音が…ってそれも違う。もう、いいや。」

はい、俺の心が折れました。

我が心が闇に… ってならないよ。

とりあえず、膝枕の状態から起き上がり、そして立ち上がる。

零「とにかく、気絶してるところを助けてくれたんだよね、有り難う。(ニコッ)」

白「… / / /」

… 何故か俺が微笑むと顔を俯くんだよ… アクアもそうだったし…。

零「さて、ねえ白雪さん、まずはここが何処か教えてくれる？」

白「あ、ここは…」

白雪さんが話そうとしていると…。

テ「レイト!？」

テラがきた…。

なんだ？なんだあの箱は？

まで、箱になにか描かれている… ハートの絵？そのハートがなにかに貫かれている… 気にしても仕方ないか。

白「？ レイトのお友達？」

俺がそうだと肯定しようとしたとき、俺の後ろに何かの気配…。

テ「アンヴァース!!」

テラがキープレードを出現させた。

白「きゃああああ!!」

テラの行動に白雪が驚いて、襲われるのかと思ったのか、何故か俺に抱きついてきた。

いや、白雪さん、止めてくれない？女性特有のものが当たっているんですけど…勘弁してくれ、これじゃあ戦えない…。

零「テラ、この場は頼む。ちょっと俺は戦えない状況だから。」

テ「ああ、わかった。この場は任せろ!」

さて、白雪さんをどうするか…。

ち、仕方ないか。

零「白雪さん、力を抜いて。」

白「え？ひゃっ!?!?!」

いわゆるお姫様だっこだな。

そして俺は森の方へと逃げていった。

ふう、なんとかなった。しかし、迷った。

考え無しに突っ込んだ俺が馬鹿だった。今さらながら後悔した。

なんか薄気味悪い森に迷ってしまった。はあ、畜生。

まず、白雪さんをおろさなくちゃね。

零「よいしょっと、大丈夫か？」

白「え、ええ…／＼／」

うーん、何故俯く必要があるんだ？ねえ、読者の皆さん、教えてくれる？なんかの前兆？

え？俺が鈍感だつて？なに言ってるんだ？いつも修行しているから鈍くないっての。ほら、いつも修行してるからなにか近付いてくるのが普通にわかる…え！？近づいてくる！？アンヴァースか！？

零「白雪さん、魔物が近付いてくるから俺から離れないでくれ。」

白「え、ええ。」

俯きモードから回復した白雪さんに話した。はい、それと同時にアンヴァースが出現。

まだ初級レベルだな。シャドウみたいな形をしたアンヴァースがいる。しかも結構な数がいるな。

あ、シャドウはあのゼアノートとの面会している最中に現れたあの四本足であるく黒い奴のこと。今回はそいつが紫色に変わって登場してるみたいな感じの奴がきた。アンヴァースにも種類が沢山いるからな。まだまだこいつは雑魚。

ま、雑魚なぶん、群れで行動しているのは褒められるな。

零「白雪さん！俺から離れるな！」

俺は今回は大剣を出現させた。いや、本当に大剣だよ。だっていつも普通の、ごく一般的な剣を大きくしただけのやつだもん。

アンヴァースが俺に飛び付いてくる。可愛いねえ。今回はいっぱい遊んであげるよ。

大剣を大きく横に一振り。何匹かは地面に潜ってかわされたが、まあ一応なぎはらった。

しかし、ハートレスのシャドウみたいに軽くやられてくれないな。はあ、こいつはやっぱ小回りがきく武器にしくちな。

今度は細剣を出現させた。

この細剣は俺が作ったから特別さ。頑丈で軽い。が、やっぱ細剣だ

から力勝負じゃ打ち負ける。あ、押し負けても剣は壊れないから。

素早く動き、アンヴァースを一体ずつ確実に撃破していく。やっぱ守りながら戦うのは俺に向いていない。凄く辛い。誰か助っ人に来てくれないかなあ。

??「はああああ!!」

すると見覚えのあるキーブレードをもった少年が現れた。

いや、ナイスタイミングだな、ヴェン。

ヴ「レイト、大丈夫か!？」

しかしなんでヴェンが…今はそんなこと気にしてる場合じゃないな。

零「ヴェン、いけるか？」

ヴ「勿論!俺だって戦える!」

…流石だ。

零「んじゃ、あの子の防衛を俺と一緒にしてくれないか？」

ヴ「わかった!はあああ!!」

ヴェンはキーブレードを逆手に持ち、特徴ある素早い動きでアンヴァースを斬り裂いてく。

…本物には劣るが、俺もあれで戦ってみよう。

俺はヴェンの扱うキープレードを出現させ、俺も逆手に持ち、戦つ。

…これは驚いた。普通に持つより逆手専用に使われていたみたいだ。逆手なのに素早く動け、かつ戦いやすい。

ブーメランみたいに投げてもいけるかも。

早速キープレードを投げてみた。

凄い、思った通りにとんだ。俺とヴェン、白雪さんの周りにいるアンヴァースをことごとく殲滅させた。

ヴ…凄い、俺でもこれはいけないぞ。」

ヴェンが同じ武器で戦っている事に気付き、呆然としている。

ヴ…レイト、お前ってなに？」

いや、なんか酷い。

零「経験の差だ。」

ヴ…確かに。」

うん、納得してくれたか。そうだ、当然だ。なんつったって、ヴェンの十倍以上生きてるからな。

零「さて、白雪さん、ここを移動するぞ。」

白「……………／／／」

ん？なにポケッとしてんだ？それより早く移動するか。

白「……………え？」

さて、白雪さんの手を掴んで移動開始。

零「ヴェン、この森の抜け道知ってるか？」

ヴ「ああ、この先に小屋がある。」

零「よし、行くか！」

白「……………／／／」

俺らはとりあえずその場を移動した。

ヴ「はあ、はあ、は~~~~っきつい。」

零「だらしがないな、ヴェン。その程度で疲れるなんてな。」

俺らはそのあと、ヴェンに小屋に案内され、今小屋の中にいる。

零「白雪さん、大丈夫だった？」

白「ええ、おかげさまで。ありがとう。」

さて、ここにはゼアノートの野郎はいなさそうだし、移動すつか。
白雪さんはヴェンがいるからなんとかなるだろう。

零「ヴェン、俺はそろそろ行くぞ。俺も一応任務があるからね。」

ヴ「ああ、わかった。」

そして、俺は小屋を出ようとしたが…。

白「え？もう行っちゃうの？」

白雪さんがそれを止める。

ま、強引にでも行くけどな。

零「白雪さん、俺は一応仕事があるから勘弁してくれ。また、きつと会いに行くから（多分もう無いな）。」

白「…わかったわ。」

零「んじゃ、白雪さんのこと任せたぞ、ヴェン。」

ヴ「了解！」

会話が終わり、小屋を出る。

さて、次は何処の世界かね？

異空の回路を開き、この世界を去った。

キャッスル・オブ・ドリーム（前書き）

軽く訂正しました。本当にわずかなところなので、あまり気にしないでください。

キャッスル・オブ・ドリーム

零「ぐ、流石に疲れるな…。」

俺は今、異空の回路で大量の敵を相手している。鬱陶しい。

今回のアンヴァースはシェイドジェリーとかいうやつだ。特徴は群れで行動する事が多く、更に色々な色をしたやつがいる。

なんといつてもとにかくクラゲがふわふわ泳いでいる感じだ。姿はきのこで、頭の部分をふわふわと動かしながら泳ぐ。その姿はクラゲそのものだ。

頭の色が多彩で青であったり黄色であったり…確かそれで弱点が違ったりしいが、そんなものの気にする価値がない。量が多すぎてそんなものにしている場合ではない。

体の色は白。手と足もあった。

こいつらは魔法で戦うのはとても向いていない。かと言っても、能力を使う程のものでもない。だから弾幕で戦っている。練習ついでだし、ちょうどいい。

おかげで随分上手くなったと思う。一応レーザーらしきやつも撃てるようになった。

零「邪魔くさい…どけ！」

レーザーを放つ。よく考えたらレーザーを放つのは凄く簡単だった。

ただ弾幕を繋げて放つ。そんな感覚ですると出来る。

零「…ふう、やっと終わったか。」

随分異空の回路で時間をくってしまった。本当に。

とりあえず先を急いだ。

…どうやらついたようだ。

さて、今俺のいるのはとある誰かの一室だった。

しかし、随分とまあ粗末な部屋だ。薄暗く、部屋にはベッドと木の机、それくらいしかない。

それにしても妙だ。こんなに失礼だと思うがおんぼろのくせに、すぐちかくにあるというより俺の後ろの窓の景色は随分高い位置にあった。景色は無駄に白い王宮がある。

まあ部屋がどうかは別に気にする必要はない。それよりもっと大変な事があった。

何故…？

零「何故俺は…こんなに小さいんだ？」

何故だ、何故なんだ！また世界からの新手のいじめか！？

それで出てきたのが窓のところ。ま、落ちても別に空飛べるから問題は無いがな。

力チャ…

ん？誰か入ってきた。何処かにかくれなくて「あれ？貴方は？」…見つかった。

零「いや、あの、それは…」

？？「あら？貴方もヴェンと同じ変わった鼠なのね。」

ね、鼠？俺が？そんな真顔で言われても…傷つくぜ？

零「あの、君は？」

？？「私はシンデレラって言うの。宜しくね。」

零「俺は岸帛零斗。零斗と呼んでくれ。」

シ「レイト…不思議な名前ね。」

はあ、やっぱこの世界に俺の名前を正しく発音してくれる奴はいな

いのかねえ。

あと、何故この姿？いや、戻れるかな？多分…。

零「あ、それと俺は鼠じゃないぞ。一応人だぞ。」

シ「え？」

いや、何故驚く？あ、そうか。俺小さいからね。

シ「じゃあヴェンもそうなのかしら？」

あるえ？ヴェン？

零「シンデレラ、ヴェンも来てるのか？」

シ「ええ。来てるわよ。呼びましょうか？」

零「いや、今はいい。」

そして窓から部屋の床をめがけて飛び降り、着地する。

さて、魔力をちよいといじくってなんとか戻ってみるか…。

……………。

うゝん、駄目だな。なんらかのペナルティーか？つてか、ペナルティーはペナルティーで何に對してのペナルティーだ？

疑問は絶えないが、それよりジャックつて誰？

零「なあ、ジャックつて誰？」

シ「あ、ジャックね？ジャックは「シンデレラ！」…はあ、また呼び出し…。」

なんかシンデレラ大変そうだな。

零「シンデレラ、大変だな。こんなに綺麗なのに…。」

シ「え？今、なんて言った？」

え？そんなに疑問？

零「いや、綺麗だなんて…言っただけだが？」

シ「……／／／」

あれ？恥ずかしかったのか？綺麗つて充分本音なんだが…服装は仕方ない。なんか奴隷みたいな扱いされてるみたいだった。

シ「そ、それじゃあ行くわ／／／」

シンデレラは顔を赤くして部屋を出た。

まあ初めて言われたからそうとう照れていたのだろう。なんにせあの姿だ。あの姿では綺麗って言われるのが珍しい…かも。けど整った顔に白い肌…女性の中ではかなり綺麗な方…なのかな？

うん、やっぱ良くわからん。とにかく、綺麗な方だ。うん、専門家みたいなこと言ってすみませんでした。

??「……」

ん？微妙だがこれは…ヴェンの声？それっぽい声が聞こえたな。駆けつけてみるか。

くヴェン sideく

俺はこの世界に来て、シンデレラに会った。

だが、この世界にいたら俺は小さくなっていた。しかも、檻の中にいた。

檻の中から出してくれたのがシンデレラ。シンデレラは俺の事を鼠と勘違いしてるみたいだけど、まあ別にいいか。

そこでこの世界（？）の事を教えてくれたのが鼠のジャックだ。

そのあと、シンデレラはもの凄く大変な生活をしているみたいだった。そして今日は王宮で舞踏会があるらしい。シンデレラもそれに参加したいが、どうやら行くことが難しい。

シンデレラを雇っている(？)トレメイン夫人という人がシンデレラを舞踏会へつれて行かせないため、シンデレラには衣装を作らせ、それが完成したのならば行っても良いという条件を出した。トレメイン夫人は、シンデレラにわざと用事を押し付けて、衣装を完成させることを拒ませる。

そこで、俺とジャックはシンデレラの衣装を作ろうと提案して、衣装作りをしている。

大分完成してきた。あとは、衣装に真珠の玉をつければ完成。だが、この一つがとても大変なところにあった。

今俺はその真珠のある一室にいるんだが、それが丁度良く、この家で飼われているルシファールという猫の目の前にあった。

今、俺は机の足の部分に隠れている。

これさえとれば、シンデレラも舞踏会に出られる。

俺は勇気をふりしぼり、真珠のもとへと歩き出した。

くヴェンendく

しかし、いい気分じゃないな。なんにせ鼠のつくっただろう穴を通ってるんだからな…。

声のした方へ駆けていくが、出口付近でなんか服を着て二本足で立っている鼠がいた。

もしかして、こいつがジャックとかいうやつか？

零「あの〜」

するとびっくりしたのが、すこし焦った様に振り向いてきた。

零「あのさ、君がジャックか？俺は岸帙零斗っていうんだ。宜しく。」

ジャ「ああ、よろしくってそんなことしてう場合じゃない！ヴェンを助けてやってくれ！」

ヴェン？やはりそうか。うつすらやられている声が聞こえたが…助けに行くか。

〜ヴェンside〜

く、やっぱり無理なのか…。

身体が小さくなってから猫…確かルシファーだった。その猫に苦戦している。

ヴ「…ぐ！」

強い…少しの油断で攻撃を受けてしまった。身体が思うように動か

ない。

ルシファーが鋭い爪をたてて、とどめと言わんばかりに爪を振りお
らしてくる。

もう駄目だ…そう思ったときだ。

??「俺の親友に…手（？）を出すなあああ！！！」

そこには俺の親友、異世界からきた親友、レイトがいた。

くヴェンendく

零「俺の親友に…手を出すなあああ！！！」

ヴェンが猫に苦戦していた。普段ならだらしがないというが、ヴェンも弱体化しちまつてるから今回は文句は言わない事にした。

振りおろそうとした爪を、俺は刃のついてない大剣を出現させて受け止めた。

だって、飼い猫を殺すの気がひける。しかも、刃のついてる剣で戦うと死には至らせなくとも傷はつく。多分この主はシンデレラのせいだと決めつけるだろう。

手を出すなあああって叫んだけど、手じゃなくて爪だねwww

おっと、今はそんなことはどうでもいいか。

零「ヴェン！大丈夫か！？」

ヴ「レ、レイト！？」

だからレイトじゃ…そうだ、気にしない事にしたんだった。

零「とにかく、ヴェンはあの鼠のところへ！」

ヴ「あの鼠…ジャックの事だな、分かった。」

ふん…やっぱあの鼠はジャックっていうのか…。

おっと、今は猫だ。猫の相手をしよう。

猫は俺に標的を定めたのか、威圧のつもりか？可愛いもんだな。

猫は突っ込んできて、突進をしてくる。

身体の小ささを生かして猫の足へ走りこみ、回避する。

猫さん、ビビったのか？速さにビビったのか？猫の動きが止まり、俺と猫の睨み合い。

殺気…雑魚と同等。いや、それ以下。俺の身体は小さかろうと所詮相手はただの猫。しかも飼われているため、野生よりも鈍い。

俺は空中へ飛び、猫の目線のとこれで止まる。猫もビビったのか、少し驚いたのか、少し怯んでいる様に見える。まったく、だらしな

いなあ。

隙ができたのでいっきに距離をつめ、大剣（？）を猫に振った。

いきなりのことだったのか、対応しきれずに猫は飛ばされる。

猫は壁にあたり、倒れる。ダメージはでかいか？ま、いいか。猫は立ち上がり、再び俺を睨む。俺はそれに対応し、殺気を出して睨み付けた。

零「…去れ。」

これがとどめとなった。猫は自分では敵わないと見て撤退していく。

猫は倒した。さて、ヴェンのところへ行くか。

さてと、ヴェンのところに行くのはいいんだが…なんだこの光の玉は？

鼠がつくった通路にいるが、そこにあら不思議、話す謎の光が俺の目の前に！

零「それで、お前はいつたい誰なんだ？」

だがさっきからこいつ、俺にどうしろと頼みこむばかり。半分強制で。

内容は、シンデレラと一緒に王宮までついて行って欲しいとのこと。いや、別にいいんだよ。けど、一方的に話を進めるんだよ、こいつ。??「これは失礼したわ、私は妖精。夢をあきらめない人の前に現れるようせい。」

いや、わかったから。俺は名前を聞きたいんだけど…。

零「はいはい。妖精は数多く見てきているから驚いてやんない。それより名前は？俺は岸帛零斗。」

??「レイト…不思議な名前ね。私はフェアリー・ゴッドマザー。フェアリーと呼んで。」

零「わかった。それと、その頼みは引き受けてもいいんだが、まずこの身体をどうかしてくれ。小さいのは勘弁だよ、もう。」

この身体でついていくのは避けたい。なんつったって、今の俺はかなり弱い。猫は倒せても、外にアンヴァースがいたらまず負ける。一対一ならなんとかなるけど、一対多は無理だ。

フ「わかったわ。では目を閉じて。」

俺は目を閉じる。すると光に包まれてく感覚に陥る。

しばらくすると、その不思議な感覚はなくなった。目をあけると周りは森だった。そして、よくわからない人も1人。

??「よくわからないとはなによ、さっき話してたじゃない。フェアリー」

アリーよ。」

あ、さっきの光の玉の正体か。しかし、まあ不思議な格好だな。なんか魔法使いがきそうな服をきている。色は青。そして杖を左手に持っている。わお、左ききかい。

零「それで、何をすればいいの？」

フ「とりあえず、この先の広場で待ってて。あ、来たわ、シンデレラ。」

ありゃ、本当だ。ってことは、待つ必要性がなくなった。ってか、こいつ、かなり計画的。

うわ…ちょっと俺見ていい場面？シンデレラ、なんか不細工面のおばさん三人に服を破られてる…見ていいの？不味くね？あ、おばさんはどっか行った。

フ「さて、行ってあげて。」

はいはい、わかりました。こいつ、かなり計画的。

シンデレラはショックで木のベンチで泣いている。

俺はシンデレラのところへ行った。さて、慰めるか。

シンデレラの背中に手をのつける。

すると、シンデレラはこっちに振り向いた。

シ「……誰？」

あれ？わかんない？ちよつとショック。

シ「…レイト？」

あ、わかつてくれたみたい。おじさん、嬉しいよ。

一応この世界では随分年寄りです。ですが、見た目は超がつく程若いんです。けど幼くはない。

零「ああ、そうだよ。鼠じゃないぞ、ちゃんとした人だ。もとの姿に戻っただけだ。」

シ「……（ポ／／／／）」

ん？顔になんかついてるのか？そんな見つめて…何故？

零「おゝい、シンデレラ？どうした？俺の顔になにかついてんのか？」

シ「……はっ！？いや、違うの！つい見惚れて…て違う違う！い、今は忘れて！／／／／」

シンデレラ、もうちょいCOOLかと思ったが、違うみたいだな。

零「それにしても、酷いことするやつもいるものだな。せつかく作った服、台無しだな。」

あのババアども、マジで酷い。あ、シンデレラがみるみる悲しそうになっていく。ありやりや。

シ「ヒック……もう、舞踏会へは行けないわ……」

ここは、なんて言えばいいんだ……あ、テラ。

零「おーい、テラ。」

テラがなんか歩いてきた。今来たばつかなのかな？ってか、なんでテラは小さくなんないの？なにこれ？この世界の新手のイジメ？イジメだよ、絶対。それが人種差別（？）だ。

テ「ああ、レイト。その子はどうしたんだ？」

俺は服を破られたまでのことをテラに話した。

テ「成程、これは酷いな。」

零「だろ？」

それより、計画的な行動の魔法使い。早くたすけるや。

零「とにかく、心を強くもて。心を強くもてば、闇にのまれる事はないし、夢が叶うチャンスもきつとくる。」

うん、我ながら素晴らしい言葉だ。見たか！これが俺の慰める言葉の全力だ！

シ「……無理よ、そんなね……できっこないわ……。」

なん……だと？馬鹿な！俺は完璧だった筈だ！ああ、そうですよ！これが俺の全力ですよ！言葉じゃ野糞級ですよ！ん？なんだよ作者！

文句あんのか？だったらてめえがやってみろ！馬鹿！あ？馬鹿は俺のキーワード？ふざけた事を！てめえ、期末テストは悲しい点数ばっか…すみませんでした。

フ「心の強さも大事だけど、それだけではだめよ。」

あ、霧が出てきた。そろそろ計画的な行動が実行か？

霧はシンデレラのところに集まってくる。そして、その霧はフェアリーの身体を作っていく。

シ「もう、何も信じられないわ…何も…。」

そして、シンデレラの泣いている場所にフェアリーが出現。

フ「何もですって？嘘だわ！そんなの本気じゃないはず！」

うわゝ、計画的っぽいからなんかシリアスになってない…てか、これはシリアスじゃないか。

シ「いいえ、本気だわ。もう、おしまいよ…。」

フ「何言ってるの！？夢を信じない人の所に私はこないわ。」

ぜつつつつつつたい嘘だ！！現に俺の目の前に現れた！

シンデレラはフェアリーの存在に気付き、顔をあげる。つてか、それまでシンデレラはフェアリーの存在に気づいてなかったんだよね… どんだけだよ。

フ「さあ、涙をふいて。そんな顔じゃ舞踏会に行けないわ。」

あ、そうか。シンデレラは王宮に舞踏会しに行くんだな。

シンデレラはフェアリーに立たされた。シンデレラ、まだ悲しそうな顔をしてるよ。

シ「舞踏会？とても無理だわ。」

破れた服を強調させる。テラ、あまりジロジロ見るな。意外と変態だな、お前。

フ「行けるわよ。でも急がなきゃ。」

すると、後ろからアンヴァースがでてきた。あ、四本足の雑魚か。しかも二十匹程度。

零「テラ、やるか。」

テ「ああ、そうだな。」

そして、俺とテラはアンヴァースと戦闘した。

よし、終了。

今回は本当に雑魚。雑魚の中の雑魚。俺らの攻撃を避けずにまともに受けてくれる。おかげでそっこつ倒せた。

そして…シンデレラの方をむいたら…なんか凄い事になってた。

テ「……。」

零「……何事？」

テラは呆然としている。それもそのはず。だって、なんかカボチャの形に良く似ている馬車、しかも白く、中はピンクのソファーらしき…いや、シートか。いや、すごいな！どこで出した？それ。

さらにシンデレラが…なんか純白のドレスをきていた。目茶苦茶きれいだ。マジで。

俺はついつい見とれてしまった。いや、マジで似合うんだよ、これが。

シ「どう？似合う？」

なんかシンデレラ嬉しそう。オシャレというやつか？よくわからん。とりあえず、似合う事は間違いない。

零「ああ、凄く綺麗だ。見違えた。」

シ「……／／／／／」

テ「はあ。（また零斗の犠牲者が増えた…。）」

フ「ふふふ。（王子様よりも、レイトとシンデレラの方がお似合いかも。）」

おい、なんだよ二人して。テラ、何故ため息？またこいつやったよって目しないでくれる？ってか、俺は何をした？そしてフェアリー、何故笑う？シンデレラは俯いてしまった。照れ屋さんか？

フ「シンデレラ、よく覚えておいて。」

あ、成程。こいつがなんかやったのか。

フ「この夢は真夜中までなの。12時を告げる鐘が鳴りやむと、魔法が解けて全てが元の姿に戻ってしまうの。」

シ「ええ、わかったわ。」

成程、あれらは魔法か。こいつ、万能か？多分俺の世界でも生き残れるぞ。霧にもなれるし、戦闘には不向きかもしれないが、いけるぞ。

そして、シンデレラはカボチャの形をした白い馬車に乗って、王宮へ向かった。

さて、ついていくか。あ、テラも行くのかな？なんかフェアリーと話してる。

しばらくするとテラは俺のもとにくる。

零「ん？テラもシンデレラの所へ逝くか？」

テ「ああ。それと、字が違うぞ。」

零「知ってる、わざとだ。」

テ「……………」

ジト目で睨まれる……ごめんなさい。

零「じゃ、行くか。」

テ「ああ。」

そして、俺はシンデレラのもとへと行った。

ついたのだが、状況が最悪だ。見たところ、アンヴァースに囲まれている。シンデレラがね。

王宮の扉の前にいる。

零「テラ、いくぞ！」

テ「ああ！」

四本足の雑魚が八匹…瞬いた刹那に消え失せる。

俺は普通の剣を出現させ、いつきにかたずける。本当に刹那に消え失せたよ。

テ「…レイト、お前には絶対敵わない。」

なんかテラが悟った目をしながらなんか語ってる。どうでもいいや。

シ「あら？貴方達はレイトと…「テラだ。」…テラね、私はシンデレラです。」

二人が手短の自己紹介をする。

零「俺とテラは先に行き、あの变なのをかたずける。だからシンデレラはここに残ってくれ。」

するとその答えはもの凄く意外だった。

シ「いいえ、私も行くわ。舞踏会に遅れてしまうわ。」

これは意外の意外。本当にビックリした。だって、それどころじゃないっしょ？この城、襲われるかもしれないって、すでに襲われている…のかな？

あるえ？考えれば考えるほど変だぞ？この城、他国に襲われたら絶

対滅びるぜ？だって、あまりにもオシヤレ重視じゃん。そんなことに金使うなら政治やら軍事やらをしるよ！

おっと、ついあつくなっちまった。

零「了解、俺らが護衛する。テラ、いいか？」

テ「ああ、いいぞ。（というか、俺も護衛に必要か？レイトだけで充分な気がするんだが…。）」

よし、テラの了承も得たな。さて、最終確認だな。

零「護衛することはいいいよ。けど、奴らは危険だぞ？（俺はあんまり危険じゃないと思うがな。）」

シ「ええ。」

素晴らしい、どんだけだよ…こいつ、度胸なら軍人顔負けだぞ。

零「はは、強いんだな。」

シ「レイトが言ったのよ。心を強くもてと。それに、襲われても私を守ってくれるでしょ？」

まったく、かなり強いな。

零「ああ、絶対シンデレラを守るからな。」

シ「……／＼／」

テ「（やっぱレイトは鈍感だな。）」

さて、行くか。

俺は扉を開けて、城の中へと足を進めた。

ちい、意外だ。

エントランスにいるんだが、くそウザイ。

特に今回はあれだ。靴の形をしたアンヴァースがいる。そいつらは階段の行く道を塞いでいるようにみえる。まだエントランスの下の広間だ。この階段をのぼればつくだろう。

しかし、今回はウザイ。靴の形……いや、靴の中にいるアンヴァースかな？その靴は頑丈だ。だから頭の部分を狙うが得策。だが、そいつらも馬鹿じゃない……多分。その立派な靴の中に入り込んで攻撃を防いでくる。

テ「ちい！」

テラは苦戦中。アンヴァースは七体いた。テラは三体引き受けて、

俺は四体だ。

だが、よくみると階段からまた靴のアンヴァースがでてくる。

その数、約二十体。

多分テラは強さで苦戦してはいない。戦闘能力だと普通にテラの方が上だ。が、防御で苦戦している。

そして上のアンヴァースが加勢してきたら計約三十体。テラは多分体力切れで負けるかも。俺もきつい。

俺は無理矢理防御していてもお構い無しに攻撃をする。確かに倒せている。が、疲れる。あと面倒。だから時間がかかっている。

もういいや。ちょっと本気になるか。

零「……増絶『重なりし絶望』。」

俺は大剣を出現させ、それを投げた。あ、増絶は俺が今勝手につけた。

今回は大剣にした。威力は絶大だろう。もうすでに大剣は三十ほどになっている。

そして、その大剣を操り、いつきに高度を上げさせ、落下させる。

見事全てのアンヴァースを殲滅させたぜ。

テ「……やっぱお前には敵わない。」

そりゃ当然だ。お前達の師匠より強いからな。

アングヴァースの気は感じられない。もう平気だろう。

零「シンデレラ、もう平気だ。階段に上がりな。ほら、舞踏会が始まってるみたいだぞ。」

シ「ええ、ありがとう。レイトは？…行かないの？」

俺は…そのまま別の世界に行くか。

零「いや、俺はいいや。俺は用事があるから。代わりにテラがついていくよ。護衛に行かせるから。」

テ「な！？レイト！」

シ「……そう。」

テラ、強制決定だ。

シンデレラはなにか悲しそうな目をしている。寂しがりやなのか？

シ「……また、会えるよね？」

多分な。いや、多分無いかも。

零「ああ、また会えるさ。」

実際にはこう言った。だって、多分なんて言ったらなんか危なそう

だったから。

シ「じゃあ、今日のお礼をしたいか、目を閉じて。」

なんだろう、とりあえず目を閉じた。

すると、ほっぺになんか柔らかい感触があった。ん？本当になんだ？

シ「……………／／／／／」

シンデレラは顔を真つ赤にして階段を駆け上がった。

零「なあ、テラ、なにかあったのか？」

テ「お前……………いい加減にしろよ……………」

なにをいつてる、こいつ。

零「とりあえず、いくから。」

そして、俺は城を出て、異空の回路をひらいて次の世界へ行った。
さて、次はどこかねえ？

おまけ

エントランスの階段にて。現在テラとアクアのお話中。

テ「……………ということがあったんだよ。」

ア「レイト………###」

ゴゴゴゴッー！

テ「ひい！（アクア、ここまで怒るとは…レイト、御愁傷様。）」

ア「（いや、待つて。私もレイトにそれをすれば…いや、それ以上のことも…レイトを私の物に…って、なに考えてるんだ、わたし。）
……／＼／」

テ「……。（レイト、頑張れ。）」

異空の回路にて

零「ハックション！！…だれか俺の噂してるのかな？いや、なんだ

これ…悪感も感じる…この先、強大な敵と出会うかも…頑張るか。
しかし、刃のついてない大剣って、もはや剣じゃないよな。」

……………。

零「ま、いつか。これぞ、ご都合主義だな。」

エンチャントッド・ドミニオン（前書き）

アクアのキャラがすこし崩壊WWW

エンチャントッド・ドミニオン

ふゝ、なんだよここ。

俺はあの世界から去り、そして次の世界についた。今回は何事もなくスムーズに進むことができた。

はてさて、今の状況は目の前になにやら黒い炎が出ていた。なんだろう、闇の魔力が宿っている。

だが、だからと言って先に進むこともなんか嫌だな。なんつったって、気味悪い。草や木は枯れていて、いかにも嫌な道だ。注意してくぞ。言っとくけど、怖い訳ではない。ただ面倒なことになりそうな気配がするからだ。

そんなことを考えていると、何かが近づいてくるのを感じた。

四人…いや、一人は知っているが、三人はなんだろう。特別な力を感じる。戦闘ではたいして力になれないが、補助などで最大限に力を発しそうだ。

すると、なんと黒い炎が消えていき、四人と目が会った。そこにいたのはヴェンと…あとは知らない。多分妖精かねえ？

しかし不思議だ。何故か妖精でも今のところオバサン妖精しか会っていない。何故だ？

さらに言うと、あの前回の妖精の服装と似ている。ただ色がかわっ

ただけ…かな？

ヴ「レイト！？」

はあ、何故だろうか。最近最初に会ったのがヴェンなんだよねえ。

零「よお、ヴェン。なんか急いでいるみたいだな。」

ヴ「実は……………」

ヴ「……………」というわけなんだ。」

成る程、つまりそのオーロラ姫とか言ったかな？そいつが心を奪われて、それを取り戻す最中と…。

零「わかった。俺も協力する。」

ヴ「本当か！？有り難う！」

ここまで聞かされて手伝いませんなんて言う方が可笑しいからな。

まずは自己紹介をしなくてはな。

零「んじゃ自己紹介な。俺の名前は岸帛零斗だ。零斗と呼んでくれ。」

俺の自己紹介するにしたがって、赤色の服をきた妖精らしき奴が話した。

??「私の名前はフローラ。宜しくね。」

次は緑色の服をきた、なんか賢そうな奴。

??「私はフォーナ。」

最後は青い服を着た、頑固そうな奴。

??「私はメリーウエザー。メリーと呼んで。」

各自の自己紹介はすんだ。さて、面倒な匂いがプンプンするが、頑張るか。

そして俺達は先へ進んだ。

さて、あの道を通っていったら城が見えてきた。そこに心があるらしい。中に入ると不思議なことに、なにもなくスムーズに進めた。

しかし、嫌な作りだ。何処かしら畏がありそうな気配だ。

そして、とある広場に出た。うん、戦いやすいな。

俺達は隠れて様子を見る。するとなにやら次のフロアにつながっているだろっ出入口に見張りがいた。だが、とにかくちっこい。

鳥みたいな顔をしている…いや、あれはなんだろう？一匹は弓矢をもつて、もう一匹は小さいながらも力のありそうな身体で斧をもっていた。

フロ「マレフィセントの手下だわ。」

マレフィセント？ああ、この城の主か。そいつが心を盗んだと。ま、いいや。まずはあいつらだな。

ヴ「あの先になにかありそうだな…。」

零「んじゃいつちよやるか。」

俺とヴェンは飛び出していき、退屈そうな奴らと戦闘を求める。

ヴ「退屈そうだな。」

俺達はそれぞれ武器、今回の俺の武器はあの深紅の長剣。

零「丁度いい。俺らの遊びにつきあってくれよ。」

そして俺がはなしおわると戦闘が始まった。

ヴェンは斧をもった奴、そして俺は弓矢を持った奴を相手した。

互いに倒し終わって先へ進もうと思うと、なんと囲まれていた。頭はなかなか良いみたいだな。回りは弓矢を構えたやつで、正面からは斧をもった奴がきた。

零「ヴェン、俺が矢を防ぐ。お前は斧の奴を中心に倒せ。」

ヴェンが頷いたと同時に矢が放たれる。放たれた矢は俺がことごとく斬り、ヴェンは斧の奴と戦闘中。

俺は回りにいる弓矢の奴の武器を奪い、そして倒す。

零「弓矢つてのはな、こう使っただよ……。」

そして俺は構え、矢を放った。放たれた矢は一体の敵に命中した。他の弓矢の奴はそうとうビビっている。当然だ。なにせ矢が当たったやつは威力が強すぎてただ矢が刺さっただけなのに身体がバラバラに飛び散ったんだからな。うん、自分でも恐いと感じた。

さて、そろそろけりつけるかな。俺は駆け出し、いつきに距離を詰めようとしたが……。

カポッ

……………。

零「……………」。

真下が…いきなり穴となつて、ね。罨が、ね。

零「あ~~~~れ~~~~」。

ヴ「零斗おお!!」

あ、今発音正しく言つてたな。いや、気のせいかな？

だが、なにか忘れてないか？俺は空飛べるんだぜ？

零「何？」

ヴ「え？あ、え？」

はい、穴の上に浮いています。

零「はい、平気だつて。こんくら ゴンッ！ グハア!？」

余裕の表情だつたが、油断大敵だつたね。超油断してたから落ちてきた岩が物凄く痛く感じた。そして、俺の意識はなくなつた。

零「……ん？何処？」

辺りを見回すとどうやら牢獄みたいだな。するとそこにはもう一人、王子らしき奴が鎖で繋がれていた。

??「……君は？」

とりあえず、自己紹介だな。

零「俺は岸帛零斗。零斗と呼んでくれ。」

??「レイト？不思議な名前だな。僕はフィリップ。」

こいつ、なんか男らしい。こいつは武器を手に持ち、民を導くために使いそうなちから。なんか凄い仁徳オーラが出ている。

零「とりあえず、その鎖外してやるぐほ！？」

今度はなんだ？また上から落ちてきた……。なんか誰かに乗っかられている……。

その人物が…アクアだった。

ア「……………？」

零「あー…とりあえずおりろ。」

ア「ッ！？すみませ…てレイト！？」

アクア…酷いっす。

零「とりあえずおりろ。」

ア「え？もつとやって欲しい？…え、あの…はい／＼頑張ります
／＼貴方が望むのであれば…／＼」

え！？ちょ！待て！マジで！？いや、なににななに！？
マジでってなにその鞭、どっから出した！？ちょ！？やめ…あー
――…

ア「ご、ごめん／＼」

零「い、いいよ別に…いてて…。」

あ、危なかった。いくら俺が丈夫だからといってもアクアには勝て
ない…しかもなんかを妄想していたらしいアクアには…。

フィ「き、君は？」

怯みながらも質問するフィリップ。まさに勇者。

ア「私はアクアといいます。罨にかかってここに…。」

零「安心しろ、俺も理不尽な罨にかかってここにきた。」

ア「理不尽…。」

だつてそうだろ。理不尽かどうかはどうでもいいけど、俺は岩まで投げられて穴に落とされたんだ。あゝやだやだ。

ア「貴方は？」

フィ「僕はフィリップ。僕もマレフィセントに捕らわれたんだ。」

ぶっちゃけ、マレフィセントって強いのか？俺は実際に見たこと無いし、わからん。

フィ「そしてオーロラ姫が呪いで永遠に眠らされている事を知った。」

その呪いって、心を奪われた事だよな。ヴェン、なんとかしてくれ
たかな？

フィ「僕は彼女を助けたい。」

この時、フィリップは確かな光を感じた。まったく、これは多分強いな。

ア「…愛しているんですね。」

…片想いか？いや、こいつなら多分幸せになれるでしょうね。

ア「……………／／／」

アクア、チラチラこっちを見ては俯いて、なんか顔についてるのか？

フロ「今の話は本当ですか？」

あ、フローラ。

フィ「ああ、マレフィセントに聞いた。」

いつからいたんだ、こいつら。

フロ「貴方はフィリップ王子！」

オーバーリアクションなこつただな。フローラさん、もう少し落ち着け。

フロ「あ！レイトも！ここにいたのね！」

ア「彼女達は？」

零「なんかの妖精。こいつらとともにマレフィセントとやらのどーのこーので手伝いをしていた。」

テキスト感MAX！

さて、なんやかんやで話は進んでいった。どうやらいったん城…あ、オーロラ姫とやらの城へ行くんだそうだ。あ、フィリップの鎖はは

ずしたぞ。

フロ「フィリップ王子、真の愛への道のりは険しいですが、一人で立ち向かうのです。」

フィリップは強く頷く。

ア「私も同行させてください。」

アクアが行くんじゃ、俺も行くか。

ア「マレフィセントに聞きたい事があるのです。」

フロ「ええ、いいでしょう。」

さて、俺も行くか。

零「まだ一人、俺の存在を忘れてないか？最後までやり通さなくちゃ、な。アクアも行くんだから、守らなくちゃ。」

ア「レイト……／＼／」

零「親友を守らなくちゃ、な。」

ア「……………」

あるえ？何故アクアは俯く？なんか負のオーラが凄い…何故？

フロ「貴女も苦勞しているのね。」

ア「……………」

何を言ってるんだ、こいつら。

さて、フィリップも準備出来た様だし、な。あいつは武器を持ってないから渡すか。

零「フィリップ。」

俺はフィリップを呼び止めた。

フィ「どうしたんだ？」

零「お前に渡したい物がある。」

そして俺は剣を出現させた。なんか勇者の使いそうな剣…つつても、かなり一般的な剣の刃の部分を金色にただけだね。

フィ「これを…僕に？」

零「じゃあ、お前は魔物やらマレフィセントやらに素手で戦うと？」

そんなこつちや。別にこれ渡しても構わないし、俺は剣、何本も出現させられるしね。

フィ「わかった、ありがとう。」

フィリップはその剣をとり、そして剣をジーンツと見ていたなんか気に入らないのか？

フィ「…。(この剣、普通の剣よりも凄い力を感じる…僕に使いこなせるか…いや、やらなくちゃ駄目なんだ。)」

フィリップは剣を見るのを止め、そして覚悟をきめた目をしている。

零「さて、行くぞ!」

そして俺たちは城を抜けだした。

フィ「レイトって、強かったんだね。」

フィリップが凄い驚いて俺を見ている。そんなに凄かったか？

〈回想〉

俺たちは牢獄から逃げ出して出口へ向かった。が、そこは魔物が大量にいて、なおかつ三重に門が閉まっていた。

なんとまあ作りの良い城なこった。

んであの妖精達は…隠れてやがる。

矢が一斉に放たれた。フィリップ、強さはまあまあだが矢を弾く程の力は無いようだな。俺とアクアで矢を弾く。余裕だな。

今度は落石か。アクアの隣に落ちてきた。当たりはしなかったが、余りにも急な事だったからこけた。

ア「キャッ！」

尻餅ついちゃったね、アクア。俺はアクアに駆け寄った。

零「アクア、大丈夫か？」

ア「……………／／／」

あれま、アクア動けないみたいだな。さて、親友を傷つけたんだから、な。

零「あゝあ、可哀想。哀れだね、本当に。アクアに傷つけたんだ、死んでもらうよ？」

安心しな、ちゃんと閻魔さんが白黒はつきりさせて地獄へ送ってくれるからさ。だから……………

安心して逝きなよ。

それと同時に弾幕、剣を四方八方へ飛ばして味方意外すべてを葬った。

そして門番らしき奴らはちゃんと門を守っていたから、君たちこと葬らなくちゃね。

零「……弾幕は威力パワーだぜ。」

誰かの台詞をパクりました。 すんません。

俺の手から巨大なレーザーが放たれ、そして“城壁ごと”ぶっ壊した。

〽回想終了〽

零「まああの時はついむきになっちまったからな。」

ア「……／＼／＼（レイト、私のために怒ってくれてたんだね…複雑だけど…嬉しい／＼／＼）」

アクア、どうしたんだろうか。さっきからどうしたんだろう…俯きっぱなしだな。

フィ「もうすぐ城につく…。」

フィリップが不安な表情を浮かべている。まったく、すこし励ますか。舌、つらなきやいいんだがな。

零「なあフィリップ、お前はオーロラ姫とやらは愛しているか？」

フィ「？ どうしたんだレイト？」

まあそうだな。急に変なこと言うのは可笑いからな。

零「いいか、そいつのことが好きならばお前がそいつのことを守るんだぞ。いいか？俺とアクアはいくらお前より力があつたとしても、俺とアクアはあくまでも手助けをするだけだ。つまり、どんな困難があろうと守る者を守り通す覚悟を試す試験だと思え。わかったな。」

フィ「…ああ、わかった。」

少しは緊張は和らいでくれたかな？はつきり言って、俺は口下手だ。さっき、半分以上自分でも何を言ってるのかわからなくなっていた。嫌だね、口下手って。

おっと、なんだかんだで城についたな。

ん？あの黒い奴がマレフィセントか？しっかし変な格好だな。頭の黒い角つて本物？あと無駄に長い杖。杖の先には緑色のオーラらしき、なんか闇の力が感じられる。

さて、やつの格好は魔女の服すな。うん、それしか言えないな。

マ「…破滅をもたらす雲よ空をおおい、あの城を我が魔力で包むのだ！」

するとなんか空に怪しい雲が出現し、雷をおとす。すると城へ続く道はいばらで包まれた。いく道もね。

俺達はマレフィセントらしいやつつつつても、いかにもあやしいやつだから確実にマレフィセントだな。そいつの元に駆ける。

そして、俺、フィリップ、アクアはそれぞれの武器を構える。

ア「答えろ！マスター・ゼアノートから何を聞いた？」

アクアが質問をする。

え？あのゼアノートがここに？なにをやらかしたんだ？あいつ。

マ「どうやらお前は私を手伝ってくれないようだねえ…だったら教える訳にはいかないよ。」

……なにを手伝うの？城を奪う事？それならこいつ一人でもう出来

てるよな…。

ア「テラがお前を手伝ったというのは本当か？」

マレフィセントは気味悪い笑みを浮かべながら答える。ああ、成る程。だいたいわかった。多分ゼアノートは心の闇の使い方だのなんのを教えた…のかな？

テ「本当さ。テラは己の力におぼれて闇に堕ちたんだ！」

あれま、テラやっちまったな。

ア「戯事を！」

アクアがマジでできたな。っとその前に…。

零「ちょっと待て、お前がマレフィセントか？」

…みんなキョトンとしてる。く、恥ずかしい。一応確認だよ、確認。

マ「…なんだいお前は、そうさ、私がマレフィセントさ。」

とりあえず自己紹介。

零「一応、俺も名乗ろう。俺は岸帛零斗だ。」

マ「！？…そうか、お前が零斗か。」

うん、こいつゼアノートから聞いたな。

零「マレフィセント、テラは自分の闇にうばれたっていったな。それもう一回聞くけど本当？」

マ「…本当さ。まさか、お前も私を手伝ってくれるのか？」

それでこそ戯事じゃん。

零「馬鹿言つな。生憎、俺はお前の計画よりお前の力に興味を持った。あと、この王子さんの志の試しにもなるし、な。」

マ「ふふふ…私にもわかるよ、お前はそこの二人よりも遥かに強いねえ。私の手中におさめたくなってきたよ。」

はあ、これは困ったもんだな。とんでもない奴に目をつけられたな。

零「そうだな…俺に勝てたらお前の計画を手伝ってやってもいいぜ？」

ア「レイト!？」

アクアが慌てるのも無理はないよな。なんつったって、もしこの勝負に負けたら俺が向こうにつくんだからな。

零「大丈夫だよ、アクア。この勝負に勝てばいいし、あつちに行く気はさらさらない。お前といると楽しいしな。それに、俺に居場所をくれたのもアクアだし、な。」

ア「……//」

あれ、俯いちゃったよ。

マ「…その言葉に嘘偽りはないだろうねえ？」

零「ああ、言っとくけど勝てたらだからな。」

マレフィセントが話にのってきた。これで楽しめそうだ。

マ「…お前を手に入れるためにも本気でやるよ…思い知れ！悪の力を！」

するとマレフィセントは漆黒のドラゴンになった。マレフィセントドラゴンってか？ただでかくなっただけじゃね？

フィリップとアクアは身構えた。

するとマレフィセントドラゴンは空を飛んだ。うわー、卑怯だこいつ。俺達の攻撃届かないじゃん…なんて思うなよ！

俺はそこらへんのいばらを超小型船を作り、そしてアクアとフィリップをのせる。

ア「ちょーレイト！？／＼／」

フィ「な、なにをするんだ！」

零「はいはい、とつととのね。楽しい空中戦が待ってるぞ。」

そして船の後ろをもって、船ごと空をとぶ。なるべく船を傾けさせないようにしなくちゃ。

マ「!？」

うん、こいつめっちゃ驚いてる。

あ、風の抵抗は俺の魔力でアクア達にはうけてない。何故俺は戦わないかって？だってさっき言ったもん。あくまで俺とアクアは手助けだって。

零「アクア、今回は俺とアクアでフィリップの助力をする。俺は船の操作をやる。飛べるの俺だけだしな。アクアは攻撃がきたら魔法で防いでくれ。」

ア「わかったわ。」

零「フィリップ、さあ試すぞ、お前の志を！心置きなく戦え！」

フィ「わかった！」

各自戦闘準備する。さて、弾幕勝負の始まりだ。

つつても、俺は助力だからね。なんかこの台詞癖になった。

マレフィセントが日の玉を放つ。俺はそれをことごとくかわしていき、そしてマレフィセントの前までくる。

すると今度は爪で攻撃。

零「アクア！」

ア「任せて！」

アクアの魔法で防がれ、むしろマレフィセントが怯んだ。

零「さあ今だ！この剣はお前の想いが強ければ強くなる！」

フィ「僕の想い…僕は、彼女を助ける！」

すると剣は光で包まれ、リーチを長くする。あ、悪いけどあれは嘘。俺の力で重さを変えずにリーチを長くした。

フィ「うおおおお！」

フィリップはマレフィセントへと剣を向ける。そして斬る。

本当に一生懸命なのがある。

斬る、斬る、斬る、斬る、斬る。

不安を抱く前に斬る。うん、一生懸命だね。

そしてひとつだけ、傷が深かったのか、マレフィセントが落ちていく。

俺達も地上に戻り、二人をおろした。船は…とりあえずマレフィセントに投げた。あ、目に当たった。痛そう。

するとあの妖精がきた。遅い。どこでグズグズしてたんだ。

すると三人が俺のあげた剣になにやら魔法をかける。強化魔法か。

フロ「真実の剣は素早く正確に飛び、悪は死に絶え二度とはびこる事無し！」

フィリップは剣を投げた。うん当たった。当たったんだけど、あつけないな。仕方ない、俺が飾りつけでもするか。いや、だつてなんかさ、ささった感触がなんかプスツって感じだもん。さてと、飾りつけるか。

零「怪我しろ、マレフィセント…爆発しろ。」

するとマレフィセントは大爆発をおこした。うん、いいね。

マレフィセントは元の姿に戻った。橋は…ギリギリ平気だった。手加減したつもりなんだが…ってか、この橋頑丈だな。

フィリップは城に駆け付けていく。俺は倒れているマレフィセントの元へ行き、話しかける。

零「残念だったな、マレフィセント。」

マ「…随分…余裕そうだねえ…あの爆発…お前の…力…かい？」

弱々しいな、こいつ。

零「ああ、手加減したんだがな。」

マ「…ますます、欲しくなるねえ…まだ諦めちゃいないよ…。」

マレフィセントはゆっくりと立ち上がる。

あ、言い忘れたけどいはらは消えたよ。

零「ま、頑張れ。期待しないで待ってるよ。」

そしてアクアの元へいく。

零「アクア、先にこの世界から出るよ。」

そして異空の回路を開く。

ア「え？ちょ！レイト！」

零「こういう場面は少し苦手だね。んじゃ、先行くよ。」

そう言って、この世界から去った。

レイディアントガーデン・輝ける庭（前書き）

すみません、間違えました。訂正します。

レイディアントガーデン：輝ける庭

異空の回路を漂う俺。異空の回路で俺宛の手紙を見つけた。多分、いや絶対俺をこの世界に送りこんできた神だろう。いや、神だ。

読んでみると内容は以下の通りだった。

“岸帛零斗へ

零斗よ、異世界から送られし者よ、お前はもう気づいているか？戦いの時、前にいた世界よりも力が無い事を。何故力が弱くなっただかは知らん。一応調査はしておこう。

それと、お前は前の様に不死身ではなくなった。前は剣という存在が無くなるまで何回もよみがえっていたが、この世界ではあくまで司る、支配するだけになっていた。そして不死身から不老となった。不老のみとなったから心臓を貫かれたら普通に死ぬ。ただ老衰にならなくなった。あと剣を司る、支配できるのは自分が出現させた剣のみとなった。もうこれでは“剣を操る程度の能力”とほぼ同等の強さだが、まだお前の能力の方が強い。下に図でまとめておいた。見ておくがよい。

・不死身↓不老

・支配できるのは自分が出現させた剣のみ

・強さは“剣を操る程度の能力”より少し強い

神より”

という手紙の内容だった。

ひとつ言って良いか？もの凄く回りくどい。最終的にまとめるならそれだけでいいものを…はあ。

わかった事は、あの世界にいた時より凄く弱くなっている事。あと俺自信が気づいた事なんだが、強力な力が秘められている剣であればある程に理解しないと創りだすことが出来ない事。自分の能力で不完全な剣を完全オリジナルの能力に変えれば別になる。

だが、まるつきし同じ能力は難しい事がわかった。という事は、俺のとおっておきの“あれ”をどう創りだすかが問題だな。まだ“あれ”を使う程の強敵には会っていないからまだ創らないけどな。

そろそろつきそうだな。次の世界はどんな奴と出会うかねえ？

ん？前になにかいたような気が…気のせいだよな。

く
アクア side
く

私はあの世界をぬけて、異空の回路にいる。あの世界でレイトはとつときりあげて次の世界へ行ってしまった。一緒に行きたかったのに…。

私はマスター・ゼアノートとテラを探す（半分はレイトを探しに）ために異空の回路をわたっていたらレイトがいた。飛びながら何かを読んでいる様に見えた。しかし、凄い速さだ。

よく見たらレイトは鎧を着ていない状態で異空の回路を飛んでいた。闇にのまれるのではと疑問に思ったが、全くと言っていい程というか、全く変化がみられない。それ程強い心をもっているのだろう。

そしてレイトは次の世界についたらしく、異空の回路を出た。私もそれについていき、異空の回路を出た。

くアクアendく

次の世界に到着した。

零「…なんなんだ、この世界は…。」

最初の言葉がこれであった。

綺麗すぎる…俺はとある広場に出た。真後ろが壁となっている。そして目の前には小さな花畑があり、いや畑程ではないか。そしてちゃんと走りまわれる程度の場所もある。そして目の前を見上げれば大きな城がある。前にはそれに続く階段があるのだが、門で封鎖されている。そして左右には道があり、そこは住宅街へと続いているだろう。

結論を言うと、普通だが美しい。

特に美しい程の物はおいていない。が、その一般的な物がとてつもなく美しい。一般的な美しさがここにはあった。

しばらくボォツとしていると黒髪の少女がやってきた。しかし物騒なものだな。こんな小さい子なのに刀を持ってるよ。

…え？他人事みたいに言ってるけどもの凄く危ないよね？危ないよ、あれ。少女は肩までの長さの髪をしていて、そして刀は背中に二本ある。服装は黒で………まとめましよう、ぶっちゃけ忍者なんだよこの子。凄く忍者の格好してるんだよ。

??「あたっ!!」

身長は…120cmかな。そんなくらいの身長って、少女が倒れてる。多分転んだんだよな、うんそうだよきつと。助けなくっちゃ。

俺は少女に駆け寄った。

零「大丈夫か？…あ、怪我しちまったな。」

??「??? 誰？」

だろうな。とりあえず自己紹介。

零「俺の名前は岸帛零斗っていうんだ。零斗って呼んでくれ。」

??「レイト？不思議な名前だね。」

さて、傷を治しますか。

零「動くなよ、今治すから。」

??「え？」

とりあえず、アクアに習った魔法で治しますか。…確か…あ、そう
だそうだ。『ケアル』だったな。

魔法をかける。すると少女の傷口が塞がっていく。

??「……。（なんか暖かい……。）」

零「よし、これで終わった。」

俺は立ち上がり、少女に手をかす。

??「ありがとう♪私の名前はユフィっていうの♪宜しくね♪」

ユフィねえ…マジで？この世界に住んでたの？しかも少女だから性
格が少し違う様な…ま、いっか。

零「ああ。宜しくな、ユフィ。（ニコッ）」

そう言いながら頭を撫でてやる。

ユ「あう……／＼／」

あらら、顔俯いちゃったよ。嫌だったのかな？

ユ「あ……。」

撫でてる手を離すとなんか残念そうな顔をしていた。どっちなんだかねえ。

零「それじゃ、俺は行くね。」

そしてこの場を立ち去ろうとしたら…

ユ「ちょっと待ってよ!」

ユフィに止められた。

ユ「あ、あのさ、レイトの事、お兄さんって呼んでいい?」

お兄さん?別にいいんじゃないの?いや、ちょっと悪戯してみるか。

零「だゝめ♪お兄さんじゃなくてお兄ちゃんって呼びなさい♪」

流石に戸惑うかな。そう思っていたが、全然違った。

ユ「うん♪わかったよお兄ちゃん♪」

…やっちまった。言わなきゃ良かった…ま、いいか。子供は元気が一番♪

零「おう♪んじゃ、俺は行くね♪」

そしてユフィと別れた。うん、元気が良いね。向こう側で元気良く手を振っている。こつちも微笑んで振り返したらなんか顔真っ赤にして何処かへ走っていった。速いな…あの子。

さて、俺も行くか。

くアクア sideく

私は零斗の後をつけてこの世界に来た。ここは不思議な場所だった。

綺麗。その言葉でしか表現出来ない。何故だろうか。

それはともかく、レイトを探そう。

目の前には広場があった。そこを眺めているとその奥にある右側の通路をレイトが通ろうとしているところを見つけた。

私はレイトの後をつけた。

今思ったら私って、ストーカー行為をしていない?...いや、違う。
私はそんなことはしていない。うん、していない。

くアクア endく

さてと、今俺は何処にいるか。それは...

店員(女)「ご注文は以上でよろしいでしょうか?」

零「ああ、ありがとう。(ニコッ)」

店員（女）「で、ではごゆっくりどうぞよ…／＼／」

あ、噛んだ。そして今俺は飲食店らしき場所にいる。前の世界（東方）とは違ってここは金をマニーっていうらしい。あ、マニーは旅立ちの地にいる時にエラクウスからもらった。なんかこれで家具だのいろいろ買えみたいな事を言われたんだけど、それを無視して財布の中へ…俺って結構せこいな。あ、財布はポケットあさったら出てきた。あれはびっくりだったなあ…。まあなんにせよ金には結構余裕あるんだよ。だってもともとは家具を買う金だしね。

それで今はオムライスをお食っている。あるんだな。

それを食べているとなんか向こうの店員がなんかヒソヒソ話している。しかも全員女。迷惑だなあ。しかも俺を軽くみてはなんかキャーピー言ってるし…ほんと、なに？

そしてオムライスを平らげて会計へ…。

店員（女）「ひゃ…１２０マニーになりましたゆ…あう／＼／」

あ、さっきの店員だ。また噛んだ。とりあえず…っておい！安くね！？なにこの安さ！チート！ありえねえ！！

零「あ、はい。これでいいですか？」

そして何故かマニーを手渡し…何故だろう。

店員（女）・零「あ…。」

やべ、手に触れてしまった。

零「う、ゴメン！」

店員（女）「い、いえ………寧ろ嬉しい（ボソッ）」

ん？最後の方、なんか良く聞き取れなかったな。なんて言ったのかな？とりあえず微笑んだ。

店員（女）「は…はうわ…！！！！／／／」

あ、鼻血出した。そして倒れた。

店員（男）１「あ、あれは正に天然で鈍感の女殺し！」

店員（男）２「リア充死ね！！」

店長「あ、あれを上手く使えば我が店も大繁盛…ふふ…（ニヤッ）」

この店早く出た方がいいな。なんか狙われている気がする。そしてその店員、俺は鈍感じゃないぞ。いつも修行してんだから気配くらいわかるし、あと俺は天然水、好きだから天然でもいいぞ。それと俺は女に手をあげる程最低じゃないぞ。あとその奴！その言葉、何処から知った！！なんか嫌な予感が絶えない…逃げよう！！

くアクア side

…見失ってしまった。

レイト、いったい何処へいったのだろうか…。近くの店がなぜか騒がしかったのだが、なにかあったのかしら？

とりあえず、その人…なのかな？驚だ…服をきた驚だ…帽子をかぶり、青い服をきていた。お金持ちみたい。今はあの人に聞こう。

ア「すみません、ちょっとお聞きしたい事があるのですが…。」

村人？「ほう、礼儀正しい嬢ちゃんじゃな。儂にわかる事なら答えよう。」

…マスター、世の中には知らない事が山ほどありました…。驚つて喋るのですね…。 実際話せません。この人？が特別なだけです。ちなみに今話している人？はスクールジです。あのデイズニーキャラです。簡単に言えば、ドナルド・ダックみたいな人？です。

ア「この辺で、私の様な身なりをした男の人が、全身黒い服を着た銀色の髪の人を見ませんでしたか？」

ス「ふむ…銀色の髪の人は見とらんが、君みたいな格好をした人は見たぞ。」

ア「そう…ですか。」

…少し残念。とりあえず、テラは見つかりそう。

ス「城の方へ急いでいる様だったぞ。」

ア「ありがとうございます。」

そしてあの人？とは別れた。名前、聞き忘れた。とにかく、城ね。

くアクア sideく

ちい、しつこいなあ。

俺は今、色々な人に追われている。いや、色々ではない。さっきの店だ。

俺の予感は的中して、店長と店員（女）達に追われている。

店長「あの方さえいれば…間違いなく我が店も…。」

店長が店員（女）達に指示をしている。店、大丈夫なのかな？

とりあえず隠れる。人が多いからむやみに速く走れず、さらに目立ちたくないため飛べない。

……よし、なんとかあった。しっかし、ここ何処だよ…。さっき逃げている時に買ったアイスでも食うか。うま。

ふう、よし行くか。さっきのアイス、まじうまい。逃げている時、余裕がでてきた時に丁度店があったからなんとなかった。そして、今かくれているのは…目の前に城の階段…あるえ？アクアじゃん。

??「キヤアアア!」

ん？子供の声…助けるか。

物陰から立ち上がり、駆けようとしたら…

零「ぐわっ!」

??「うわっ!」

誰かにぶつかった。

零「いてて…ごめん、大丈夫か？」

そして手を差し伸べた。

??「こ、こっちこそごめんね。」

…でかい鼠だ…あるえ？こいつ、どっかで見たことある…。

零「はは、俺は岸帛零斗。君は？」

??「僕はミッキー。」

あ、あゝ思い出した。ミッキー・マウスだ。いやゝって、えええええ

ええ！？何故こいつがキープレードを！？

零「お前、なぜキープレードを？おっと、それより上だな。ミッキ
ー、行けるか？」

ミ「はは。僕も修行をしている身さ。僕も戦えるよ。」

零「よし、行くぞ！」

そして同時に階段をかけあがる。するとアクアが小さな女の子を庇
うようにしていた。ちょうどアンヴァースが攻撃をしようとしてい
た。

零「アクア！」

ア「レイト！」

そしてアンヴァースを倒す。普通の剣だぞ、今回は。

零「アクア、そのキープレード使いと共闘するぞ。いいな？」

ア「わかったわ。」

そして小さい女の子が俺のところに駆け寄る。

零「大丈夫か？怪我はないか？」

??「うん、大丈夫だよ」

うん、元気が一番。

零「そうか、よかった。(ニコッ」

??「／／／」

あら、俯いてしまった。

零「ところで、君の名前は？」

すると少女は満面の笑みで答えた。

??「私の名前はカイリ♪」

カイリ（前書き）

すみません、題名と内容が一致してませんね。それと、本当に申し訳ございませんが、今回は全部主人公視点です。

はあ、文才欲しい。だれか文才ちょうだい。

カイリ

カ「私の名前はカイリ」

カイリ「なんだろう、この子から光を感じる。しかも光のあり方がなんかおかしい。まるで闇を照らす光…優しく人々を包み込む様な感じもする。いや、人々まではかすぎるな。」

ア「レイト!!」

すると四本足のあの雑魚アンヴァースが俺に飛び込んでくる。俺は剣を創り、そしてアンヴァースに投げる。

アンヴァースは消滅する。まったく、こっちは取り込み中だったの。零「カイリ、ちょっと待ってて。俺はあの危険物体を排除しに行くから。」

流石に危険物体はないか。物じゃないし。

カイリは頭を傾ける。そうだな、わかんないよな、危険物体。

カ「?」

零「とにかく、行ってくるから、そこを動かないでね。」

カイリは頷く。さて、やるか。

俺は共闘しているアクアとミッキーの間にはいる。

零「アクア、ミッキー。俺も参戦する。」

そして俺は剣を出現させ、構える。

ア「レイト、いける?」

不意にアクアが俺の台詞をとってきた。

零「アクア、それは俺の台詞だぞ。言つとくが、俺はお前を教える側だったんだぞ。」

するとアクアが言い返す。

ア「私だって、レイトに魔法を教えたわよ?」

ち、一本とられたね。

零「はあ、…よしやるか。」

ミ「来るよ!」

ミッキーも構える。しかし、ミッキー強いな。かなり強いだろうな。多分。戦闘に入ると能力発揮タイプかな?

零「…ああ。」

前に6体…雑魚が。

そしてアンヴァースが突撃してくる。見ててウザイ。ミッキーとア

クアは素早い動きで、俺は魔法と能力で戦う。

一瞬に終わった。とそのとき、また新手がきた。

なんだ、この風船みたいな奴は。

風船みたいなアンヴァースは、息を大きく吸い、そして吐いたいきおいで突進してきた。

アクアは魔法、ミツキーと俺はかわした。

全部で7体…さっきと違うか。

ア「はああああ!!」

アクアが一体のアンヴァースに斬りつける。だが、アンヴァースには効果があり見られない。ダメージがあまり届いていない。さらにそのアンヴァースは息で…ためたのか?なんかでかいボール状態で転がってきた。

おい、なんかやばくないか?

零「アクア!」

俺はアクアに駆けつけた。だが、転がってきたアンヴァースは爆発し、アクアは反動で吹っ飛ぶ。

ア「はぐっ!!」

倒れたアクアに駆け寄る。

零「立てるか？」

ア「へ、平気……く！」

少しダメージがでかかったかな。立とうとしたら膝がついた。

零「……………」

…なんだ、これ。怒りが…溢れてくる。

落ち着け、落ち着け俺。

…しかしなんだこれ。なんか大切な物に傷つけられた様に…怒りが…落ち着け。

一体が俺に突進する。

それをかわし、後ろにまわりこんでおもいつきり斬る。

すると今度は普通にアンヴァースが消滅した。

わかったぞ、こいつらの攻略方法が。

零「ミッキー、やつらの背中を狙い、おもいつきり斬れ。でないとさっきみたいに爆発する。」

ミッキーは頷き、言われた通りにした。するとミッキーを相手した奴も消えた。

あ、そうだ。ちょっと試すかな。技が少なすぎるから少し新技考え

てたからな。

…残りは5体か。

零「ミッキー、下がってくれ。」

するとミッキーは俺のところに来た。

ミ「レイト、なにかするの?」

ミッキーが問いかける。まあそうでなきゃ下がらせたりしないっての。

零「ああ、そうだ。見てろよ。」

そして、今手に持っている剣をアンヴァースに向けて投げた。

イメージは…寄生虫つてところかな?うう!!…きもちわるい…やめやめ、増殖つてな感じでも…やっぱ、そっちもきもちわるいな。そしてアンヴァースは俺の剣が刺さった。ありや、やっぱり膨らむんだな。何故か後ろから、さらに強い打撃じゃないと倒せないみたいだな。

え〜っと、体内で増やす感じだから…技名はこれでいいか。

零「…『ナパーム』。」

ア・ミ「…!!?」

まあ技名を言ってから発動させた。驚くのは無理はない。なんつ

たつて、剣が刺さったアンヴァースは体内から何本もの剣が出てきて破裂した様にバラバラになって消滅した。

そして体内から出た剣はそれぞれのアンヴァースにめがけて飛び、そして剣が刺さったら最初のようにバラバラになって消滅した。なんというか、技を開発したのはいいんだが、普通の相手なら剣を刺しただけでも倒せるし…なんにせ、この技は殺り過ぎだし…そして…

零「アクア、ミッキー、この技は控えるよ。」

ミ「うん…僕もそうした方がいいと思うよ…。」

ア「…………。」

グロイ。ミッキーは顔を青ざめて言うし、アクアは放心状態だ。うん、控えようこの技は。

零「おゝいアクア…戻ってこい。」

アクアの肩を揺さぶる。

ア「……は！？私は何を…れ、レイト！？ちよっ…顔…近い／＼／」

よし、アクアが戻ってきたな。

零「ああ、悪い。」

そう言つてアクアから離れる。なんだかアクアが複雑な心境をしてそんな顔をしている…何故？

そしてカイリ、いつミツキーの後ろへ移動した？

アクアはミツキーの元へ行き、多分礼の言葉でも言うのだろう。ミツキーの身長に合わせて膝を地面につかせて話す。アクア、さりげなく失礼な感じがするが、ミツキーは気づいていないからいいか。

ア「マスター・エラクウスの元で修行しているアクアです。」

零「俺はさつき名乗ったと思うが、岸帛零斗。」

一応、ね。再び自己紹介を、ね。

ミ「僕はミツキー。イエン・シッド様の弟子で君と同じく修行中の身さ。」

…まって、イエン・シッドって誰だっけ？

非常に悩んでおります…だれか、助言を！！

ア「この子からは光を感じます。それで狙われたのでしょうか。」

ミ「うん、僕も同じ事を考えてたところなんだ。もしかすると、この子は特別なかもしれないね。」

うん、俺も思った。うつすらと残る記憶では…たしかプリンスさだっけ？その一人に入るんだよな。確かだがな。

ア「はい。私達は光を守るのが使命です。」

とかなんとか言って、さりげなく師匠的存在になりたいだけなんじゃねえの？すみません、ごめんなさい。だからそんなに睨まないでアクア様。

…え？今心を読んだ？読心術か！？

ミ「一緒に頑張ろう！」

ミッキーは握手をしようと前へ手を伸ばす。だがその時、ミッキーの懐がひかりだした。

ミ「うわ！？ちょっとまって！」

そしてなんかの物体を取り出した。

ミ「僕は大丈夫！」

いや、大丈夫そうに見えないからね。

ミ「また何処かで……」

……ミッキーは星となった。

いや、なんだあれ？急にどっかに飛んでっちまったよ。

みんな呆然とする。そうだな。あれじゃ仕方ない。

それを割るようにカイリに話しかけた。

零「カイリ……だったか？大丈夫だったか？」

頭を撫でながらカイリに話す。

カ「うん♪ありがとうお兄ちゃん♪」

するとカイリは…

カ「はい♪」

花を渡してきた。

零「これを俺達に？」

カ「このお花をつんでたの。お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとう

♪」

…いい子や。

あ、そうだ！一つ言っとくぞ！俺は絶対ロリコンじゃねえぞ！

そして花を受け取った。

え？話をそらすな？いいじゃん別に。ほら、キーワードにもないつしょ？主人公はロリコンなんて…なに？メタ発言くるかもねが俺には主人公はロリコンだ！って見える！なんだ！？どうなってやる！

…は！！あれ？戻ってる…さっきのは気のせいかな。

渡された花を半分アクアに渡す。受け取った花を見てアクアは微笑

んだ。

ドクンッ！

な、なんだ今の？一瞬、アクアが物凄く可愛く見えたが、いったい…なんだ？

ア「可愛いお花ね、ありがとう。」

カ「私はカイリ。お姉ちゃん達は？」

おっと、自己紹介はまだだったな。向こうしか教えてもらってないしな。

ア「私はアクア。」

零「俺は岸帛零斗。零斗って呼んでくれ。」

とりあえず微笑んだ。

ア・カ「……／／／」

二人とも俯いてしまった。む？さっきの俺と同じ感覚に陥っているのかな？うん、なら俯いてしまうよな。俺だってその瞬間はそっぽ向いてなくちゃいらなかったもんな。これから控えよう。『ナパーム』と同じ様に。いや、あれ程なくていいか。

さて、お礼しなくちゃだな。このもらった花を…茎をまるめて…ムズいな、これ。そして結んで…できた。

お婆さん「カイリー。」

む、迎えが来たのかな？

カ「あ！おばあちゃん！」

ア「あ！カイリ、ちよつと待って。」

カイリが去ろうとした時アクアが止めた。

アクアはカイリのネックレスになんかの魔法をかけた。ふむ、なんかよくわからんがすげえな。包み込むような魔法だな。

ア「カイリを守る魔法をかけたからね。いつか貴女を闇から守ってくれる光のもとへ貴女の光が導いてくれる。お花のお返しよ。」

俺がいる事でそれが別の光に導かれたら…なんか俺って重罪。

カ「ありがとう。」

零「そして俺からも…と。」

カ「え？」

カイリの花で作った花の指輪をカイリの指にはめた。けっこう大変だったぞ。指輪つつても、花でかすぎるし、茎を切らなくちゃいけないし、え？そうには見えなかったって？ま、いいじゃん。

零「カイリ、ちゃんと大切にするんだぞ。」

カイリの頭を撫でた。

カ「う、うん…／＼ありがとう…レイトお兄ちゃん／＼」

そう言うときカイリは去っていった。

む？アンヴァースの気配…だな。

アクアは、なんか不機嫌そうだな。なにかあったのかな？

後ろ…いや、上？

ドカツ！

アンヴァースだろう、上からたまたま当たったのか俺とぶつかった。

零「うわ！？」

ア「きゃ！？」

うん、吹き飛ばされてアクアを押し倒す形となった。いや、しかも今回はヤバイ。本日二回目だが、一回目よりひどい。密着しちゃってるんだよね…ふたつのマシュマロが…あたっている…やっちゃまった。

零「ご、ごめん！／／／」

ア「…／／／」

すぐに離れる。俺も顔が真っ赤だぜ、これ。

いや、それより今はアンヴァース！

赤く、なんかの部品みたいな形をしていてヘリコプターみたいにプロペラらしきやつで飛んでいる。

零「あっちにいった！アクア、追うぞ！」

アクアも立ち上がった。

零「ん？どした？顔赤いぞ？」

あ、たぶんまだ根にもってるのかな？

ア「……馬鹿！／／／」

…何故かアクアにひっぱたかれた。

アクアは階段を駆け降りた。

…多分さっきのだな。うん、あとで謝ろう。それより、今はアンヴァースだな。

巨大アンヴァース（前書き）

すみません、かなり更新遅れました。この後の展開どうすんべにな
ってました…ちよつと今回は自信がありませんが、楽しんでいただ
けると幸いです。文オプリーズ!!!!

巨大アンヴァース

くアクア side く

あの時、ついついレイトをひっぱたいてしまった。

レイトに、嫌われてないだろうか…。

流石にやり過ぎと後悔した。

けれど、なんで私はそれ程にレイトの事を気にするのだろう…。

大きなアンヴァースを追いかけながら思った。

やっぱり私はレイトの事が好きなのだな、と。

その前から気づいていた。けれど、これ程まで頭の中がレイトでいっぱいになっていたとは気がつかなかった。

はあ、レイトになんて謝ろうか…。

そんな事を考えていると今追っていたアンヴァースの通っただろう跡があった。

あの城の階段をおりてきて、そしてすぐに見つかった。

扉だった。

鍵がかかっていただろう頑丈な扉。それが普通に破られている。

…あのアンヴァース、強いだろう。

私はアンヴァースを再び追った。

〈零斗side〉

はあ、まったく痛いもんだ。

何故アクアは怒ったのか謎だけど、今はアンヴァースだな。

つつても、見失ってしまった。階段をおりたところにいるのだが…
どうしようか。

店長「あ！見つけたぞ！！追え！！」

店員（女達）「おおおお！！！」

……………え！？

まだいたのかよ！まじっすか！？というか店の方は大丈夫なのかよ！
！？いや、いや、こっちに来るよ！？ぎゃあああああああ
あ……………。

くテラ（笑）side

ワタシハテラダ。

イマトアルヒロバニキテイル。

ナニモノカノケハイガスルノデース。ハイジョシギヤアアアアアアア！

くテラside

…なんだったんだ、今のは。

なんか俺そっくりに化けたアンヴァースがいた。む？何故アンヴァースだって分かるかって？そりゃ、身長が俺の倍はあるし、服装は同じでも、奴の身体は紫だった。だからとりあえず斬つといた。

ほら、ちゃんと消えた。うん、奴は絶対アンヴァースだ。

テラ（笑）「イキナリナニヲスルノデース。」

…………消してもいいよな？

テ「……………」

テラ（笑）「ショーシューリキー……!!」

よし、投げといた。しかし、なんだ今の歌は？ま、気にしまら負けだな、うん。

それを投げ落としたと同時に後ろから足音が聞こえた。そして俺の元に来る。多分レイトとアクアだろう。だが、俺の予想とは違う人物が来た。

一人はアクア、これは合っていた。だが、もう一人は…

テ・ア「ヴェン!?!」

ヴ「テラ!? アクア!?!」

ヴェントウスことヴェンであった。

そして再びアンヴァースを見る。それは三体。だが、その三体は部品の一部の様だ。

空中に浮き、プロペラみたいなのを付けたアンヴァース、それは手の形になった。

そして俺の追っていたアンヴァースは足の形となった。

そして中央に浮いているのは胴体の役割をしているのだろう。それは変化無しで、そして部品となったアンヴァースをくつつける。

巨大な身体になった。しかも部品一つ一つがアンヴァースのため、
全てを倒さなくてはならない。

手の形をしたアンヴァース、足の形をしたアンヴァース、胴体の役
割をしているアンヴァース。

これは苦戦しそうだな。

覚悟を決め、俺、アクア、ヴェンはキープレードを構える。

さあ、弾幕勝負開催だ。

ごめん、レイト。レイトの台詞、使わせてもらった。

しかし、弾幕って具体的に何なのだろうか？

………気にしても仕方がないか。今はあのアンヴァースを倒す事に
集中するか。

くヴェンsideく

なんか久々に俺の出番がきたな。さて、張りきって行くぞ!!

今、目の前に俺の追っていたアンヴァースがいる。それも完全体み
たいな感じのが。

その巨大アンヴァースが突っ込んでくる。

拳を振り下ろし、俺たちを潰そうとする。

だてに修行してきた訳ではない。レイトにも教わってきたのだから。こんなちよろい。

俺たちは当然の様に避けてアンヴァース撃退のためにキープブレードをアンヴァースに振る。

だが、今まで戦ってきた奴とは違い、こいつは強い。相手はさらにレイトの様に空中に浮いている。あの大きな身体なのに避けられ、そしてそいつの拳が俺に飛んでくる。

ヴ「がはっ!!」

ア・テ「ヴエン!!」

直接的なダメージは避けたが、当たったことには変わりはない。さらに力が強く、それでも強烈な痛みを感じる。

俺は吹っ飛ばさるが、空中で体制を直し、また着地と同時にアンヴァースにまた駆ける。

だがまた拳が飛んでくる。そしてある言葉が頭に浮かんだ。

―自重。

あの光の玉の暴走の時、レイトが注意した言葉の中の単語。

全くその通りだ。

攻撃に特化させているから防御の体制はキープレードを前に出す以外なかった。だが自分の勢いと相手の力強い攻撃でどんなに頑張っても戦闘不可能になるダメージだ。

俺はもう駄目だ。そう思った時だった。

当たるはずの拳がテラによって払われていた。

テ「ヴェン！行け！！」

俺は軽く頷き、そして勢いに任せて突っ込む。そうだ、今こうして戦ってくれている親友がいる。駄目だと思っではいけない。

だがやはりそう簡単に進ませてくれない。アンヴァースは一応三体いる。しかも意思も持っている。胴体の部分が魔法らしきものを撃ってくる。だが、この程度ならレイトの弾幕ってやつより軽い。

だが、油断した。今度は足が自分に迫ってきた。蹴り飛ばされると思いきや、また親友に助けられた。

ア「ヴェン！大丈夫！？」

アクアが魔法で防いでいた。流石に魔法は頑丈だったのか、アンヴァースは怯んだ。

ヴ「有り難う！アクア！」

皆の助力を無駄にしないと突っ込み、そしてアンヴァースに一撃あてて成功した。

アンヴァースはさらに怯み、少し後方にさがる。それを好機と俺は突っ込む。

これで倒した。

俺はそう思った。

その瞬間、身体右側から痛みを感じた。

アンヴァースの拳だった。

強すぎる。意識はまだ途絶えてはいない。だけど、身体は動きそうにない。

はあ、俺の出番、案外少なかったなあ…。うん、また今度出るよね。

くアクア side く

ヴェンがアンヴァースの拳に当たる。その時、怒りが込み上げてきた。

よくも親友に…！！

しかし、ヴェンの悟った目はなんだったんだろう…私には理解し難い。

だが、今はアンヴァース！

テラも怒っているのだろう。アンヴァースに突っ込む。私も行ななくちゃ！！

ヴェンの敵をとる！

テラと同時にキープレードを振り下ろす。しかし、やはり無神経に振るったのが間違いだったのか、簡単に防がれ、逆に返り討ちにあ

う。

テ「ぐはっ!!」

ア「はぐっ!!」

ヴェンの近くのところに吹っ飛ばされた。

アンヴァースは止めをさそうとなにやら魔力らしきものを中央にためている。

もう駄目みたい。

レイト…助けて…!!

く零斗sideく

はあ~~~~~。

もう勘弁だよ、これ。

俺はあの店の連中に無理矢理強制労働させられている。

あ、強制なのかな？一応一時的なものだしな。さらにマニーまで貰えるからな。しかも時給とかじゃない。多分：こういう時って、なんて言うのかな？給料は聞いていないが、売上額の2割は出してくれるらしい。

おいおい、大丈夫なのか？とかと思い、聞いてみたら店長曰く「また君が来てくれると信じているよ。」だそうだ。まったく会話が成立していないが、つまりなんだろうか：勧誘？いや、違うかな？

とにかく、俺が働くときつい。とにかく凄惨。客が入ってくるのなんの。私服のままだけど、バツチらしきものを胸につけているから大丈夫だと思う。：なぜバツチなんだろうか？

しかも客の大半が女子。いや、9割が女子。しかも何故か店員俺しか呼ばない。いや、なぜに？

零「御注文は以上で宜しいですか？」

女客1「……………（ポ／／／）」

女客2「……………ふあ／／／」

零「あの…お客様？」

女客1・2「ひゃ、ひゃい！／＼／」

てな感じで全く会話が進まない。

だがそこで救いの声が！

店長「すみません、お客様。まことに申し訳ございませんが、在庫の方がきれたので……」

なんと、今日で全てが品切れ！これで解放される！

それで客が渋々帰っていった。

店長「いやゝ有り難う。助かったよ。はい、給料だよ。」

な、なんと！！？

なんかのクレジットカードらしきやつが渡された。その額が……ばねえ……

100,000,000マニー……

その文字がカードに書かれていた。あ、ありえねえ……どんだけ貰えるんだよ……てかこんなにいらねえ……。

店長「それとこれも。」

今度は現金で100000000マニ貰った。さ、財布がパンパンっす…。

——レイト…助けて…!!

誰かが呟いた…いや、多分アクアだろう。何故かアクアの声が脳裏に…!!!

俺は店を抜け出し、そして素早く人目のつかない場所へ移動し、そして空を飛んだ。

なんか、嫌な予感がするな。

そして高度を上げ、見えたのが巨大アンヴァースだった。そこにい

るのは…あの三人だった。しかも力なく倒れていた。

巨大アンヴァースが多分レーザーを放とうとしているのだろう。

一気に高度を下げ、三人の前に立った。

ヴ・ア・テ「レイト!?」

左手で三人を白魔法『ケアルガ』で回復させ、右手で魔力をためてレーザーを放つ準備をする。

零「よお…随分と親友が世話になったなあ。」

そして巨大アンヴァースがレーザーを放つ。放たれたレーザーを俺のレーザーで応戦した。

零「今はかなり機嫌が悪いんでな…本気で…殺らせてもらう!」

互いの巨大レーザーがぶつかり合い、そして若干俺が押す。

そして俺のレーザーが勝利、巨大アンヴァースにぶつかる。

零「ヴェン! アクア! テラ!」

俺の回復魔法により、傷が癒えたのか三人は既に立ち上がっていて各自のキープレードを持っていた。

俺が声をかけて、三人は一斉にアンヴァースに飛びかかる。

アクアが上から、テラは左斜め上、ヴェンは右斜め上とアンヴァー

スと同時に斬る。ダメージは大きく、あと一発で消えるだろう。

零「……久遠に眠れ……。」

そして俺は最後の一撃を放たんと、漆黒の剣を出す。その剣は普通の形がだ、全てが漆黒である。

零「貴様ごときにこれを使うのはもったいないが……親友^{とも}を傷つけてくれたからな……幸せに思え……貴様は俺の切り札を味わって消えるのだからな……。」

魔力を剣に送る。やはり不完全であるが、威力はそれなりだ。なら、充分だ。漆黒の剣からは炎がまとわれる。柄の部分も。あ、俺は平気。自分の魔力で纏わせているから俺は平気。

零「……刹那に消えよ……」

禁忌『レーヴァテイン』。」「

炎の大剣と化した漆黒の剣、『レーヴァテイン』は巨大アンヴァースを一瞬にして燃やし、灰にした。

レーヴァテイン…俺のつかえていた吸血鬼、フランドール・スカーレットが使っていた武器。よくわからないが、とにかく威力は高い。戦いが終わると三人がかけよってくる。

ヴ「やったな！レイト！」

ヴェンは一人テンションがハイになって話してくる。

零「当然だろ？皆一緒だし、このメンバーなら敵無しだ。」

ヴ「だな♪」

ア・テ「（レイトだけでも充分過ぎる程に強いと思うけど（がな）…。）」

何かこの雰囲気ぶち壊しな事を思われている気がする…。気のせいだよな。

そしてヴェンが何かに思い出したのか、ポケットをあさりだした。取り出したのは三つのカードだった。

ヴ「デイズニータウンの永久入場パス。面白い所なんだって。…保護者と…行きなさいって言われたんだ…。あ、レイトの分が無い…」

ヴェンはどうしようとあわあわしている。

零「別にいいさ。その世界は興味無いし、それに任務を遂行しなくちゃな。」

ヴ「…ごめん、レイト。」

俺は軽く平気平気と流した。

さて、どうやらみんなここにいるみたいだし、俺は必要ないな。次の世界の移動の準備にかかるか。

俺が異空の回路を開いてこの世界から出ようとすると、アクアに手を掴まれ、止められた。

零「…どうした？」

ア「……。」

アクアは俺の質問に答えない。なんか言葉の整理が出来ていないのか、少しあたふたした感じだ。

ア「…あの…さ、あの時の…事……。」

あの時？はて…なんの事？

零「え？あの時って？」

素直に言っと、アクアはキョトンとした顔で俺を見る。

ア「…………ふふ。」

?? アクアは何故笑うんだ？

零「どうした？」

再び聞く。すると、返ってきた言葉は

ア「ううん…なんでもない。」

引き止めていた手を話す。何か吹っ切れたみたいだ。だが、なんだ？

零「ま、いいか。んじゃ、別の世界でまた会おう、アクア。」

そして俺は異空の回路に入ってしまった。

くアクア side く

異空の回路に入るレイト。なんだか、叩いた事わ気になっているのかと、嫌われたのかと思ってた。けれど、それは嬉しい方向に予想外だった。

レイトは、嫌うどころかなんの事と言ってきた。その時、考える私が馬鹿馬鹿しくなった。つい、笑いがもれた。

けれども不安が心の何処かに感じる。

この先、私たち、マスター・エラクウスとレイトも含めてバラバラになっってしまう…その不安が何故か絶えない。

…今は今の事だけを考えよう。

そして私はヴェンとテラのところへ行った。

おまけ

〈零斗side〉

異空の回路を漂っている。そして、異空の回路であるものを思い出した。

クレジットカードらしきやつ。

なんかわからないが、もう一回確認してみたくなった。クレジットカードらしきやつを取り出した。

1 0 0 , 0 0 0 , 0 0 0

この数字が表に書いてある。やっぱり、金持ち的な展開になるのか…。

そう思いながら裏を見る。するとその幻想は儚くぶち壊れた。あ、一応金に関しては多くあった方が便利だから金は望むよ、流石の俺も。この世界の旅だな。

話を戻そう。裏を見ると…なんかこんな字が書いてあった。

図書カード

………この世界にこんな物あったのか？いや、それは問題じゃない！今問題なのは図書カードと“日本語”で書かれていた。わかる？“日本語”だよ？この世界の文字は一応わかる。なんとなく読めちゃうんだよ。それはそうと、このクレジットカードらしきやつのは正体は図書カードだった。いや、それだけではない。これ絶対偽物だ。だって、固すぎだから。いや、マジで。よく見たら厚さ1cmはあった。いや、よく俺の財布におさまったな！！

畜生、最悪だこれ。

まで、あの店長がこんな物を持っている筈が…犯人は一人しかいない。

―あたりだ。―

…お前のせいか！神！

―説明しよう、あの時……………

説明が長いのでまとめます。

零斗金持ちチャンス↓世の中そんなに甘くていいかと神半切れ↓本
物とすり替える↓偽物が零斗の手に渡る

…と言うことだ。―

神…許すまじ…無念！

デスティニー・アイランド：未来の勇者（前書き）

ふむ、やはり文才ないな。しかし、自分ではすごく頑張っている…
はず。

とにかく、ご覧ください。

デステイニー・アイランド：未来の勇者

俺は最初に来た世界を思い返していた。

旅立ちの地

俺の居場所をくれた人たちの故郷、俺を親友^{とも}として見てくれている人達の故郷。見ず知らず、さらに異世界から来たとかなり怪しい発言でもそれを信じてくれた。お守り…俺に繋がりのお守りをくれた、親友を誓った大切なお守りをくれた場所。

なんだかんだでアクアと一番仲が良い。この世界の事を教えてくれたのもアクアだし、繋がりのお守りをくれたのもアクア。なんか俺を救ってくれたのもアクア。

…何故か今の俺にはアクアしか頭の中にない。可笑しい、俺はアクアを親友として見ている。だったら親友であるテラ、ヴェンだって出てくる筈ではないか？何故だ…何故なんだ…くそ…。

ふと頭に浮かんだのが、前の世界で見せてくれたアクアの笑み。何故こんなに記憶に残る？今までそんな事は無かったぞ？いつたい、なんなんだ……。

考えるのを止めよう、そう思い目を開ける。すると太陽の光と共に

二つの顔が見えた。

??「ねえ、なんでこんな所で寝てるの？」

別にこんな所では無いだろ？この世界に来て、んで見たら透き通る海の水、ゴミ一つない綺麗な砂浜、辺りを見回したらとある島についていたみたいだった。んで、あまりにも久々に見た海だし、波の音でも聞きながら休憩ついでにねっころがってただけだ。

しかし、こいつら誰かに似ている…さっき話しかけてきた少年、ヴェンみたいにつんつん頭の奴ともう一人は白…いや俺と同じの銀かな？うーん、結構重要な人達だったような…。

取り敢えず起きるか。

立ち上がり、服についた砂をはらう。少年二人の目の前に立ち、話しかける。

零「俺は岸帑零斗って言うんだ。ちょっと遠い所から来た旅人さ。君たちは？」

銀髪の少年が話す。

??「俺はリク。こっちはソラ。」

リクがつんつん頭、ソラの代わりに言う。

ん？ソラ？リク？ああ、光の勇者と闇の勇者か。

二人は片手には木で作られた剣の形をしたオモチャが握られていた。

零「なあ、それで何してたんだ？」

すると俺の質問に今度はソラが答える。

ソ「うーん…決闘？」

零「何故疑問…。」

つついッッコンでした。

零「よし、なら俺もその決闘とやらに付き合っぞ。どう？」

するとソラとリクは意外そうな、だが喜んでいるような余裕そうな、なんか微妙な顔をしていた。

ソ「いいの？えっと…」気軽に零斗って呼んでいいぞ。「…レイト、いいの？」

いいの？発言を二回…余裕だな、ソラ。

多分子供にしては強すぎるし、そこらのおじさんでは勝てないくらいの強さを持っているからかな？ソラはなんだかんだでリクといつも戦ってたし、な。

零「ふふ…じゃあ、試してみる？」

軽く微笑み、二人に話す。軽く挑発つきで。

リ「わかった、レイト。手加減はしないぞ？ソラ、いくぞ！」

ソ「うん！」

そしてしばらくして、ソラが……あれは木刀か？いや、木剣でいいか。これからそう呼ぼう。木剣を渡してきた。

ソラは両手で、リクは右手で木剣を持ち、軽く上に上げ、左手は前に出して構える。

俺は木剣を右手に持ち、軽く前に構える。

零「よし、いいぞ。どこからでも来な。」

ソラとリクは駆け出し、それぞれ木剣を俺に振る。

ソラが上から木剣を振る。俺がそれを木剣で防ぐ。

リ「がら空きだよ、レイト。」

リクが横から斬りかかる。まさか横からか。流石に子供相手に本気で挑めない。さらに俺は長生きであるから、本気になればこの島は

吹っ飛ぶ。今はわからないが、今の力のない状態でも経験の差や、やはり単純な剣技でも俺が軽く勝つ。が、リクとソラはコンビネーションが凄い。常に考えて動いている様に木剣を振るっているように見える。多分本当は本能的に戦ってるんだろ。本気を出せず、かといって手加減しすぎると負けるから結構戦いづらい。

横に避ける。が、またまた今度はソラが背後にいた。

ソ「やつ!!」

木剣を降り下ろす。流石にびびる。子供のこいつらでも勇者は勇者、予想以上に強い。

それを無理矢理避ける。砂が邪魔ですこしつまづく。

リ「終わりだ!」

リクが木剣を振る。それを俺はリクの手首をつかんで止める。

零「危ねえ…君たち強いねえ。」

手首を離し、距離をとる。

零「本当、強いよ君たち。」

ソ「へへん♪どんなもんだい♪」

リ「ソラ、調子にのるな。」

俺が正直な感想を述べ、ソラはどうだと胸をはるが、それをリクが

ツッコミ(?)をいれる。

零「よっしゃ、んじゃ、いくぞ。」

再び静寂がくる。先手は今度は俺。

ソ「うわっ!？」

少し、ほんの少し力を入れてソラの木剣めがけて攻撃する。ソラの木剣ははじきとばされた。

リ「!!!？」

そしてすぐさまリクにもソラと同じようにする。リクもソラと同じく、はじきとばされた。

零「勝負ありだな。」

そして俺は二人の頭を撫でた。

勝負後、俺は砂浜で腰かけて旅の話を聞かせている。ソラが興味を持ち、様々な質問をしてきて、俺はそれに答える。リクは、ただ

ただ俺とソラの会話を聞いている。途中、くいつき、そして所々微笑む。正にリクだな。

ソ「へえ〜？世界ってやっぱり広いんだね」

リクは、ソラのこの言葉を言った時、リクが遠い目をして、なんだか「それが俺の夢だ…。」みたいな悟った目をしていた。ああ、ソラとリクは他の世界に旅立つ事が夢なんだっけか？

零「はは…けれど、君たちのいる平和な世界もあれば、人同士が殺し合う残酷な世界もあるんだ…。」

この言葉にソラとリクはくいついた。

零「世界を渡る。それは過酷なもので、必ず困難が降り注ぐ。そうだ。君たちに教えてあげようか？困難に立ち向かえる方法を。」

ソラはブンブンと頷き、早く教えてと言わんばかりの目で俺を見る。リクは相変わらずクールだが、それは知つときたいみたいに俺を見る。

零「それは、心だよ。」

ソ・リ「心…。」

リクは成る程と、ソラは半分残念な感じなりアクションで二人で呟く。

零「そう、心。どんな困難に立ち向かえる強い心が必要さ。あともう一つ。」

ソラは、今度はもつと凄いものかと俺を期待の目で見る。リクは…
さっきと同じようにくいつく。俺も、この世界で初めて学んだ。

零「それは…」

“仲間”だ。」

今度は二人ともキョトンとした感じだ。予想外だったのか、俺が説明する。

零「“仲間”じゃなくて、“友達”っていった方が分かりやすいかな？どんなに困難に立ち向かえる強い心を持っても、いつかは必ずその心はボロボロになる。だから、信用できる、支え合う事の出来る友達がいれば、どんな困難でも切り抜ける事ができる。」

そして二人を見る。

零「信用出来る友達、君達みたいな、ね。」

そして二人の頭を撫でる。

ソラは目を細め、気持ち良さそうな顔をする。リクも軽く目を閉じ、気持ち良さそうにする。

手を離すとソラとリクは互いに見合い、そして互いに笑う。

はあ、親友か。あいつらどうしてるかな？そろそろ行くか。

俺は立ち上がり、砂をはらう。

零「さて、そろそろ旅にもどるかな。」

ソラとリクも立ち上がる。

ソ「え？もう行っちゃうの？」

零「ああ、また会えるさ。」

俺が微笑むと、ソラは安心した様に笑顔を見せる。

零「じゃあな。」

そう言って、行こうとするが…

ソ「“じゃあな”じゃなくて“またね”でしょ？」

はは、こいつはやられた。

零「はは、そうだな。じゃあ改めて…ソラ、リク、またな。」

そついうと笑顔でソラは返事をする。ソラはリクを引っ張り、砂浜

を駆けていった。

俺も、ソラが見えなくなったら異空の回路を開き、この世界を立ち去った。

オリンポスコロシウム：闘技大会（前書き）

キャラ崩壊おこしてるかもしれませんが。とにかく、ご覧下さい。

オリンポスコロシム：闘技大会

大きな扉を開く。その中は神殿の様な建物があった。

俺、岸帛零斗は神殿らしき建物の下にあった看板らしき物に目に入る。

しかし、ここは平和っぽい。アンヴァースが今のところ全く出現していない。雑魚すら出現していない。

さて、それはともかく看板の元に歩き、その看板を読んでみる。

ふむ、どうやらこれは大会の参加者募集の様な事が書いてある。

零「へえ？興味深いな…ん？」

ぽつぽつと独り言を呟いていると…そこにちよつとつとつと興味深いものが書いてあった。

“ 新たに現れた英雄その名はテラ ”

ほお？テラ…いい度胸じゃねえか？そんなに自分の力がまだまだ未熟だという事を思い知らされたいかゴラア？

＼テラside＼

テ「ヘックション！！！」

…誰か俺の噂してるのか？無理もないか。あの世界では俺は何故か英雄扱いになってしまったからな…。

ブルツツ！！

な、なんだ…？い、今の物凄い悪感…？これは……妬まれてるのか？いや、妬まれてるとか、羨ましがられてるとか、そんな問題じゃねえ…！！もつと恐ろしい片鱗を味わう事になるかもしれないぜ……！！！！

この先、何かがあるな。気を付けて進むか。
しかし、さっきの俺の台詞、自分で言っただけを言ってるのかサツパリ分らなかった…。

＼零斗side＼

さて、とりあえず力試し程度に参加するか。（大半はテラへの妬み）

しかし、参加チケット…普通の方法では手に入れないのかな？

??「君が今欲しいと思っているのはこれかな？」

うん？俺に話しかけてるのか？後ろを振り向くと、顔が細長く、そのわりには身長がでかく、そしてなにより神が着てそうな服。神話に出てきそうな方の神な。あ、ちなみに服の色は俺と同じ黒。そしてそいつは紙をひらひらと俺に見せる。

零「ん？俺に話しかけてんの？」

??「ああ、そうだ。これはこの大会の出場するためのもの…君にあげてもいいんだが…」

こいつはいい。金もかからんし、無条件で手に入れられるとは…と、無条件じゃねえか。今から条件を出しますってか？

??「君、力が欲しくないか？俺様なら君の力をもつと強くする事が出来るんだけど…どうだ？」

…こやつ、あれか？

零「つまり俺にその身体強化の薬の実験を手伝えと？」

??「なんでそこで薬になるんだよ…」

この世界にも薬はあるんだな。

??「違う、闇の力を使ってみたくはないか？」

闇の力……正直、いらね。けど興味深い…どっちなんだよ、俺。

零「んじゃ、引き受ける。というか、ああ…なんて呼べばいい？あ、俺は岸帛零斗。零斗と呼んでくれ。」

??「…礼儀正しいな、君。俺様は冥界の王、ハデスだ。では…」

あ、なんか紙に書き始めた。

ハ「えーっと、出身地に身長体重…年齢は…17辺りか…」

零「ちよつと待てえええい!!」

ハ「うん?どうした?」

こやつ…年齢位は当てろよ!!見りや分かるだろ見りや!!
絶対わかりません。

零「言つとくけど、俺の年齢は440歳だぞ!」

ハ「……お前、何処の神だ?」

…あ、そうか。この世界では非常識か。

零「神じゃない。けど人であつて人でない。」

ハ「予想以上だ…」

零「へ?なんか言つた?」

ハ「いやなんでもない。…さて…」

また再び書き始める。

ハ「…なに?好きな神様だと…?俺様に決まってるだろ!!…エン

トリー終わり。」

なんだ？今のは…？

零「それはともかく、闇ってどんなふうに使えばいいんだ？」

ハ「慌てるな…まずは大会に勝ち進む事だ。」

そしてハデスはその場から消えた。消える時指パツチンしなくちゃ無理なのか？ま、いいか。

取り敢えず一回時間になるまで暇潰すかと後ろを振り向くと…

ア「はあああ！！！」

??「うりやあああ！！！」

アクアと誰かが共闘していた。相手はアンヴァース。どうやら暇潰しを探す必要は皆無なようだな。

さて、今回のアンヴァースは人の様に二本足で立ち、大きな身体にそして手には小さな盾がついている。

アクアともう一人の男、こいつも神話の神の着てそうな服を来ている。

男の方はあまり強くないが、いつか力が開花するだろうな。こいつは修行すれば確実に強くなる。

それはともかく、男は素手、アクアはキープレードで攻撃。だが、アンヴァースについている盾が攻撃の邪魔をする。二人とも弾き飛

ばされる。

さて、加勢するか。

＼アクア side＼

私はこの世界に来て早々、アンヴァースと戦闘する事になった。となりに、ハークと呼ばれる青年が共に戦ってくれている。が、いずれにしても戦況は良くない状況であった。

アンヴァースは強くはない。だが、なかなか倒れない。最後の一体となって止めをさそうとキーブレードを振り下ろすが、アンヴァースの持っている盾に弾き飛ばされる。この相手、疲れる…。

着地に成功し、そこでまた戦闘体勢をとる。キーブレードを構えるが、どうやらキーブレードは必要無いみたい。

前を見ると…

零「アクア、また会ったな。最近よく会うな。」

アンヴァースを既に倒し、彼、レイトが立っていた。

＼零斗 side＼

零「アクア、また会ったな。最近よく会うな。」

アンヴァースを撃退して、アクアに話しかける。

いや、本当、最近…最近って言い方は駄目だったか？ま、アクアはあまり気にしてないからいいか。

ア「ふふ…。」

アクアはクスクスと笑う。…胸が…なんなんだ？この気持ちは…？ま、とにかくつと。あの隣の男に礼を言わなきゃな。

礼を言おうと歩き出そうとしたら…

??「やれやれ、酷いめにあつた…。」

随分とおじさんな声してるな…と思いながら声をした方へ向くと…ちっこい、それはとてもちっこい生物がいた。あ、けど顔つきがおじさんだ…ブルドックみたいな顔つきだと思ったのは秘密にしておこう。

肌は微妙にオレンジで、髭は赤、足はなんと細い、鹿みたいな、しかも物凄く小さい。よく支えられてるよ、その足で。バネはありそうだけだな。…よく見たら尻尾もはえてるよ…。

ゆっくりのつさのつさと歩いてくる。その間に俺はアクア達の元につく。

??「フィルが良い格好しようとするからだよ!」

さっき、アクアと共に戦っていた男がフィルとか言われた生物に話す。

フ「五月蠅い!お前なんかまだまだひよつこだ。」

お前に言われたくはない。言われた男の立場になって考えた俺。

零「なあアクア、さっき一体なにがあつたんだ?」

ア「レイト、それは……………」

零「クアッハッハッハ!」

思わず声をあげて笑ってしまった。だってそうだろ?話しの内容によるとそのちっこいのがアクアを助けようとして逃げ出して、それであのさっき共闘してた男を戦いに無理矢理強制参加…これじゃどっちが未熟か分かるな。

??「はー、もっと強くなって早く英雄^{ヒーロー}になりたいよ…。」

共闘してくれた男がため息を吐きながら呟く。

零「あ、君。さっきはアクアを助けてくれて有り難う。俺は岸帛零斗だ。零斗って呼んでくれ。」

??「ああ、僕はヘラクレス。みんなからハークって呼ばれてる。よろしく、レイト。」

うーん、慣れたつもりだけど誰かしら正しい発音で俺の名前を呼んでくれないかねえ？

ア「強くなる事が英雄^{ヒーロー}になることなのですか？」

確かにそうだ。アクアのこの言葉は結構試しになってる。

へ「そりゃそうだよ！僕もチャンプ・テラみたいに強くなるんだ！」

…駄目だこりゃ。それより、さっきテラって言ったよな？面識があるのか？

ア「テラ？」

確かにさっきの看板で書いてあったし、な。この世界は後にしてるのかね？

フ「ところでお嬢さん、この後の御予定は？」

……ナンパか？こいつ…明らか人間じゃねえのに人間にナンパしてるよ……有りなのか？

フ「俺が鍛えた英雄^{ヒーロー}について語り明かさないか？」

…まてまて、英雄を育成でもしてるのか？

零「なあ、その…フィルでいいか？俺は零斗って言うんだ。それはさておき、テラを知ってるか？」

フ「レイトか…そう、今英雄と言えばチャンプ・テラ。…なんだいあんた達もテラファンか？」

零「いや全然。」

へ「即答かい…。」

だって、ファンとかじゃないし、親友だし。

フ「ともかく、最近はどういつもこいつもテラテラテラだ。」

ア「いえ、私はテラを探しているんです。」

アクアが反論。けどそれじゃそいつの耳には追っかけ野郎にしか聞こえないぜ？野郎じゃなかったな。

フ「みんなそうだ、テラを探している。」

ほら、やっぱり。

フィルが妬みを含めているのか、少し苛立った口調で話しを続ける。

フ「前回の闘技大会で初参加にして優勝という華々しいデビューを

飾っておきながらそれ以来行方不明だ。」

へ「テラの強さは英雄^{ヒーロー}そのものだったそうだよ。」

へラクレスはなんか思い出したかのように話す。

へ「僕も早くテラみたいになりたいな。」

フ「そう、あまりの強さにおかしくなる対戦相手もいたそうだ。」

苛立ち口調がおさまり、そのときの事をフィルは話す。

へ「フィル、オーバーだよ。」

大袈裟など、ヘラクレスはそれはないみたいな顔で返す。

ア「テラはもう…ここにはいないようですか…レイトはどうする?」

いきなり俺にふってきた。

零「俺は少しこの世界に用があるから残るよ。」

につこりと微笑みながら返す。俺、性格変わったな。

フ「確かに今はいないが、闘技大会には姿を見せるかもしれん。」

へ「うん、きつと戻ってくるよ。」

来ねえよ。そう思った俺であった。

フ「闘技大会に出ればテラに会えるかもしれない。そうだ、俺がエントリーしてやってもいいぞ。なんなら、トレーニングもつけてやってもいい。」

わんさかちゃっちゃか話しを進めやがって…。

へ「フィル！僕が頼んだ時はあんなに渋ってたくせに！」

フ「五月蠅い！黙ってる！お前と彼女とでは素質が違っんだ！」

ヘラクレスは直ぐ様反論。けどフィルは黙れみたいな…アクアが困ってるよ…。

ア「わかりました。では闘技大会に参加します。私はアクアです。よろしく願います。」

あ、アクアも参加するのか。楽しみだ。

フ「それじゃあ、さっそくトレーニングから…」

ア「トレーニングはお断りします。」

即答…可哀想に、フィル…いい様だ。

フ「ちっ！恥ずかしがりやがって…まあいい。ロビでエントリーを済ませておく。準備ができれば声をかけてくれ。」

そう言っつて、フィルは去っていった。

さて、と。

零「アクア、お前も大会に出場するのか？」

ア「え！？お前“も”って言うことは…レイトも参加するの！？じやあ、この世界での用事って、大会の参加の事！？」

零「ああ、そうだ。」

超満面の笑みで答える。

ア「私…勝てるかなあ？」

へ「え！？レイトって、そんなに強いの！？」

へラクレスことハークがまさかの事にアクアに質問。

ア「はい。レイトは私やテラの戦い方を指導してくれてました。」

へ「え！！？って事は、レイトはテラよりも強いの！？」

ア「はい。」

へラクレスの質問に冷静に答えるアクア…あ、そうだ。

零「あのさ、ゲームしない？」

ア・へ「ゲーム？」

お？くいついた。何故かへラクレスもだけど。

零「そう。この大会で勝った方は負けた方の言うことをなんでも聞くのはどう？」

ア「なっ！！？」

ま、そうだな。なんでもだからな。

零「アクア、もしお前が勝ったら俺はなんでも言うこと聞くよ？」

ちよつと誘ってみました。さて、どうするか…？

ア「わかったわ…絶対負けない！！！」

お？闘志に火がついたな？それでこそ、実力が見れる。

零「んじゃ、俺はそろそろ出場準備をするから。俺はここで。」

そう言つて、大会の出場準備に備えにアクアと別れた。

さて、楽しみだな。

零斗vsアキラ（前書き）

タイトル通り…ではありません！タイトル通りですがタイトル通りではありません！では、ご覧ください。

零斗VSアキラ

零「ふう〜〜〜…疲れた。」

闘技大会に出場した俺こと岸帛零斗。闘技大会での今のところの成績は神だった。だが、あまり思い出したくない。相手が相手だったから…いや、弱い訳じゃない。寧ろ強かった…いろんな意味で…。

〈回想〉

——一回戦目——

さうて、張り切って行くか。対戦相手の名前は確か……TNだったな。マジで誰？

そして大会の会場に入る。なんか神々の戦いみたいな場所だな。待っていた相手は………

TN「ぶるうううあああああああ！…！」

………へ???

TN「ぬつつふううん！」

現れたのは…筋肉質…超ゴリマッチョなおじさん…が…しかも…キモい！

頬を赤く染めて身体をクネクネン動かして…さらに姿も姿…ピンクのブーメランパンツのみ…

結論から申し上げます…

変態だ…

TN「だああれが邪神も見た刹那消滅して世界崩壊というより次元崩壊する程キモいおじさんですつてええええ！！？」

そんなに酷い事言つてない！！ほら！！観客の人も多数嘔吐してるぞ！！！！ヤバイつて…これはヤバイつて…マジでヤバイつて…！！

TN「ぶるうううあああああああ！！！！」

ぎゃああああああ！！突っ込んできたああああああ！！

TN「ぶるうううあああああああ！！！！」

零「うわああああ！！悪霊退散！！！！『重なりし絶望』！！！！」

とつさに剣を投げて技を発動。

そして謎のおじさんK・O。試合開始から5秒の出来事だった。

——一回戦目——

よし…今度はまとも…だよね？対戦相手見ると…HKって書いてあったんだけど…嫌な予感しかない…。

そして会場に入ると…

HK「ふむ…これはなかなかの殿方じゃ…儂も久々に興奮してきたのお。」

…終わった。

入るとこれまたゴリマッチョでそしてジジイ。姿は…前回よりもっと酷い…白いビキニを…つけている…あれだ…変態だ…。

HK「さあ、儂と良いことしないか？」

ゾワアアアアアアア！！

観客席を見ってみろ！今度は気絶だぞ！？

HK「さあ、漢女の名にかけて…お主をいただく。」

うわああああ！！マジで！？やだ！これに負けたら…うわあああああ！！

零「ひゃあああああ！！『重なりし絶望』！！」

当たってるのに…命中してるのに…！！

HK「ああ…いいのお…激しい…／／／」

ぎゃあああああああああああああ！！止めるおおおおお
おお！！

零「な…な…『ナパーム』！！」

禁断の技を解放してまで倒す！！

HK「ぬわっふあああああん！！／／／」

倒せた…試合開始から15秒の出来事だった。

〈回想終了〉

あれはヤバかった…死んでも良かった…マジで…。小説終わるかと思っ…。

次…の…うん…対戦表見るのが恐怖になってしまった…はあ、あ
！今度はまともだな。

対戦相手は…アクア、か。

くアクアsideく

…次はレイトか。

旅立ちの地で私の…いや、私達の師匠とも言えた存在…そして、親
友でもあり……………／／／

何でも言う事を聞く、か。これで勝って…／／／

と、とにかく私は私の今の全力をぶつけよう。

会場へ一歩一歩と足を進めた。

く零斗sideく

さて、楽しませてくれるか？

会場に入ったと同時にアクアの姿も見えた。

零「アクア…。」

ア「レイト…。」

俺達二人は両者、静かに武器を構える。俺の武器は漆黒の剣、『レーヴァティン』を手に持つている。だが、これは不完全であり、今の状態は炎を出してない状態。いわゆる、普通の剣と変わらない…様に見えるが、実際はかなり強い。軽く、さらに頑丈。そして何故か反動が少ない。つまり思いっきり剣を振っても力比べでも有利、外してしまっても軽いから直ぐに次の攻撃に移れる。だが、これでも“不完全”だ。まったく、本物はどこまで強いんだか。

ま、それで、俺の切り札『レーヴァティン』を出現させた。つまり、これが意味してる事は…

零「アクア、全力で来い。俺も本気で相手する。」

そう、本気の対決だ。まあ、“少し”本気かな？え？さっき本気で相手するって言ったじゃないかって？なにも全力で相手するなんて言ってないぞ。いや、同じか？あ、ちなみに全力は『レーヴァティン』の力を解放、つまり炎の大剣と化した時だな。

会場も俺とアクアの闘気で満たされ、会場が静まる。

…そして…

俺とアクア、は同時に駆け出した。

そして会場はまた観客の声で満たされた。なんという活気じゃ……！！

キープレードとレーヴァテインが交じり合う。

力での勝負あ圧倒的に俺の方が有利。それをわかってて激突したのか……アクアは大きく後ろに後退する。

確かアクアの戦いは合気道のような、力が無い分、技と相手の力の利用で戦うんだよな。だが、ここはあえて力攻めで行くか。

追撃をする。勢いを利用し、レーヴァテインを大きく振る。アクアは流石にこれは受けきれないのかかわす。いい判断だな。今のはほぼ全力だった。その証拠に、アクアの後ろには真空波みたいなものが通った後がある。

それで隙が出来たと、キープレードを俺に振る。それを俺のレーヴァテインで何事も無かったかの様に止める。

ア「！？」

驚くのは無理はないな。さっきは完全な隙だったからな。“普通は”隙がでなきゃおかしいからな。

キープレードを力で押し、アクアを飛ばす。アクアは空中で体制をとり、着地する。

くアクア sideく

嘘だ…今は確実に隙ができた筈だった…。

あれほどの力で空振ったら普通は隙ができる。なのに…レイトは平然と、漆黒の剣で防いだ。

これが…全力…。

力でも、技術でも、速さでも…なら、遠距離ならば…！

数多くの魔法、炎や氷、水、光などの魔法を放つ。

だが…

零「禁剣『ブレイドマスター』…！」

レイトは剣の塊を放つ。魔法を全て消滅させ、私に迫る。

ア「…く…！」

私はすぐさま防御魔法『リフレク』を発動させる。

視界が剣で何も見えない…とにかく、一瞬でも気を緩めると魔法が破れられてしまう。

大量の剣を防ぎきり、剣がなくなった時には

レイトは目の前に立っていた。

剣を振るう。それだけで私の防御魔法を破る。

遠距離も駄目…近距離はさっき試した…最後は…相手の攻撃がギリギリ届かない程度の中距離で…！

魔法で剣を大剣みたいにする。魔力でキープレードをつつみ、大剣の様な形をしている。が、実際は重さはキープレードと同じ。威力のみが大きくなっている。

この技はつい最近習得した技だし、結構自信があつた。が…

零「うおおおおー！！」

上に弾かれたが、重くなつたわけじゃない。ないから隙があまりないのに、一瞬の隙をはいりこみ、私のキープレードを弾く。

いったん後退し、そして再び私の手にキープレードを出現させる。キープレードは手元に現れると思えばどんなに武器が遠くに離れても手元に出現する。そこはものすごく便利だ。

うん？便利？そう、これでいく！！

今度はキープレードをブーメランの様にレイトに投げる当然の様に
かわし、そして間合いを詰めてくる。レイトは多分油断している。
だから…レイトが接近し、近くなった瞬間。キープレードを出現

させて…

ア「はあああああ！！！」

零「ッ！？」

レイトの武器が飛ばされる。

勝った！そう思っていた。が…

零「俺の剣を無力化させても、まだ武器が無くなった訳じゃないんだよ…俺の勝ちだ。」

え？

そして首に手刀を当てられた。

私の…負け…か…。

そこで私の意識が途絶えた。

＼零斗side＼

ひやひやした。

ま、あんな事言っただって、俺もアクアみたいにまた剣を創ればいいんだから問題は無しだったんだが、まあいいか。

ワアアアアア！！！！

歓声か？随分五月蠅いなあ。俺はアクアを担ぎ、会場からいったん出た。

さて、決勝戦は誰が相手になるかねえ？

くハデス side

なんなんだあいつは…

この俺様が恐怖するとは…闇の力、制御というより本当に支配しまう…！！

な、ならここは俺様が勝って、あいつより強い事を証明させればいいんだ…そうだ。そうすればいい…。

ちなみに零斗は既に闇の使い方を教えてもらう事、最初のあの二人の試合が印象強すぎて忘れてます。

く???? side

おお！？いい試合だったなあ…あれは凄い！あれはもしかして、テラを越えてるかもしれないな。

なんつったって、あいつは結構誤魔化せてたみたいだけど、まだ全力じゃないみたいだな。

決勝戦が楽しみだぜ！！

ザックス（前書き）

うーん、書き方がおかしいのかな？何度が書き直し、そして試した結果、駄目でした…（TT）

では、ご覧ください。

ザックス

俺こと岸帛零斗は…あの試合の後、なんの問題も無く…いや、一つあった。それは…

ア「……………／／／」

アクアの態度。

気絶から目がさめるのが非常に早かった為、背負ってロビーに入ったところで目がさめた。そして、それ以降ずっと俯き、無言で俺の隣を歩いてる。

零「……………。」

ア「……………／／／」

零「な、なあ…アクア？」

ア「……………／／／」

現在進行形で、今も俯いて歩いている。今、ロビーを出て、軽く暇潰し程度に歩いている。

零「……………ああ、そういえば確か決勝戦の名前は…おゝい、アクア？」

ア「……………／／／」

零「…アクア！」

ア「ひゃ、ひゃい！！／＼／」

あ、やっと反応してくれた。やっぱり、許可無しに背負っていたから怒ってるのかな？

零「あの…ごめん！」

ア「え？」

零「いや…気絶してるとはいえ、許可無しに背負ってしまったて…女性だから嫌がるよな？本当にごめん！」

取り敢えず頭を下げた。

ア「い、いや…そんなことは…嫌というか…恥ずかしかったというか…ボソボソ」

零「そうか…良かった。」

取り敢えず、この話しはいったん終わり！勝手にしめきらなきゃ永遠に終わらなさそうだしな。

零「そういえば…アクア、決勝戦の相手ってさ…誰だっけ？」

歩きながらアクアと会話。うん、もう平気だろう。

ア「…ん？あ、決勝戦ね。決勝戦の相手は…確かザックスという人

だった気がするよ?」

ザックス…名前に強敵かも。

零「へ?」なんか強そうな名前だな。ザック…」

その時、俺は言葉を中断しざるをえなかった。いきなり黒髪で、少しツンツンで、兵士っぽい鎧を着ている青年がいきなり割り込んできた。

??「あんたがレイトだろ?俺、ザックス!決勝戦の対戦相手な!よし、これに勝ってテラと勝負だ!」

…ザックスねえ。ってか、いつの間にかザックスの後ろにはフィルとヘラクレスがいるし。

ア「テラと勝負?どういう事でしょう?決勝戦の後にまだ試合があるのですか?」

アクアがザックスに質問をする。

零「あ、それ俺も聞きたい。ザックスとやら、それはどういう事だ?」

ザ「ありやま…ルール知らないんだね。あーフィル、説明してやってよ。」

ザックスが俺達の質問をフィルに投げる。

フ「この大会は西と東、2つのブロックに分かれて行われ、それぞれ

れの勝者が戦って優勝を決めるんだ。お前さん達が今参加してる、
していたのは東ブロック。もしかするとテラは西ブロックに出てい
るのかもしれない。」

ア「でしたら、西ブロックへ行き、直接確認してきます。試合も敗
北しましたし。」

アクアがフィルの説明を聞き終えたと同時に移動を開始する。が、

フ「それは駄目だ。」

フィルに止められる。ってか、フィルしつこいな。

フ「大会参加者、参加していた者は別のブロックの試合を見ること
は許されていない。」

絶対そんなルールは存在しないな。だって、試合に出る必要性が無
いの試合を見てはいけないうって、絶対どの大会に行っても無いん
じゃない？

へ「そんなルールあったっけ？」

ザ「さあ？」

ヘラクレス、ザックスがヒソヒソと話している。聞こえてるけどな。

うーん…少しだけ協力してやろうかな？

零「アクア、さっきのゲーム、勝者は俺だったよな？」

アクアがギリギリと体をビクつかせた。

零「んじゃ、俺の試合、最後まで見届けてくれよ。」

アクアは溜め息を吐き、頷く。

ア「わかった。それじゃあ、私は先に行ってるね?」

観客席の方へとアクアは向かった。なんだかんだで試合を見てくれるのが嬉しい…かな?

一方ヘラクレスとザックスはなんか話している。

ヘ「ザックスとレイトの試合、これは見逃せないぞ!」

フ「ハーク、お前はトレーニングの続きだ。」

あら、可哀想なヘラクレスだぜ。

ヘ「ちえつ。ザックスもレイトも頑張つて!それじゃ!」

ヘラクレスは何処かへと駆け出した。この場にいるのはザックスと俺。

ザ「レイト、改めてよろしくな。」

零「ああ。簡単にやられるなよ?」

ザ「へえ〜?随分と余裕じゃん!よお〜し、燃えてきた!」

…テラの事、一応聞いてみるか。

零「なあザックス、テラとお前はどついう関係なんだ？」

するとザックスは懐かしむ様な、また感謝している様な、またライバルの様な瞳を俺に向け、答えた。

ザ「テラは、恩人なんだ。前回の大会でハデスって奴がテラを闇に引き込もうとして俺を利用したんだ。俺はハデスの術にかかって、普通じゃない力でテラを追い詰めた。でも、テラは闇に堕ちることなく俺を解放してくれたんだ。」

へえ？ハデスの野郎、最初は親切だと思っていたんだが…俺の親友^{とも}であり弟子でもあるテラを、ね。マジでいつぺん俺の禁忌『レーヴァテイン』を叩き込まなきゃ駄目みてえだな！

闇の扱い方を教えて貰う事、真面目に忘れてます。

ザ「重い話は終わり！それじゃ、試合会場で待つてるからな。」

零「あー、ちょっと待って。」

ザックスを止める。さて、ちょっとした余興を楽しもうかね？

ザ「ん？なんだ？」

そこで俺は真剣かつ暗い、そして怪しい笑みでザックスを見る。

零「なあ、一回テラと戦った事あったんだよね？」

ザ「んあ？そうだけど…。」

ふ……ふふふのふ。これは笑いが止まらん。

零「テラに負けたんだよな？んじゃ俺を倒せたらテラより強い事になるぜ？」

ザ
「
?
?
?
」

頭に大量のクエスチョンマークを浮かべさせるザックス。

零「この場、今ザックスと話している人物が、テラの師匠である存在だったかどうか？」

「ま……まさか。」

零「そう、俺がテラに戦い方を教えてきた者だぜ？」

ザ「……………えええ

ええええええええええ！！？！！」

ふふ…これは楽しい…楽しすぎる！

零「さらに俺はさつき一緒にいた奴、アクアっていうんだが…そいつにも戦い方を教えてきた。」

ザ「ええええええええええええええええ！？！？！」

け、傑作だ……これは……笑いこらえるのに必死だぜ。

ザ「やべ…俺、勝てるかな？いや、けどレイトに勝てたら…俺は英

雄になれる！これは燃えてきたあああああ！！」

熱い…目に炎を宿し、暑苦しい程の熱気を出してくる。

ザ「レイト！俺はお前を絶対に越す！！」

標的がテラから俺に変更された。さて、これだけ言えば楽しめるかな？

零「安心しろ。全力は出さない。」

ザ「へえ？なら勝負した時に後悔するなよ？うおお！！！」

ザックスが物凄い勢いで会場へ駆けていった。さて、俺も行くかな。

くアクア side く

はあ、期待して損した気分。いや、私は何に期待してたんだ…／／／

けど、まあゲームで負けたのは私だし、最後まで応援しますか。

あ、レイトが入場してきた。

レイトがこの大会で優勝したら…御褒美に…わ、私は何を…／／／

と、とにかく今は大会の方を見よう。

なんだかんだで試合に期待する私であった。

Extra 零斗vsザックス（前書き）

書き方変更しましたよ。読みづらいなら御免なさい。では、ご覧
ください。

Extra 零斗vsザックス

はい、岸帛零斗です。

今現在俺は会場に入場している真つ最中なのです。

アクアには悪いんだけど、この世界にはもうテラはいない。というより、もう既にここに来ていて、んでやる事やったからおさらばしたんだろう。

さて、そろそろ会場につくな。

入場した先には、なんか…普通？な剣を背中にかついでいるザックスがいる。ふーん？こいつもテラと同じパワータイプと見た。けど速さもそれなりだと思う。まあ、戦ってからわかるか。

パワーなら、俺も負けんぜ？

右手、左手の両手に大剣を出現させる。

観客の歓声も静まり、俺とザックスは対峙する。

そしてザックスは口を開き、呟く。

「…テラと約束したんだ。また今度戦おうって。」

ザックスは剣を構える。

ふむ、やはりパワーだな。両手で剣を持ち、持ち方は大剣だな。だ

が、持っている武器は実際大剣ではない。一撃一撃の力の強さ＋速さってやつか。技は…わからん。

「ザックス、テラと戦いたければ俺を越せ。」

俺も両手に持っている大剣を構える。構えるといっても自然体。神経のみを集中させているだけだ。

両者一步も動かない。観客は今かと待ち遠しいような顔をしている。

そして…

「弾幕勝負開催だ。コンティニューは出来ないぜ?」

「行くぞ!!」

両者同時に駆け出し、戦闘が始まった。

一合目、俺の右手の大剣とザックスの剣が交わる。

はあ? どんだけ頑丈なんだこれ? 俺は大剣でやってるのに、太さもこっちの方が上なのに傷一つついていない。

これはすげえな。

右足でザックスを蹴り飛ばす。ザックスは空中で体制を整え、着地と同時に一気に駆け出す。

「うおおおおお！！」

なんだあの気合いは？ザックスはなんとも不思議な奴だ。力を見せつける程強くなってく気がする。

今度は俺が防御、ザックスが攻めだ。

フェイントという手は一切使っていないザックス。その代わり、すべての攻撃が力強く、速い。

飛行も使い、いったん大きく後ろへ飛ぶ。

地面すれすれを浮く。

「へえ〜？空も飛べるんだな。」

まあな。俺は人であつて人でない、“人外”だからな。

「なあザックス、これを防げたら誉めてやるぜ？」

そろそろ俺も本格的に攻める。

俺の上には大量の剣だ。

「剣だけで終わりじゃねえぜ？」

そして右手の剣をザックスに向ける。

それと同時に剣はザックスに向けて放った。だが、俺は剣で終わりじゃないといったぜ？

今度は大量の弾幕だ。ザックスよ、俺は弾幕勝負開催つつたんだぜ？弾幕も使わなくちゃいけねえよな？

「俺は…レイトを…越える!!」

ザックスは防御魔法とかじゃなく、純粹に剣ですべてを弾いている。へえ？強い、な。

ドクン!!!!!!

ん？なんだこれは？急に力がわいて…!？

「はあああああ!!」

目の前にザックスがいた。なんだこれは…？

ザックスが剣を振る。後ろに回避するが、剣が少し俺の腕をかすめ、傷をつけた。

…これは？一気に力が…！！

戦いたい…もつと戦いたい…この感情が一気に込み上げてくる。

遊びたい…あいつでもつと遊んでみたい。

…はは、感情が…ひひ…

そして俺の奥底に眠っていた様な懐かしい“何か”が目覚める。

頭のなかでは戦う事にしかないようだな。

「…ザックス。なあ…

簡単には壊れるなよ？」

くザックスsideく

な、なんだあれは？

さっきまでは俺が押してた筈。筈だったんだ…

この声で全てが変わった。負ける…ではなく、“消される”。

恐い…けれどこれはこれで楽しいと思える気がした。あいつの中に眠る、“闇より強い力”を目覚めさせる事が出来たんだって。

レイトは、大剣を放り投げた。空中に浮き、嬉しそうな、なんかよくわからん笑みを浮かべてる。

「はは…なんだろう…この力…懐かしい…ザックス！本気でやらな」と壊れるぜ？」

レイトが俺に向かって話す。俺はこの言葉を“警告”じゃなくて“注意”と受け取った。理由？警告にすると可哀想じゃねえか。俺自身も、テラともう一人のライバルが増えたとは思ってねえしな！

観客も盛り上がってきた。観客達、恐いもの知らずだな。

「まずはこれからだぜ？さあさあ、止めてみな。禁弾『漆黒の幻想』！」

なにかの呪文みたいなのを唱えたと同時に小さいが、数えきれない程多く、そして速い黒い弾が飛んでくる。

しかもレイトの放った黒い弾は全方向だから客に当たると思いきや、魔法みたいなので壁みたいなのがつくられていたから大丈夫だろう。

まずはこれだな。

俺も剣で弾くが、数が多すぎる。

高くジャンプして、一気に着地。剣に魔力をこめて放つ。俺の回りの黒い弾はなくなった。

さて、どこまでもつかない俺。

（零斗 side）

なんだこれ？俺の使った事の無い技が出てきた。いや、正確には忘れていた技かな？身体が自然に動く。なんだろう、楽しい。戦う事が凄く楽しい。

全方向の弾幕を放つ。小さく、そして速く、そして数多くの弾幕だ。ザックスはジャンプして剣を地面に刺した。するとザックスから波動みたいなものが出てきて弾幕を防いだ。

楽しい…

「ははは！！楽しいぞザックス！！もっとやろうぜ！遊ぼうぜ！禁魔『辺りはとても暗くなる』！」

そして観客へまでは被害はいつてないが会場だけは真っ暗になり、なにも見えない闇と化した。観客はザワザワと騒ぎはじめた。

そして辺りは暗い。暗いのにザックスの居場所が正確にわかる…不思議だ。見えないのに見えている。そんな不思議な感覚だ。

そして俺は弾幕をザックスに囲む様に放つ。

するとザックスは剣を上には振り上げた。

上からなにか降ってくる…隕石？しかも超小型。

隕石を俺は魔力でない何かをまとい、素手で隕石を弾く。

辺りは明るくなる。

…楽しい

「ふははははっ！！ザックス！凄いで！本当に凄い！まだまだい
ぜ！禁剣『降り注ぐ漆黒の剣』！」

片手を振り上げ、数多くの漆黒の巨剣を創る。

流石にザックスはこればかりは不味いのか、避けるのに集中してい
る。

「逃げてばかりじゃテラとの戦いも無理だぜ？ザックス！禁忌『レ
ーヴァテイン』！！」

今度は俺の切り札、漆黒の剣、レーヴァテインが両手に出現。しか
も両手。さらに炎の大剣と化していた状態。

やめろ…やめろ…止まれ！俺の身体！！

レーヴァテインをザックスに投げる。もうザックスは避けるしかで
きない様だ。ザックスも焦っている。が、なぜか笑みも見えた。

するとザックスは消えた。

いや、移動した。

そして俺の後ろに現れた。

すぐさまレーヴァテインを創る。右手に持ち、ザックスと剣を交える。ザックスは残像を残す程素早く、重い攻撃を放つ。が、俺もそれと剣を普通に交えている。

やばい…やばい…やめろ…俺…

直感が告げている。このままではザックスを“消してしまう”と。

やめろ…！！

頭ではそう訴えている。が、身体が…言うときかない。

ザックスは俺に蹴っ飛ばされて地面に落ちる。

どうやら戦闘不能らしい。倒れて動かない。

「終焉『破壊を……』」

！？

元の俺に戻った。

いったいなんだったんだ？俺の…元々の力…なのか？あれでもわかる。俺はあの状態で1割も力を出していなかった。

前の俺、そんなに危険だったのか？

そして勝者は俺となった。

戦闘が終わり、地面に着地したと同時に一気に力が抜けた。

そして地面に倒れ、意識が途絶えた。

ん？なんだここは？

辺りは暗く、そして今現在その何も見えない暗闇の中で浮いていた。

——零斗よ、聞こえるか？——

すると誰かの声が脳裏に響く。間違いない。俺をキングダムハーツの世界におとした本人だな。

「お前、今度はなんの用だ？」

何もない空間で話す。俺の話した言葉が空間全部に広がった様に響いた。

——先程の力だ。あと力が発揮されない理由が分かった。——

それは有り難い事だ。

「で？結局あれはなんなんだ？あの恐ろしい力は？」

俺が神に問う。

——お前はあの力を知っていた。そうだろう？——

！？

確かにその通りだ。あの不思議な感覚…懐かしい様な…ということ
は…

「あれは元々の俺の力か？」

——頭の回転が早いな。正解だ。更に言うと、お前は力を失っていた
のではない。眠らされていただけだ。——

眠らされていた、か。

という事は、俺はこの世界では危険故、力を封印されていた。が、
俺の元々の力が強力すぎて封印しきれなかった、と。

力はこれで問題解決だ。あと二つだな。

「なあ、お前はさっきの戦いを見ていたなら分かる筈だ。俺の知らない
技があったんだが、それを普通に使っていた。それはどうい
う事だ？」

そう、あの分からん技。俺は知らない“筈”の技を出せていた。

——あれもお前が元々使っていた技だ。この世界に来る時、力を封印しきれなかった。私が調べた結果は力が封印しきれなかった。仕方ないから記憶の方をも封印してしまえばいいのではないかと、それで記憶も共に封印された。だが、記憶はもはや封印は解かれ、今現在その技を使える筈だ。威力はないが、それらしきものは使える。

…理解したという事にしておこう。結果を言うと、今現在はその使っていた技の記憶のみが戻っている。それだけで充分かな。それとお前、一人称が私なんだな。声が聞き取れないし、あいつは男か女かわからんな。さて、それはどうでもいい。最後にひとつ。あの謎の力だな。

「なあ、あと一つ疑問があったんだが、あの力はなんなんだ？ 魔力ではない何かで攻撃を防いだあの力は？」

——ふむ、それは単にお前が忘れていただけだ。お前は魔力を中心として使うが、あともう一つ、氣というのも使える。——

氣…あ、思い出した！ そうだ、ただ単に弾幕や剣に頼り過ぎていて忘れてた。

では説明しよう。氣というのは、簡単に説明すると“生命力”の事だ。

その氣というのは皆全て持っているが、武器として扱うのは非常に難しい故、使う人は数える程にしかない。

身体を硬くして相手の攻撃を防いだり、身体強化もできる。更に放つ事や、相手の病気や怪我也直す事も可能だ。だが、武器として使うのは結構。だが、忘れてはいけけないのは氣は“生命力”という事だ。故に、そこらへんでバンバン放出したりしていると普通に死ぬ。更に治療の時は身体強化の倍は氣を使う。強力だが、ペナルティーがでかい。だから俺は氣の扱い方をしつていても、疲れやすいし、魔力の方が効率がいいからそっちを使つていた。まあ、当時は不死だったから使い放題だったが、疲れやすいから使わなかった。

あ、そういえば不死も戻つたのかね？

——ああ、いい忘れていたが、不死にはもう戻れないぞ。理由はわからん。不老だけ消されなかったのだから良いではないか。——

……はあ、不死には“何故か”もう戻れないそうです。

——まったく、お前と話すと疲れる。お前の場合、読心術が使えぬからな。——

うつせえよ。だったら俺より強くなりやがれ。

「つてか、お前男？女？どっちだ？」

——私か？私は両性だ。——

……つまり、男でもあつて女でもあると。……ニューハーフ？いや、違うか。一瞬マジで気持ち悪い方を想像してしまった。

「ニューハーフじゃないよな？」

——あんな気持ち悪い奴等の仲間なわけではない。——

だよな。んじゃ、戻るか。

魔力を込め、この神の俺への干渉を拒絶させる。さて、そろそろ目がさめるだろう。

辺りは一気に光につつまれた。

「…………ト……………！……………レ……………ト……………レイ……………レイト……………！……………」

ん？ここは…？

「よかった…気がついたようね。」

あれ？アクア？何故会場にいるんだ？

「あ、アクア、そういえばザックスは？」

「ザックスは今気絶中。本当、驚いたわ。途中で私のレイトがレイ

トじゃなくなつてた時があつたし…立てる？」

アクアが手を貸してくれる。ん？さて？“私のレイト”って言つてなかつたか？

「なあ、私のレイトってどゆ意味？」

「……………！／／／」

俺が質問すると、アクアは顔をこれでもかかっていう程真っ赤にさせた。

「べ、別になんでもない／／／…鈍感。」

へ？最後辺り聞こえなかったが、まあいいか。

そしてアクアの手を借りて会場を後にした。ザックスはどうしたか？そつえば、放置されてたな。うゝん…助けに行くか。

＼ザックスside＼

はあゝ、やっぱり勝てなかった。ってか、レイト強すぎだろ、あれ。もはや英雄の力越してるぞ！あれ！！

しかし最後のは痛かつたなあ。うう、まだ動けない。実はレイトとアクアが会話してる時、既に目が覚めてただけだな、レイトは鈍感だねえゝ。

え、ちょ、そういえばレイトが立ち去ってから誰も助けてくれないんだけどー！ちょ！だれか！だれか！！助けてくれ！レイトのキックくらって立てないし叫べないんだよ！助けてー！！

「ザックス、大丈夫か？」

レ、レイト！た、助かった…。

「い、いや…平気…じゃねえ…よ…キツいな、レイトの蹴りは…。」

レイトに肩を借り、会場を去った。うん、レイトの応援でもしてやるか。

くハデス side

な、なんだあれは…？

あいつ…闇の力必要ねえんじゃねえのか？

俺様が闇の力の扱いを教えてやるうってのにこけにしゃがって…！

ま、まあいい。決勝戦で叩き潰してやればいいんだ。それであいつを俺様の部下に…。

く神 side

初めての視点だ。私はこの物語の主人公をこの世界に送った神だ。
ひれ伏せ愚民ども。

さて、ふざけはここまでにしよう。

実は私の出番は零斗、奴のあの力が戻った状態の事をなんと呼ぼうか。それを決めるためだけにこうして私自ら出てやったのだ。

さて…どうするか…。

ふむ、あの状態をExtra零斗と名付ける。

さて、私の出番は終わった。私は帰るぞ。仕事をしなければならぬからな。

なに？仕事とはなにか？それは私の可愛…ゴホン！奴隷のイフリートに餌をあげることだ。けっして犬ではないぞ！けっして犬を飼っているわけではないのだから！！私は男だ！女でもあるが男だ！動物に興味をもつ筈などない！

なんだその目は！お前はそんなキャラだったのかと悟った目で見るのはやめろ！！やめ——

主人公追加設定

名前：Extra零斗

零斗が危険と感じたり、怒りなどの感情が爆発した時にこの状態になる。元々の力がほぼ戻っている状態。

技

禁弾『漆黒の幻想』

弾幕を小さく、周囲に速い弾幕を放つ。全方向に放たれる故、避けるのが困難。当てる事を前提に考えた技。威力はそれほど高くない。相手を試したりする時に使う。

禁魔『辺りはとても暗くなる』

普通に言くとキングダムハーツの魔法『ブラックアウト』とほぼ同じ。だがこちらは空間を暗くする。その暗闇から相手を斬りつけたら弾幕を放ったりする。

禁弾『禁じられた闘争』

まだこの技は出ていない。威力を中心として放つ弾幕。巨大で強力な弾幕を周囲に放つ。だが、量が少ない故、避けられやすい。

禁剣『降り注ぐ漆黒の剣』

漆黒のこれでもかとでかい巨剣を降らす。能力を活用した技。量、威力ともに高く、上から降り注ぐ故回避が結構難しい。

終焉『破壊を楽しむ者』

威力、量ともに強力で弾幕と能力を互いにフル活用する。巨大な剣、弾幕をもの凄い速さで周囲に放つ。更に本人からの直接攻撃もする、いわゆる「あ、無理だわこれ」ってやつ。

能力説明：氣

“生命力”の事。故に木、草などの生物全て氣を持っている。だれでも使えるが、扱い方が難しいため、扱える者は数える程しかない。身体を硬くさせ相手の攻撃を防ぐ硬化、身体強化や治癒と、操ればとても便利な武器になる。が、“生命力”故に氣を多く使いすぎると死んでしまう。氣のため方は簡単。睡眠、食事の二つで出来るが、増やす事は出来ない。

「たったそれだけでいいのか？」（前書き）

いろいろとやばい。自分でもなにがなんだか…とりあえず、オリンピックは最後になります。やっと次の世界へGOですよ。次話で。

はあ、人気上がらん。やっぱり駄文ですからかねえ？才能が無いの
でしょうか…だが！こんな程度ではくたばらん！！すみません、強
がりました。サブタイトルと内容が全然関係ないような…

「たったそれだけでいいのか？」

俺こと岸帛零斗、大会に順調に勝ち進んでいき、そして今大会最後の戦いへと足を踏み入れた。そしてそのこの世界での最後の相手が…

冥界の王“ハデス”

あれ？ハデスって、なんか重要な事を頼んでいた様な…忘れた。チケツト貰った程度…だったよな？

さてと。ってか、遅くね？今会場にいるんだよ。それでさ、待つてるのはいいんだ。だけど、待てば待つ程寒くなるんだよな。ま、俺は春夏秋冬この服で過ごすから腰に巻いてある黒いジャンバーを着て寒さをしのげる。が、観客の方が…。アクアとザックスもその中にいたんだが、二人共寒そうだな。

とその時、ひとつの氷の結晶が俺目掛けて飛んできた。

ビリッ！！

……………。

今物凄く嫌な音が聞こえたんすつけど。

ジャンバーを見てみると……………

「……………は？」

破けていた。

……………。

決めた。死刑確定。おい、氷投げた奴。顔見せやがれ。

ジャンバーを投げ捨てる。滅茶苦茶激怒中。

（ザックス side）

今レイトの試合を見ようと観客席にいるんだが…これが長い。寒いし…レイトはジャンバー羽織って…レイトから物凄い怒気が感じられる。ああ、ジャンバーが破かれちまったのか。氷の結晶があるし。

その時、なにかがよじ登る様な音がした。一つ…二つ…いや四つ。

そして会場に現れたのがでかい氷の塊みたいな…というか、よく入ったな。試合会場に。っと、それどころじゃない。これじゃあれイトが不利じゃないか！

すると今度はハデスが現れた。

「一対一とは言っていないからな。」

これは卑怯…その言葉しかない。

周りの観客も文句をハデスにつける。

卑怯だぞ！

最低ね！

ぶるるるああああああ！！！！

ぬつつふうふうん！！

…観客席に居てはならない物体がいたが、それはおいといて。

俺が立ち上がろうとした時、アクアが既に立ち上がっていた。

「卑怯です！！それは反則ではないのですか！？」

俺が言おうとしていた台詞をアクアが言う。

「…へえ？それもルールなのかい？」

レイトが苛ついた口調でハデスに問う。

「ルールその2…助っ人もありだ。何ならお前も助けを呼ぶか？」

ハデスはレイトを挑発した口調で答える。だったら、とるべき行動は一つ！

「「だつたら俺（私）が！！」」

俺とアクアが同時に駆け出す。が、レイトに剣で止められた。

「来なくて結構…今俺は…スツゲエ腹立ってんだよなあ！！」

ジャンバーか…どれだけ大切だったんだよ。

「二人とも…席に戻ってくれ。」

レイトが俺とアクアを席に戻るよう言う。渋々席に戻る。

だが、レイトの口から信じられない言葉が出た。

「助っ人お？呼んじやったら、お前これで負けたら恥で死んじまうぜ？」

なんと余裕と言わんばかりの口調。

「負ける？いくらお前でもこれだけの数をもつてすれば「何言ってるんだ？」ん？」

ハデスの言葉に対しレイトはまるで寝言は寝て言えと言わんばかりの余裕な表情。そして次には信じられない言葉が出た。

（零斗side）

あああ！！ム力つく！ハデスの野郎をぶっ飛ばしてえな！

「仕方ない…お前がそれほど死にたいっていうから俺様が大サービスに…更に助っ人を呼ぼう。」

ハデスがその言葉を言い終えたらなんと、会場の向こう側にも30はいる氷の巨人がいた。

「あいつらには町を襲うように指示を出した。早く俺様を倒さなくちゃ町が氷だらけになっちまうぞ？」

外道が！！いや、外道か？これ？外郎でいいんじゃないね？

観客がザワザワと騒ぎ始める。

私達の町はどうなっちゃうの！？

ハデス！卑怯者！

ぶるるるあああああああ！！

ぬっつふうううん！！

さっきから気になっていた…んだが、気にしない気にしない。

「おいハデスさんよ？」

「あん？」

ハデスの口調がなんか変異したが…まあいい。

俺が言いたいのはこれほどの数じゃねえ。

「たったそれだけでいいのか？」

観客がまたザワザワと騒ぎだす。

「レイト…！何言ってるの…？いくらレイトでもこの数じゃあ…！」

アクアが自分も参戦すると必死に抗議。

「お前…もう一度言ってみろ!!」

ハデスが激怒する。

「ああ、言つてやるよ。たったそれだけで良いのか？」

ハデスの怒りがもう限界を越しているのだろう。

「許さねえ…俺様を…お前は絶対…!!」

ハデスの台詞が長いんで先に戦闘体制をとる。

「いくぜ？ハデスさん…禁魔『辺りはとても暗くなる』。」

技を発動。辺りが漆黒に包まれる。

「禁忌『レーヴァテイン』。…溶けやがれ、氷の集団。」

レーヴァテインを炎の大剣の状態、しかも二本で四体の氷の塊野郎を斬る。

氷な故に一瞬にして溶ける。そして技の効果を切らした。

「さあ、次はお前だぜ？」

ハデスは酷く混乱していた。まさかあんな簡単に倒されるとは思っていなかったのだろう。

「くー！やはり本物のタイタン」うつせんだよ…観客まで被害を加えたんだ。お前、覚悟はできてるよな？」…ちくしょおおお！

ハデスが更に混乱。辺り構わず炎の玉を撃ってくる。

「弾幕つてのはな…こうして撃つんだよ！！禁弾『禁じられた闘争』」

巨大な弾幕を周囲に撃つ。それは炎の玉を打ち消し、ハデスへと向かう。

「や、やめろ！あぐあ……………」

悲鳴の声すら聞こえない。弾幕の音がでか過ぎるのだろうな。ハデスは気絶中。冥界の王だけあって体力はあるね。さて、町に飛んで行くか。

町へと飛んで移動を開始した。

くアクア side

私は焦りを感じていた。

先程圧倒する戦いを見せても体力の限界もある。あれだけ強力な技を見せても疲れは生じる。あんな大きい奴を相手したらやられる！

私は会場を飛び出そうとしたが…

「待てアクア！！行ってもレイトの迷惑になるだけだ！！」

ザックスが止める。

ではなに？私は指をくわえてレイトが一人頑張つて戦っている所を…見ているというの！？

「離してください！！レイトを見殺しにする気ですか！？貴方には分からないでしょう！私は…レイトの親友なのです！！親友を失う怖さ、辛さが！！！！」

「俺だつて行きたい！！だけど、俺達が行ったら確実に足手まといになる。ここは堪えろ！！」

！！

ぐ！！

私の力不足が憎い…！！言われてみればその通り。

やはりここは堪えるしかない…レイト…死なないで…。

！？

なにかが…おかしい…観客達が…！！

（零斗side）

ハデスの野郎、最低な野郎だったな。

あの氷の集団が通るであろう町の入り口を先回りして仁王立ちして待つ。お？きたきた…。

レーヴァティンを構える。

「ここを通りたければ、俺を倒してみせろ！雑魚！！禁忌『レーヴァティン』の力…不完全だがお前らごとき不完全で充分だ！うけてみる！レーヴァティンの力を！！」

レーヴァティンを横に大きく振るう。炎が氷の…もう面倒だ！氷達を襲う。

「はああああ！！」

自ら突っ込み、炎の中さらにレーヴァティンを振るう。一発一発力強く攻撃してる故、疲れが凄くたまる。だが、負けるわけにはいかない！！

「うりゃああああ！！」

1 0…9…8…7…

「はあ、はあ、まだまだ！！」

6…5…4…3…2…

「これで最後だ！！」

ラストに全力をこめてレーヴァテインを振り下ろす。氷は溶け、蒸発した。

右膝をつく。流石につかれた。

地面に倒れる。そう思った瞬間…

ワアアアアア！！

観客達が歓声をあげて俺に駆けってくる…駆けってくる！？え？ちよ…嬉しいんだけどさ、この人数でこられるとあれだぜ？死ぬぜ？

新しい英雄の誕生だああああ！！

へ？俺が…英雄？マジで？

ってか、それどころちゃうー！いやマジでやばいってー！う、うわあああ
あああ――。

「はあ、はあ、な、なんとかもった。」

「ふふ…お疲れ様、レイト。」

今現在、大会優勝を果たし、さらに魔物？の大群を一人で追い払った英雄となった。

んで、今はアクアと俺で神殿？の隅に腰をかけてる。ってか、俺に二つ名が出来た。

“漆黒の剣支配者”

どうやら、剣を数多く出したからだそうだ。まあ俺の能力がそれだし、な。

「さて、そろそろ行くか。次の世界へ。」

俺が立ち上がり、アクアに手を差し出す。

「へ？／／／いや…うん／／／」

アクア、何故顔を赤くする？風邪か？

まあなんだかんで手を取り、立ち上がった。

そして異空の回路を開き、手を繋ぎながら入っていった。

あ、もちろんアクアは鎧つけてるよ？硬かったす。

ああ、それと嬉しいお知らせ！俺に新しい相棒が登場！それは…黒い、新しい黒いジャンバーさ！！破れない、そして汚れない。素晴らしい物を貰った。この世界は最高だったぜ。

ディープスペース：宇宙空間？（前書き）

今回は短いです！しかもかなり中途半端です！ごめんなさい！！

ディープスペース：宇宙空間？

「アクア！後方から護衛を頼む！」

「わかったわ！」

今、異空の回路にてあのクラゲみたいなアンヴァースに遭遇。数は……ざつと五千か。両手に剣を出現させ、アンヴァースの群れに突っ込む。

「うおらああああ！！！」

剣に氣をこめて振るう。氣を放ち、斬撃を飛ばす。それでも数は減っても50程度。今回はかなり多い。

「ぐっ！」

「レイト！！レイトになにするの！！はああ！！！」

乗り物状態になっているキープレードをアクアは弓の形みたいなのに変え、放つ。矢は多分魔力でつくっているのだろう。不覚にもアンヴァースの攻撃を受けてしまう。浅いが、アクアは俺の敵討ちみたい矢を放つ。俺は死んでないぞ。不老だけど。

「レイトー！！！」

後方からの攻撃も忘れたみたいでアクアもアンヴァースに突っ込むが、やはりアクアは遠距離型な故にアンヴァースに苦戦。

ん？アンヴァースが…退いていく…！！

左に巨大アンヴァースを発見。巨大クラゲみたいな、白く、泳ぎ方もクラゲ。いや、タコ？イカ？どっちでもいい！とにかく、やつを退治するか。

「アクア！先に行つててくれ！俺はあのアンヴァースを倒す！」

「ちよつ！レイト！！」

俺はあの巨大アンヴァースを追った。

＼アクアside＼

レイト…また何処かへ行つてしまった。はあ、次こそは一緒に行こうと思つたのに。

レイトは異空の回路で私みたいに鎧は一切身につけず、なのに闇に呑まれない。いったい、どんなに強い心を持っているのやら。そして、なんであんなに飛行が速いの？あれは…追いつけない。もう既に見えない。

はあ、仕方ない。私一人で行くか。

＼零斗side＼

…ちい！くつそ！マジかよ！今、あのでかいアンヴァースに囲まれ

ている。

1体、2体、3体……………200体。

「こんなの…ありかよ？」

いや、さっき5000を相手して今度はでかいの200だぜ？流石に疲れるぜ？

「倒せない事はない…が、疲れとストレスが…上等だ！離れやがれ！禁弾『漆黒の幻想』！」

小さく、早く、そして多い弾幕を放つ。威力は小さいが、的がでかい事が有り難い。次々と消えていくアンヴァース。

だがよ、いったいどんだけ俺は異空の回路を漂っているのだろうか。そして最後の1体は…逃げた。あいつは…消そう。

〈ヴェントウスside〉

久々だな…俺の出番！！

俺は今、異空の回路で次の世界を目指している。さて、次はこの世界か…ん？

目の前にアンヴァース…しかもでかい。巨大アンヴァース。

「アンヴァース……行くぞ！」

速度を上げ、アンヴァースを相手しようとしたが…

「おらああああ！！逃げんじゃねええ！！！！さっきの威勢はどうしたああああ！！！！あんだだけ俺に相手させやがってえええ！！！！」

…あのアンヴァース、レイトから逃げたのか？

「あ、ヴェン。あのゴミを追っぞ。」

「あ、ああ。」

「んじゃ、失礼して…」

「え？」

レイトが、俺の乗っているキープレードを掴んだ。なにする気だ？

「じゃあ、行くぞ！」

「うわああああ！！！！」

レイトに凄く速い速度で引つ張られた。いや、本当に速いよ！落ちる！乗り方が乗り方だから落ちる！落ちる！！

「うおおおらあああ！！！！待てやごらあああ！！！！」

…レイトに何があったのかは分からないけど、今のレイトだと…怖い。怖くて恐い。アンヴァース、同情するよ。

今日この日、俺は初めてアンヴァースに同情した日だった。

（零斗side）

あああああ！！うぜえ！逃げやがって！そして光が走った。すると……ここは……宇宙？へ？何故宇宙？この世界だと基本、異空の回路だよな？なのに宇宙？やべ！息が！呼吸が……出来る？何故？まあ、いいか。これぞ、ご都合主義ってやつか？

そして目の前に現れた巨大な……スペースシャトル？違うよね。とにかくでかい、これはこれは本当にでかい船が。

「あれに逃げ込む気か！」

あ、ヴェンのキーブレード、知らず知らずのうちに離してた。取り敢えず、おれは次の世界？へと向かった。

謎の生物（前書き）

626号登場です。

626号って…強くないですか？確か自分の3000倍の物を持ち上げる事が可能、暗闇でも物が見え、尖った爪で壁にものぼれる。チートじゃないですか？なのになんでデイズニーキャラのアイドル的存在になっちゃっているんですか？確かに可愛い系キャラですけど…能力って恐ろしく強いですよ？納得いかない…。

それと、読者の皆様。この小説の評価が100以上になりました！僕ごときでも…100とれた。足、机にぶつけた。いたかった。はい、嬉しいです！

そして本編にて《》の部分は普通、通じないのに言葉が通じているときを意味しています。つまり、今回は626号の台詞として受け取ってください。

謎の生物

ふむ…どないするか。

俺こと岸帛零斗は船に乗り込み、巨大アンヴァースを探索中。その途中、ふと気がついたことがあった。

技発動の時のあれ、あの最初に唱える禁忌とか。あれ、いらなくね？そう思った。

前世（キングダムハーツより前の世界じゃ分かりにくいため以降前世と呼ぶ）では超平和にすごし、ただ単に日常的な生活をしていただけだったんだが…そこではまず戦闘なんて滅多になかったため、技を軽く考える程度しかやらなかった。その禁忌とかは、俺の主がよくそう言っていたから俺も真似した。意味は俺でもよくわからないままだったし。

とにかく、技に関して名前変更しようかななんて考えているんだ。別に変えなくてもいいか。

あっさりと悩みを打ち消し、そして辺りを見回す。機械、機械、機械。技術発達しすぎだぜ。

「侵入者はお前らか、何者だ？」

後ろを振り向くと、超巨大な体をし、黒い服を着て、謎の黄色い銃を俺達に向けている。しかしその台詞、俺達が言いたいぜ？だって、お前肌が青だし、しかも顔の形も変だしな。

「それはこちらの台詞だ。名は零斗という。お前の名は？」

「侵入者に答える義務などない！」

さらに銃を向け、殺気を放つ。まあまあだな。力自慢みたいな奴だな、こいつ。

「名乗ったんだから名乗れよ、礼儀知らずが。それとも、礼儀も知らない愚かな奴が俺達を連れ去るなんてな。」

「うぬぬ…ガントウーだ。」

なんとご立派な名前だ。そしてガントウーはさらに今すぐ殺すぞみたいな殺気を放つ。

「お、俺はヴェントウス。追っていたモンスターがこの船に逃げ込んだんだ。」

動揺しながらもヴェンは自己紹介と目的を話す。勇者だぜ、お前。

「嘘を言うな。お前ら以外の侵入者は確認されとらん！」

こちらが親切に話してやってるのに…上等。

「俺達はモンスターを追っているんでね。退いてくれないか？嫌なのならば…力ずくで退いてもらうよ？」

体制を低くし、戦闘体制をとる。

今、俺はあのモンスターを倒したくてたまらないんだよな。そっこ

う終わらせる。

「ふん！お前のような小さいゴファー！！」

氣で身体能力を強化し、力を込めてガントウーの巨大な腹にパンチをくらわせた。一瞬にして気絶。弱い。

くヴェントウス side く

レイトがガントウーとかいう巨大な生き物を倒した。倒してよかったのか？これ。兵隊みたいだったよ？

「よし、行こうか。ヴェン。」

爽やかな笑顔で俺に振り向いてくる。怖い…。

レイトの後を追ひ、ドアの目の前まで行くと…

「クワァー！！」

…なんか青くて小さい、オレンジの服を着て、耳が大きく、目が大
きい、一見可愛い生物が落ちてきた。

「ヴェー——。テラ——。アク——ワ——。」

…ちゃんと話せていないが、確かにテラとアクアと言っていた。

「テラとアクアを知ってるのか！？」

つい興奮してしまい、謎の青い生物に話しかける。そして今度はこ

の生物は懷から何で作られたかは知らないが、星の形をした者を取り出した。

あれは…“繋がりのお守り”！？

「トモ——イズナ！」

「へえ？君もそのお守り持っているんだな。お揃いだな。」

するとレイトはこれでもかという程に優しい顔をして、謎の生物に話した。

「&*@§　○εδ！」

「はは。そうなんだ。」

…よくわからない言葉で話している謎の生物。けどレイトは普通に話している。…レイト、いったい何者なんだ？

（零斗side）

この謎の生物と話している。何故かわからんが、言葉が互に通じるらしい。

《これはテラと同じように作ったんだ。》

「はは。そうなんだ。」

俺も同じ形のお守り、“繋がりのお守り”をだして話している。そ

れをしまい、名前を聞く。

「俺は岸帛零斗。お前は？」

《…わからない。ただ、僕を作ってくれた人は626号って呼んでる。》

まで。こいつを作ったのって、本当に人か？絶対なさそうなんだけど。まあそこはあえて突っ込まない。けど626号か。よし、んじやこうするか。

「なあ、俺が新しい名前を考えてあげるよ。…そうだなあ………ステイッチなんてどうだ？」

何故ステイッチって名前にしたかって？なんとなくだ。

そして626号の返答を待つ。

《ステイッチ…うん！ステイッチ！！ステイッチはこれからステイッチって名前にする！！》

うわお。ステイッチの一人称がステイッチに変わった。

《僕はステイッチ！改めて宜しく、レイト！》

そして僕に戻った。面白い奴だな。

「レ、レイト？さっきから何話してるの？ていつか、どうやってこの子の言葉を聞きとってるの？」

ヴェンが疑問を投げ掛けてきた。そんな事言われても…

「俺にもわからん。」

それしか答えられない。その時だ。

―モンスターが船に侵入！このままだと危険です！船が破壊されま
す！

放送がながれた。ご苦勞様。

「んじゃ、行くかヴェン。」

「おう！」

ヴェンはキーブレードを何故か出現させて、気合いがこもった返答
をしてきた。

《僕も行くよ！！》

ステイツチが言う。確かにこいつは強い。今の俺（力無解放状態）
では敵わないかもしれない。心強い。が、

「危ないから来ちゃ駄目だ！ここで待ってるんだ！行くよ！レイト
！」

「おわあ！？」

ヴェンが俺を引っ張ってアンヴァースの所へ駆け出した。

《…………。》

ステッチは悲しそうに見ている。が、どうやら待つ気はさらさら無いようだ。うん、ならいいだろう。

俺とヴェンはアンヴァースの所へと駆けた。

怒りのステイッチ（前書き）

ごめんなさい。文が駄文になってしまった…ネタがないので…ね。
いや、あるんですけど、展開がどうしようかと…ごめんなさい。

怒りのステイッチ

「消えろ!!」

目の前に現れたアンヴァースに一閃。

「レイト、落ち着けよ。」

キープレードを逆手に持ち、呆れたようにヴェンが小走りして来る。

「いいじゃんか。別に。」

「良くないよ!!レイトが暴れたら絶対この船壊れるって!!」

俺こと零斗はあのアンヴァースを追っている。

あのゴミを消したくて消したくて。はあ、ここらでそろそろ出てきてくれ「レイト!いたぞ!」た。

「もう逃がさないぜ?」

アンヴァースがこちらを振り向いてきた。どうやら逃げるのは諦めたのか、逃げるのをやめた。

「ヴェン。やるぞ。こいつ、強くなってやがる。」

中央に柱のようなものは多分燃料みたいなものだろう。それを吸収し、少しは強くなっただろう。

「ああ。レイト!」

一気に駆け出そうとしたときだ。

《うわああああ！！》

物凄い爆発音とともに青いなにかが落ちてきた。スティッチだった。

「お前！何で来たんだよ！」

ヴェンがスティッチに問う。なんかスティッチの様子がおかしい。

《コワス！！コワシテヤル！！！！スベテヲコワシテヤル！！キエロ！！キエテシマエ！！！！》

破壊にとりつかれたように。

その破壊本能のようなものを持っているのだろう。スティッチの荒れ狂う感情が俺の主と重なる。

《アソボウヨ！サアボクトアソボウヨ！！》

止めてやりたい。だがアンヴァースが先か。

「いくぞ。」

剣を構え、アンヴァースに斬り込む。

アンヴァースは回転し、攻撃を振り払おうとするが、むしろ逆効果。俺の力と剣の硬度、切れ味が勝り、むしろアンヴァースを斬り裂いていく。

《アハハハハハ！！》

スティッチは銃を撃つ。銃は液体のようなものを飛ばし、アンヴァースを溶かす。

「これで終わりだ！！」

最後はヴェン。キーブレードを投げる。炎をまとうキーブレードを投げ、アンヴァースを消滅させる。

今回の敵、あっけなかったな。だが…

《アハハハハハ！！モウオシマイ？ジャアシカタナイカラソコラヘンヲハカイシヨウ！》

スティッチをとめるか。

スティッチに歩み寄り、理由を聞く。

「…スティッチ。どうしたんだいったい？」

その言葉、その言葉を極限まで優しく、本当に自分がこれまでにないだろっくらいの優しさで話しかける。

《…キズナ…ウワアアアア！！》

…絆？もしかして、“繋がりのお守り”か？

するといきなりスティッチが殴ってきた。

「ぐ…スティッチ、落ち着け。」

今の俺では勝てない。元の力解放状態なら勝てるが、力がありすぎる。

《アハハハ…ハ…は…え？レイ…ト？》

どうやら戻ったみたいだ。

《え…レイト…殴ったの…僕…なの？》

悲しそうに話す。だろうな。まあ自分は無自覚なんだろうからな。

「ああ。気にするな。それでどうしたんだ？絆がなんちゃらかんちやらつてのはなんだ？」

《………。》

無言でボロボロになったスティッチが作った“繋がりのお守り”だ。

「……なあ、“繋がりのお守り”があるから俺達は友達なのか？」

「レイト…。」

《……。》

無言。絆というものを教えてやるか。

「君は俺の事をどう思ってる？」

《……友達。》

あの時も…アクアにこれを買ったのもあくまで絆が出来た後。おまけのようなもの。

「テラの言っていた事を思い出すんだ。多分テラの事だから、“絆は心で感じるんだ”みたいな事を言ってただろ？」

《でも…。》

はあ。じゃあこうするか。

「じゃあさ、俺達は友達やめるか。」

「れ、レイト!!」

ヴェンが怒りながら俺に言う。

《そう…だよ。僕みたいなのは…「友達はやめた。けど親友まではやめてないぜ?」…え?》

友達…友達より、切っても切れない。本当に大切な、悩みをぶつけ合い、本当に信頼できる仲間。

《親友…?》

「そう。親友だ。友達みたいなじゃなくて、本当に心を許せる者俺とお前は…親友だぜ?そんな“おまけ”で絆は切れないぜ?」

《……うん！僕とレイトは親友だ！！》

「ああ！親友だ！」

スティッチの悩みはふっきれたみたいだ。

「あのさ……なんか解決したみたいだけど……俺にはどんな会話かわからないから……感動できないんだよなあ。」

一人、KYがいた。それ以外は問題なし。

——試作品626号脱走！——

やば！！

「ヴェン！スティッチ！ここを抜け出すぞ！」

《うん！》

「ああ！」

そしてヴェンは鎧をまとい、キープレードに乗る。スティッチはそこらの警備隊の船を盗み、俺はそのまま飛ぶ。

「ちい！！しつこいんだよ！！」

剣を投げ、追ってくる警備隊みたいな船を破壊する。が、数が多い。しかもあの溶ける銃弾をうってくる。

「レイト！頼む！」

「ああ！お前ら！弾幕ってのはな、こつやって撃つんだよ！禁弾『漆黒の幻想』——！」

数多く、速い弾幕を撃つ。破壊が、やはり数が異常。しかも強敵とわかったのか、さらに船が追ってくる。数が一万を超えるであろう赤い警備隊の船がきた。

「ちい——！禁魔『辺りはとても暗くなる』増絶『重なりし絶望』！」
辺りを暗くし、剣を投げつけた。

「ヴェン！しっかり乗ってる！スティッチ！操作は俺がするからへんなのいじるなよ！」

「へ？うわああああ——！」

《あ、あれ！？船が勝手に動いてる！》

ヴェンのキープレード、スティッチの船を掴み、移動を開始。

暫く進み、なんとかふりきったようだ。が……俺は思ってもいなかった。これから、物凄くいたい思いすること。

——ハイパードライブ、開始——

「……え？グハッ！！スティッチ！なにやったあああああ——！」

《ヴェエエェン！レイトオオオオオ——》。

「おんどれスティッチ！覚えてるおおお……」

スティッチがなにかをいじったせいで、俺はスティッチの船に飛ばされた。

俺、どうしよう。目茶苦茶痛い。

（ヴェントウス side）

…俺、どうなるの？

一人、この空間に残された俺。レイトがこれからどうなるのみたいなことを思ってるみたいだけど俺の方がどうなるの？

…え？俺の出番、これで終わり？え！？まさかオチを担当するために！？

え！？もうちょっと話させてくれ――

ネバーランド・ピーター・パン（前書き）

うーん…今回は少し無理矢理感があるような…では、どうぞ。今回は新しい世界です。

ネバーランド：ピーター・パン

ちい、まいったまいった。

俺こと岸帛零斗は、あのスティッチの乗っていた船の何かに巻き込まれてへんなところに飛ばされた。かなりヴェンと距離が離された。

今現在、とりあえずきとうに異空の回路をさまよっている。ん？
次の世界か？

さて、次はどんな世界かね？そういえば…俺、エラクウスに何を言われて世界をまわっているんだっけか？…忘れた。まあ、この世界を見物したらいったん旅立ちの地に戻るかな。

こうして、俺は次の世界へと向かった。

（ヴェントウス side）

レイトがどっか飛んでいってしまってた着いたのがこの世界。そこで俺は、二人の子供に出会った。俺は子供じゃないからな！

その二人の子供は、熊の着ぐるみを着ているのと、狐の着ぐるみを着ている。二人から話を聞くと、二人は流れ星がこの世界で落ちたらしい。それで二人はその流れ星を探している。俺もそれに同行させてもらってる。

暫く進むと、木そのもので出来た家…というより秘密基地みたいな

ものがあつた。

すると今度は上から何かの鳴き声が聞こえた。

「ピーター・パン！」

子供二人は鳴き声が聞こえたところに話す。

すると上から葉で出来たのかな？緑の服、オレンジの髪、そして腰には小さなナイフを着けている俺と同じ年みたいなピーター・パンと呼ばれた人が来た。

飛びながら。

「誰だこいつらは？見ない顔だな。」

ん？こいつ“ら”？俺の他に誰かいるのか？

「俺、ヴェントウス。ヴェンって呼んでくれ。」

「ふ〜ん…そして君は？」

俺の横の何かに話す。

「俺は岸帛零斗だ。零斗と呼んでくれ。」

隣にはレイトが…レイト！？

（零斗side）

ふう。出てきた場所が森のなか。

森を出ようと歩いていたらヴェンを発見し、こっそりとヴェンの隣に立つ。

オレンジ髪の少年、さっき子供がピーター・パンとか言ってたな。そいつが奇妙な鳴き声を出して降りてきた。

「俺、ヴェントウス。ヴェンって呼んでくれ。」

ふうん。俺と同じ、空を飛ぶ力がこいつにはあるのかな？

そしてピーター・パンとやらが次は俺の名前を聞いてきた。

「俺は岸帛零斗。零斗と呼んでくれ。」

「レイト？不思議な名前だなあ。」

「レイト！？」

ピーター・パンとやらは俺の名前に不思議がり、ヴェンは驚いている。

「あれ？二人は知り合いかい？」

「ああ。というかレイト！なんでどっか行っちゃうんだよ！」

ピーター・パンの問いにヴェンが答える。答えた後、俺に激怒？してきた。無視無視。

「気をつけ！」

ピーター・パンは子供達の前に立ち、部隊の隊長みたいに言う。

「お前達、海賊のお宝は欲しくないか？」

「海賊のお宝！？」

「欲しい！」

海賊のお宝か。ピーター・パンは宝石探してもするのか、子供二人に問う。子供二人は興味を示したり、欲しいと欲をそのまま出したりと反応だった。

「フック船長がお宝を隠しているところを見たんだ。それを横取りしてやるうじゃないか！」

どうやらこの少年は結構大胆な事を考えているらしい。海賊本隊を襲撃するつもりだろう。それにしても海賊も海賊だ。何故船に運ばないのだろうか。隠してあるお宝をまた隠してどうするのか。意味不明だな。

「面白そう！」

「行こう、行こう」

駄目だ。こいつら、頭の中が好奇心しかないのか？海賊と戦う事になり、命の危険があるのにも関わらず、子供は遊び感覚みたいな感じで着いていこうとしている。

「いてっ！」

「いてっ！」

そこで小さい、それは手のひらサイズの小さな小さな羽をはやした女の子が子供二人を蹴った。

「ティンク、どうしたんだよ？」

ティンクと呼ばれた小さな……よく見たら妖精か。こんな小さな妖精は初めて見た。とにかく、小さな妖精がピーター・パンを止める。何かを訴えているが、この距離からじゃ聞こえない。

「みんなで流れ星を探しに行く途中だったんだ。」

ヴェンが説明をする。

「海賊のお宝の方がずっと楽しいよ。」

もう我慢の限界だ。ピーター・パン、死ぬつもりか？

「なあ、ピーター・パンでいいか？そして危ないぞ？相手は海賊だぞ？それ相手に君は多勢に無勢で突っ込み、更に遊び半分、いや遊びで海賊と殺り合う気か？死ぬぞ？」

真剣に俺は話す。そうだろ？海賊って、三人しかいないのにそれを海賊だから多勢に突っ込みに行くって普通は自殺行為だぞ？あ、俺は平気だ。まず船ごとアボーン出来るから。

「え？あ、そうか。君たちはフック船長を知らないのか。フック船長相手なら遊びで充分さ。」

…読めた。こいつ、一回ばかしじゃない。何回も何回もそいつにお世話になっているんだな。襲われれば返り討ちに行っているんだろうな。

「わかった。俺からは何も言わない。さて、その…ティンクとか言うやつ、君はどうするんだ？」

そしてティンクとやらが寄ってくる。

《私？私は流れ星を探しに行くわ。あと、ティンクじゃなくてティンカー・ベルよ。》

「分かった。んじゃティンカー・ベル、宜しくな。」

につこりと微笑む。第一印象超大切。何故毎回こうするかというと、そっちの方が優しい系に見えるしな。あと敵意もないことを俺なりに示している。あと、小さい子だとなおさらだ。

《…ノノよ、宜しくノノあと、私の事はティンクで良いわ。べ、別に貴方の事が気になるわけじゃないんだからね！ノノ》

…隠しツンデレか？ま、いいか。普通に接すればツンは発動しないだろう。

「……まさかティンクと話せるやつがいたなんて…。」

「レイト…やつぱりお前は規格外だな。」

ヴェンとピーター・パンはそれぞれの反応を示す。あとヴェン。規格外は承知の上だが、俺から言えばお前は弱すぎるんだよ。

「で、ティンクはどうするって?」

ピーター・パンが聞いてくる。

「ティンクはそのまま流れ星探索を続行させるらしいぞ。あ、俺は流れ星とやらに行く。海賊の宝つつつても、金貨に宝石だろ?」

「あ、俺もレイトと一緒に行く。」

ヴェンがついでの反応をする。

「そうか。なら仕方ないな。あ、それとピーター・パンじゃ呼びづらいならピーターでいいよ。じゃあ!」

「待つてよ!」

…ピーターグループはピーターを先頭にし、飛んでいった。

「さてと。ティンク、改めて宜しくな。」

《よ、宜しく…／／／》

こちらもティンクを先頭に出発した。

しかしなんだろうな。海賊のお宝の方が面白いイベントがおきそうな感じがしたんだが…流れ星も気になる。ただの流れ星ではなさそ

うらしいしな。

逃走自慢のフック（前書き）

今回は短い…と思います。すみません。では、ご覧ください。

逃走自慢のフック

《でねでね、その時…》

はあ。あ、どうも。零斗です。

ティンクことティンカー・ベルはよく喋る。さっきからずっと話し相手をしている。

《…ていう事があった…ちょっとレイト、聞してる？》

「あ、ああ。聞いてるよ。ティンク。しかし、流れ星っていったい何処に？」

《あ、そろそろ着くわよ。こちらへん。》

そこでティンクの話し相手（強制）をしていたらついた。その場所はテントらしきものがはられていたり、トータルらしきものもあった。

「うわ！お前、いきなりとまるな！」

ヴェンがいきなりとまる。なんなんだよ。

「…あれはミッキーの“星のカケラ”？」

そこでヴェンが示した物。それは確かに名前通り星の形をしている。が、かけてはいない。一見、オモチャみたいだが、ヴェンの台詞を聞く限りなにかある。

《あれなに！？ちよつと見てくるわね！》

「あ、こら！危ないぞティンク！」

後を追うように走る。だが…

「フフフフ…。」

ティンクは誰かに捕まった。右手にティンクは捕まれている。左手が失われている。もう一人はそいつについてきている感じた。身長が小さい身長で鼻がでかいおじさん。

「流れ星に思わぬおまけがついてきたぞ！」

ティンクを掴んでいるやつが言う。

「…お前がフックとやらか？さあ、ティンクを離せ。」

剣を出現させ、構える。同時にヴェンもキープレードを構える。

「そうだ。私がフックだ。お前達はピーター・パンに伝えておけ！ティンカー・ベルを返してほしければ、人魚の入り江まで来いと…。」

そこでフックの台詞は止まった。いや、とめた。

「…ティンクを離せと言っているのだが？」

剣を首につきつけているからだ。

「死にたいのか？さあ、死にたくなければ離せ……！！」

剣を首に突きつけていて、殺気を全開に放った刹那、フックは人間ではない程の速さでちっこいおじさんをつれて逃げた。

「待て！」

「逃がすか！」

上がヴェン、下が俺。後を追おうとするが、ここでアンヴァースが出現。

「「邪魔だ……！！」」

剣とキーブレードを構え、アンヴァースと戦闘に入った。

「ヴェントウス side」

ピーター・パンが言ってたフック船長って言う奴がティンカー・ベルを拐っていった。

後を追おうとしたけどアンヴァースに邪魔された。

けれどこれはある意味いい機会。あのレイトに強さを認めて貰えるかもしれない。

「妄想」

「どうだ！これが俺の力だ！どうだった？レイト？」

「……ヴェン、お前こんなに強かったんだな。これはマスターとしてやっていけるんじゃないか？」

「いや褒めすぎだよ。／＼流石に照れるよ。／＼」

「いやいや、お前は強いよ。今からエラクウスの所行って頼んでみるよ。マスター・ヴェントウス。」

「妄想終了」

えへへ、レイトに認めて貰えればマスターも認めて貰えるかもな」

「…なにやってんだ？お前。」

「零斗side」

ヴェンがなんかを妄想しているのか、ふぬけた顔をしている。まったく、これではマスターになれるかな？マスターたるもの、油断は禁物って教わっていないのか？戦いの基本だぞ？

「いくぞ！」

ヴェンがいきなり真面目な顔になる。まともに戦うのだろう。しかし表情の変化が激しい奴だな。

あの四本足の雑魚アンヴァースが6匹。余裕だな。

「邪魔だぞ？」

弾幕で瞬殺。1秒ともかからずに倒した。

「ちょ！レイト！俺にも戦わせろよ！」

ヴェンはそんなに好戦的だったか？キープレードを逆手に再び構えるヴェン。

今度はトータムボールのようなアンヴァースが3体。あとゴリラみたいなアンヴァースが3体だ。

「ヴェン、半分でやろう。ヴェンはどっち「こつちだ！」：いつから好戦的になった？」

ヴェンはゴリラみたいなアンヴァースのところに駆ける。まあ、いか。

トータムボールみたいなアンヴァース。三色で、赤、青、黄色となっている。

「……………！？」

アンヴァースは同時に炎、氷、雷の魔法を俺に目掛けて放たれた。即座に防御魔法『リフレク』で防ぐ。

「…成る程。ある意味ゴリラより強敵かもな。」

赤が炎、青が氷、黄色が雷と、色で魔法を分けているのだな。

「…んじゃ新技出すか。」

これは氷魔法の上級。たしかアクアがなんとなく話してくれた気がした。私にはちよつと難しいのよねえと。

「……凍りつけ、アンヴァースよ。『ダイヤモンドダスト』!!」

アンヴァースのいた場所は凍り付けにされた。そりゃ反応できないか。すこし時間がかかるが、それは問題ないだろうな。相手は魔法に特化。避けるのは無理みたいだった。

「打ち碎ける! アンヴァース!!」

剣で一振り。氷は粉々になり、アンヴァースともども砕いた。

一方ヴェンは…

「やあ!! くらえ!!」

これでもかという程の速さ。そして威力も前とは比べ物にならない威力。

「とどめだ!!」

キープレードを地面に叩きつける。するとあたりが光につつまれた。そして光がおさまった時にはもうアンヴァースは消滅していた。

「レイト！どうだった！？マスターになれそう！？」

ヴェンはこれでマスターになれるだろうと俺に聞いてくる。

「ああ。戦闘に関しては文句なし。だが好戦的な面を直せばもう完璧なキープレードマスターだ。」

これはこれで褒めている。さらにアドバイスまで言っただ。だが何故かヴェンはがっかりしている。いや何を期待していた？

「まあ。いいか。とにかく、俺はフックを追う。ヴェンはピーターにこの事を伝えてくれ。」

「わかった！」

そしてレイトは駆け出した。フックは…あのドクロの形をした岩に行っただ。

空を飛び、フックを追った。

テラの闇（前書き）

風邪って嫌ですね。僕、病気に非常になりにくいんですけど、病気になった時の苦しみが半端ないんですよ。更に体温が低い方なので、37.0度で微熱なんですよ。普通…ですよ？おかしくないですよ？知り合いに聞いたたらその程度が微熱！？って驚かれたんですけど！とにかく…頭が…くるくる回って…うん、とにかくご覧ください。

テラの闇

ちい！何処にいる！

俺こと岸帛零斗は海を飛び、ティンクを拐ったフックを追っている。ドクロの形をした岩に行っただと思うが、速い。速すぎるだろ。多分もうドクロの岩についているであろう。

空を飛ぶアンヴァースをほぼ無視し、とにかくドクロに飛ぶ。岩は省略しよう。

しかし雑魚だから大丈夫だよな？あのクラゲのようなアンヴァース。大量によくいるアンヴァース。まあ、平気だろう。

暫く飛び続け、ドクロ岩に到着した。中にいたのはピーターと着ぐるみらしきものを着た子供たち。そしてピーターは誰かと交戦中。相手は…

「…テラ？」

ピーターは若干押されぎみか。少々手加減している。拮抗している。と見せかけ、戦いをしている最中で問いかけ、か。

「はあああ！！」

まず大きさが違うからな。武器はテラはどちらかというと大剣と考えていいだろう。だが、話しは変わるがフックがない。多分見落としたのか。まあ、まずはあれを收拾するか。

ピーターのナイフとテラのキープレードが衝突する時、

ガキイイン！

「レイト！？」

中央に入り、双剣でテラとピーターの攻撃を防ぐ。

「テラ！何故戦いに発展したかは分からないが、こいつは味方だ！」

「レイト！お前も光りを奪う気か！？」

光り？何の事だ？

「光りがなんちゃらかはしらんが、ピーターはフックとかいう奴の宝箱を盗むという命知らずの遊びをしていただけだ。」

「な！？では俺が守っていたのは！」

「ああ。海賊が求めるお宝さんさ。」

「…そうか。」

テラはキープレードに込めていた力を抜け、戦意がない事を示す。ピーターもナイフをしまった。

「すまない。君とは戦う理由が無かった。」

「いいさ。僕も久々に楽しめたし。」

「いやピーター。こいつは手加減してたぜ。」

「……………え？」

ピーターが固まった。なにやら凄くがっかりみたいな。

「ま、まあ元気出せ。そういえばフックがティンクを拐ったぞ？」

「なんだって!？」

「それで、今現在俺はティンクを搜索中。ピーターは向こうを。俺はここ周辺を調べる。」

「わかった!」

そしてピーターは飛び去った。そして、着ぐるみを着た子供達はなにやら宝箱を放置状態だ。

「テラ、お前誰に騙された？」

「ん？一人は右手が無く、「ああフックだ。」ん？どうしたレイト？」

「いや、違う。テラを騙した奴に心当たり大有りだってことだ。暫くここにいるか。多分フックはここにくるだろう。宝箱もあるしな。」

そしてその時…

「うわあああ!!」

「うわあ!うわあ!」

二人が出口からこっちに向かってきた。いや、逃げてきた。後ろには…

「「アンヴァース!」」

あのクラゲの群れのようなアンヴァース。疲れるね。

「テラ、お前は旅をしてどこまで強くなったかな?第二の師匠であり親友である俺が見てやるぜ?」

アンヴァースは俺たちを囲み、もうこの空間のほぼ全てがアンヴァースだ。

「レイト、驚くなよ。最初に会った時のように弱くないぞ。」

俺は双剣を構え直す。テラはキープレードを出現させる。

…テラの心から闇が…強大な闇を感じられる。やはりあのラストの戦いのようにテラはゼアノートに…なにされるのだっけ?

零斗は一応、本当はかなり薄いが知識はある…。ただ知識がほぼ皆無+400年以上昔のこと故、キャラが少し知ってる程度。

とにかくテラは今、俺の親友だ。テラが闇に堕ちようが、俺はテラの友であり続ける!

「いくぞ!テラ!」

「ああ。レイト。」

「「弾幕勝負開催だ！」」

…テラさん。俺の台詞を真似しないで…。まあ、いいか。

「まずは一手！禁弾『漆黒の幻想』！！」

「大地よ…『クエイク』！」

俺は弾幕、テラは地面から岩をつき出す魔法。まあいいコンビネーションだ。

「流石テラだ！じゃあ、次いくぞ！」

くテラsideく

…レイトには言っていないが、俺の心の闇が膨らんでいるのがわかる。だが、レイトには言えない。

だがレイトと会った時、心が暖かくなった。ああ、やっぱり俺がなんだかんだで一番求めていたのは強さなどではなく、友なんだと。

「次、いくぞ。禁忌『レーヴァテイン』！」

レイトはあの炎をまとった剣で大きく振るう。

「うおおおお！」

俺もレイトの真似をしてみようと、あくまで真似だがキープレードに炎をまわせ、振るう。

「うぐ！？ちい！」

！？レイト！？

レイトは油断したのか、アンヴァースの攻撃をくらう。

「はあ！」

レイトの周囲のアンヴァースめがけて“闇の”弾を放つ。

「！？ テラ……」

レイトに……失望されてしまうのか？マスター・エラクウスは言っていた。闇は滅ぶべきと。レイトもマスター・エラクウスにいる。失望されるな……。だが……

「凄いなテラ！！お前どうやってそれ出したんだ！？」

予想外。完全に予想外だった。レイトは、闇に堕ちた俺を失望するんじゃない、寧ろ褒め、そして親友のままで接した。

「いや、いいね！んじややるか！増絶『重なりし絶望』！」

レイトは剣を投げ、その剣が増えていき、アンヴァースを撃退した。

「……。」

アンヴァースは退治出来た。だが、何故レイトは怒るなりしない？

「テラ！お前やるな！ただの猪かと思ったが、やるな！」

ちょ…レイト、案外酷い事を言うな。

「…俺は闇に堕ちたんだぞ？」

「??？」

レイトは俺の言葉に首を傾げる。まるで、闇に堕ちた。だからなんだと言わんばかりに。

レイトのとった行動に過剰反応してしまい、レイトの胸ぐらを掴んでしまった。

「どうしてレイトは何も言わないんだ！闇に堕ちたんだぞ！！」

「……。」

沈黙。そしてレイトは口を開く。

「…だからなんだ？」

「何？」

レイトの目は非常に優しい目だった。暖かく、包み込んでくれる光のように。

「世界はね、光と闇で出来ているんだ。心も。光だけのやつもいれ

「闇だけのやつもいる。闇は強大。だけど、その力をどう使うかだけだ。」

…説得力がある。

「闇に堕ちても光を支えたければそうすればいい。俺の戦う理由は、世界を救うためじゃない。友達を救うため。」

友を…救うため？

「例え闇に堕ちてもテラはテラだ。変わらないだろ？」

…ぐ！目が熱くなる…。

「…な。テラ。一人で抱え込むな。例え闇に堕ちても友達である事は変わらないぞ。」

「うぐ…ぐ…う…」

静かに泣いた。声を殺し、本当に泣いた。そして俺は決めた。この力は…友のために使う事を。

〈零斗side〉

アンヴァースを撃退した後、テラに胸ぐらをつかまれながら問われ、そしてテラは泣いた。いや、いいんだが胸ぐらをつかんだまま、更に鳴き声が苦しんでるように聞こえる。俺は気にしないぞ！

暫くして、テラは泣き止み胸ぐらを掴んでた手を離した。はぁ、苦しかった。

「すまないレイト。」

「気にするな。」

テラの心は闇だが、目は確かな光を感じた。

さて…

「凄いや！あんな化け物を倒しちゃうなんて！」

化け物…確かに化け物だが…。着ぐるみを着た子供が話しかける。

「なあ、君達宝箱はどうしたんだ？」

「「……………」」

沈黙。それは無くした事を意味する。

「だったら、自分達の宝物を入れればいいさ。」

これを提案したのはテラ。

「テラ、いい考えだな。んじゃ、宝箱を回収しな。」

二人は頷き、宝箱だった空箱は二人が回収するところだったが…

「フックか。」

二つの氣が感じられた。それは間違いなくフック。

「二人とも。隠れてろ。フックが来るぞ。」

二人は岩に隠れる。俺は…空中にでも浮いてるか。

「テラ、対応は任せたぞ。」

「わかった。」

そして空中に浮き、様子を見る。フックがテラと話をしていると何かがテラに渡された。ティンクか。

一瞬にしてフックの背後に行き、肩を掴む。

「なんだ…今忙しい……。」

「やあ♪フック船長♪ティンクを返してくれると嬉しいな♪」

満面の笑みで言ってやった。フックは肩をブルブルと震わせる。

《レイト!》

ティンクも脱出出来たみたいだ。

「このままでは…!」

「なんだ?このままでは?何?」

《ふん！私を拐った事を後悔しなさい！》

途中でなにかの音が…

「…この音は…！！ぎゃあああああ！」

…ワニでした。トラウマがあるのかな？

「さて、ティンク。俺はそろそろ行くから。テラ、行こう。」

《え？》

ティンクは悲しそうにこちらを見る。まあ、そうだな。なんつうんだろう。ムズムズする。

「大丈夫。また戻ってくるさ。」

ティンクは顔の目の前に飛んできて、言い放つ。

《や、約束だからね！べ、別にあんたがいなくなって寂しいとかじゃないんだからね！／＼／＼嘘ついたらその目玉を蹴っ飛ばすわよ！》

ははははは…ティンク怖い。

「んじゃ、行くか！」

「ああ！」

そして俺達はこの世界から去った。

なんか…予感がする。嫌な予感が…。この先、皆が離れ離れになっ
てしまうような…。

旅立ちの地：ヴェンの追求、テラの決意（前書き）

このシーン、個人的にはかなり好きです。今回は自分なりに結構自信があります。では、ご覧ください。

旅立ちの地：ヴェンの追求、テラの決意

俺こと岸帛零斗は異空の回路をテラと共に移動中。俺は旅立ちの地に帰ることに、テラは…どうすんのかわからん。

「ん？ヴェン？」

少し遠いが前にヴェンがいた。何かを求めている様だが…なんだ？

「マスター・ゼアノート！」

「おわ！？」

テラがいきなり叫びだした。いったいなんなんだ？

「すまない、レイト。俺は寄るところがある。」

なにやら急ぎのようだな。

「わかった。んじゃ、ヴェンは俺が追う。」

「わかった。」

そしてテラは軌道を変え、俺の逆方向に飛んでいった。

さて…

ヴェンを追おう。

＼ヴェントウスside＼

…マスター、いや、ゼアノートは言っていた。俺とヴァニタスが戦う事でXブレードは完成する。Xブレードってなんなんだよ…。

俺はそれを知りたい。マスター・エラクウスもそのXブレードの事で俺を“閉じ込めていた”んだ。マスター・エラクウスは…マスターは…まだ修行が足りないなんて言っで、いつも…いつも…！

知りたい真実を求めるたびに苛立ちが…。

そして俺は旅立ちの地、マスター・エラクウスがいる場所へと向かった。

＼エラクウスside＼

…やはり心配だ。

私が行きたいところだが、ここを離れるわけにもいかんし…だが、もしテラとアクア、レイトの身に何かあれば…私は耐えられたものではない。…レイトは心配無用か？

やはり一番心配なのはXブレードの誕生…。

Xブレード、Xはキー、またはカイとも読む。Xブレードをめぐる多くのキーブレード使いが戦った。Xブレード、それは世界をも

滅ばしかねない危険なカギ。それをめぐり多くのキーブレード使いが戦った戦争を、キーブレード戦争と言う。Xブレードとは、完全な光と完全な闇が衝突することで生まれる。その完全な光の心がヴェントウスにあてはまる。

ゼアノート…闇に堕ちたキーブレードマスター。ゼアノートはかつて、ただXブレードの誕生におこる事を知るためにだけにXブレードを誕生させ、世界を危機に追いやろうとした。もうあきらめたと思っていたが、やはりゼアノートはまだ狙っている。

…外へでも出よう。

そして扉を開け、階段の下にはヴェントウスがいた。

…良かった。どっと安心感がわき、急いで階段の下へ下りた。

「ヴェントウス一人か？アクアと一緒にでは？」

ヴェントウスは俯いている。そうとう苦労したのか、恐かったのか。ヴェントウスのもとへいき、ヴェントウスと視線を合わせる。が、私は思いもよらなかった。これからおこる事を。

「いやあ、しかしよく戻ってきた。お前が旅立つにはまだ早い。もっとこの地で修行を積んで「閉じ込めるのか？」…何？」

安心感が全て不安に変わる。

「…そうやって俺をこの世界に閉じ込めているんだな…！」

ヴェントウスは鋭い目付きで私を睨んだ。まさか…知ってしまった

のか…？

立ち上がり、知っていない事を祈りながら、ヴェントウスに聞く。

「…何を聞いた？」

だが、その祈りは無効だった。

「俺がXブレードになる…Xブレードって何だよ…！」

…知ってしまった。

「やはりゼアノート、諦めていなかったか…。」

そう、やはりあの時とめておけば良かったのだ。

く回想く

玉座の間にて、私はゼアノートを呼び止めた。

「待て！ゼアノート！お前は禁断の領域に踏み入ろうとしている…
何故Xブレードを求めるのだ！！全ての世界が闇に覆われ、無に返
すぞ！」

ゼアノートは足を止める。

「…わずかに伝わるXブレードとキーブレード戦争の伝説…かつて
世界は闇に覆われ、そこから新たな光を見出した。キーブレード戦
争はその言い伝えの一節…破壊の後に創造があるようにキーブレイ

ド戦争の後に何があるのか…我らもまた伝説通りに光を見出せる。
光に相応しい生命なのか…私はそれを確かめたいのだ。」

ふざけている。世界を無に返してでも知りたいというのか。

「Xブレードの完成こそ、キーブレード戦争の扉を開く鍵となる。」

「お前は自らの興味のために世界を試すと言うのか？世界を一旦闇
に覆うなど許されんぞ！」

「ならば闇の中にこそ創造があるのだ。…我ら皆、暗闇からこの光
の世界に産み落とされるではないか。」

「それは詭弁だ！」

そしてゼアノートは無視し、また再び足を進める。

…消すしかない。

「言っても分からねければ…」

私のキーブレードを出現させる。

「力づくで止めるまでだ！」

キーブレードを構え、ゼアノートに駆ける。ゼアノートもキーブレ
ードを出現させる。だがそのキーブレードは闇に溢れていた。

「はああ…！」

「ガッ！グッ！」

闇の弾が放たれ、顔にかする。わずかだが、その僅かな力にも確かに打撃は感じられ、膝をつく。

「…その力…闇に堕ちたかゼアノート!!」

「…私に構うな。」

そしてゼアノートは去っていった。

〈回想終了〉

「…ゼアノート、あの時お前を止められなかった我が過ち、ここでたださせてもらう。」

「…ここで取るべき行動、それはヴェントウスを消すのみ。私の弟子を消す…本当に嫌だ。だが…」

キーブレードを出現させる。

「!？ マスター…何を!？」

ヴェントウスが後ずさる。…すまない、ヴェントウス。

「…Xブレードは世界に存在してはならぬもの。ゼアノートの真意を知った以上、ここで封じなければならん!!」

魔力をこめる。手が震える…だが…

「…許せヴェン、お前は存在してはならんだ!!」

そして放出させる。光の鎖が現れる。それはヴェントウスのもとへと飛んでいく。が…

「「ヴェン!!」」

二つの人物により防がれた。その人物は…

「なに!!」

「マスター!何をする気です!!」

「エラクウス!正気か!!」

…テラとレイトだった。

〈零斗side〉

俺はヴェンとエラクウスの会話を見ていた。が、エラクウスが封印する呪文なのか、ヴェンに魔法をはなつ。それをついさっき現れたテラとともに防ぐ。

「テラ!レイト!命令だ、そこを退け!!」

「嫌です!!」

テラは断固として拒否。

「師の言うことが聞けぬか！」

「残念だが俺は師匠と弟子の関係ではないんでね。…断る。」

「何故お前らは私の心を理解出来ぬのだ…我が言葉に耳を貸さぬと言ふなれば…」

エラクウスの目には…涙がこぼれていた。

「お前らもヴェントウスと共に封じるまでだ…てあ！」

エラクウスは駆け、俺たちに攻撃する。俺はレーヴァティンを出現させ、エラクウスの攻撃を防ぐ。

「エラクウス、正気なのか？お前は…そんな最低な野郎だったのか！？」

「すまん…もう戻れんのだ…。私だってこの様な事はしたくない。お前、いや、貴様にはわからぬだろう。師をもった事のない貴様に…私の…心など！」

…そうか。

「もういいレイト！テラ！俺は…」「言うな！」「…。」

俺とともにテラもヴェンの発言に反対。

右手に風の魔法を左手にこめ、そしてエラクウスを後ろにおすよう

に軽い魔法をはなつ。

「ぐー！」

「テラ！ヴェンを！」

「わかった！」

テラはヴェンをつかみ、そして背後に異空の回路を出す。その中にヴェンを投げる。痛そうだったが、我慢してくれ。

「…私も本気でいこう。キープレードマスターとして…お前らを封じる！」

そしてエラクウスは鎧を纏わせる。その鎧は、三つの角のようなものの。所謂、光と太陽を示しているような鎧だった。多分これは全ての力を解放、さらに魔力で自分の体がボロボロになるのを承知の上で全ての力を底上げしていた。これは…テラでは勝てないな。今の状態で俺より少し弱い…いや互角か？力は俺が上だが、魔力はエラクウスが上。

「…マスターだろうと関係ない。」

闇の力を解放させたテラ。

「この力…友のために使う…！」

「闇に堕ちたかテラ！」

そして全ての力が底上げ、更に俺とほぼ互角のエラクウス対俺と闇

の力を解放したテラとの戦いが始まる。

マスター・エラクス（前書き）

ははは…エラクスさんバグ化した…。ではどうぞ。

マスター・エラクス

…殺気。

エラクスからは確かなる殺気が感じられる。

俺こと岸帛零斗はテラとともにヴェンを救出。エラクスは全ての力を底上げし、対峙している。俺とほぼ互角。力は俺、魔力はエラクス。魔力で底上げしているのに魔力が上がるのはどうかと思うが…代わりに体がボロボロになるのか。

「…ふん！」

「「！？」」

エラクスはキーブレードを突く。その瞬間、一瞬にして後ろに移動。速い！そしてエラクスの通ったあとだろう。地面がえぐれている。一発が強力だ！

こんな力を隠していたのか？それ程の覚悟と決意だろう。

そしてエラクスの背中には魔方陣のようなものがある。

「はあああ！」

「！？ 待て！テラ！」

テラは後ろを振り返り、そしてキーブレードをエラクスに振るう。が、吹っ飛ばされたのは…

「うわあああ!?!」

テラだった。魔方阵に攻撃したら反動が自分に帰ってくるのだろう。

テラはなんとか踏みとどまり、体制をたてなおす。さて…

エラクウス…許さないぜ? マスターのくせに弟子にキーブレードを向けるとはな。そして…

「お前は俺の友を消そうとした!」

レーヴァティンをエラクウスに振るう。が…

「今の私なら見えるぞ! 我が本当の力、思い知るがいい!!」

「おらあああああああああ!!!!!!」

エラクウスは俺の攻撃に“応戦”している。若干俺の方が力は上だが魔力はあちらが上。あの状態になれば…なんとかなるのだが…。因みにあの状態とはザックスと戦った時のように能力解放みたいな状態の事。

…全ての攻撃を弾き、さらに向こうも攻撃。激しい攻防戦。響き渡るはキーブレードと剣を交える音。金属音が響き渡る。

「おらあ!」

「ぐー!」

横に一閃。防がれるが、エラクウスはぶっ飛ぶ。やはり力は俺が勝る。

「テラ！いくぞ！」

「ああ！」

俺は空中に、テラはキープレードを巨大化させる。

「いくぞエラクウス！『ブレイドマスター』！」

「当たれ！！！」

上空からは剣の塊、地上からは巨大な弾。

「当たらなければいい話だ！」

エラクウスは普通にかわし、テラの放った弾はかわされる。テラの方へと駆け出した。

「残念だが、俺は“剣を司る”。剣はエラクウス、貴様に当たる事は必然！」

「なに？！」

俺の剣はエラクウスに追尾し、エラクウスにあたる。

「ガアアアアアアアアアアアアアア！！！」

大量の剣がエラクウスに当たる。が、鎧のせいかダメージは与えた

が倒れる程ではなかった。…なんだこのエラクウスは…バグキャラか？

「…やはりレイトはレイトか。強い。だが…ふん！」

「「！?！」」

エラクウスはまたあの光の鎖を出す。そして俺達の動きを封じている。

「はああああ……………」

なんかヤバい…大量の魔力を使っているのか？エラクウスの体から光が…。

「終わりだあ!!！」

!?まずい!

エラクウスからは極太のレーザーが放たれた。だが…く!ヤバい…ヤバい!

ドクン!!

いる…時もあるのだ！うむ！ツツコミはいらん！ではさらばだ！――

…ん？今誰かに体が乗っ取られていた気がしたが…。

「ぐわあああー！」

マスター…！

マスターとレイトとの勝負はレイトの勝ち。マスターの放った光は打ち消され、レイトの放った黒いレーザーが勝った。

「……キープレードマスターとして…お前らを消す！」

マスター…もうあれです。正気に戻ってください。

「はっ！やってみろよ三下！」

レイト…どうしたんだ？

鎖は消え、動けるようになった。俺も…とにかく戦わなくては！

「…終わりだな。勝負はついた。」

「…ふん！諦めたかレイト！」

光がレイトに放たれる。俺は闇の力でレイトの前へ行き、光を防いだ。

「何！？」

「はあ！」

俺のキープレードの一閃でエラクウスは吹っ飛ぶ。レイトの攻撃でマスターの鎧は鎧の役割を果たしていない状態になっていた。そこに俺の一閃。マスターの鎧は粉々になり、そして胸をおさえ膝をついて苦しんでいるマスターがいた。

…一気に罪悪感と悲しみが…そして後悔も…。

（零斗side）

…理性が…危なかった。エラクウスどころか、ここ全ても消すところだった。テラの一閃でエラクウスは膝をついた。

「ゆ、許してくださいマスター…俺はただ…ヴェンを守りたかっただけなんです…。」

テラはキープレードをしまい、エラクウスに歩み寄る。

「いや、いいのだ…許せテラ…お前の心に闇をすまわせてしまったのは私かもしれない…こうして私自身も…お前達にキープレードを向けてしまうとはな…。」

エラクウス…。

「気にするな。俺達は友達だ。例えば戦う事になろうとも友である事は変わりはない…と思う。」

「…レイト。」

テラが俺の名を呟く。いや何故？当たり前前の事を言っただけだ。その時…

「…我が心も闇に…ぐわっ！？」

エラクウスが何かを言おうとした時、エラクウスの背後から闇の何かが当たる。攻撃？だが誰からのだ？

「エラクウス…エラクウス！」

エラクウスにかけより、倒れる身体を支えようとするが…俺に触れる前に…エラクウスの身体が消滅した。

「…嘘だろ？」

残ったのはエラクウスの使っていたキーブレードのみだ。

「…マスター・エラクウス…！」

テラは地面に手をつき、泣いた。…誰が…エラクウスを…。

なあ、エラクウス…嘘だよな？弟子を残して逝くなよ…まだ二人、マスターになってないんだぞ？なあ…なあ…エラクウス…エラクウス…！

「…マスター・テラよ。」

この声は…

「お前が許しを請う必要は無い。エラクウスは、お前の友に手をかけようとしたのだ。」

…ゼアノート！

「貴様…ゼアノート！やはりやりやがったな！」

「…レイトか。危険視はしていたがやはり邪魔となった…が、利用というものはしてみるものだな。」

「貴様！！！」

レーヴァティンを持つ手に力を込める。

「…テラよ。お前の成長には目を見張るものがある。だが…まだ足りない。怒りの感情を解き放て…心を闇に委ねるのだ！」

「どういう意味だ！」

テラは立ち上がり、キープレードを出現させる。

「…わからんか。ならば来るがいい。我らキープレード使いの運命を刻みし場所、キープレード墓場へ！」

ゼアノートもキープレードを出現させる。

「お前はそこで、ヴェントウスとアクアの最期を見届け、闇に堕ちるのだ！！！」

ゼアノートはキーブレードから闇を上空に放つ。それは巨大な弾となり、テラ、ヴェン、アクア、エラクウスとの思い出の地を壊していく。

「もうお前達に帰る場所はない！」

「ゼアノート！」

ゼアノートは闇の回路…だったか？それを開き、その中に入り闇に消えた。

…壊れていく。俺を迎え入れてくれた場所が…。友を誓った世界が…。

テラは先にこの世界を抜け出し、キーブレード墓場へと向かった。

…俺の下に落ちている物を見る。キーブレード…エラクウスの使っていたキーブレードがある。

「…エラクウス。」

そのキーブレードを取る。ふん…これがエラクウスのキーブレードか。光の力を重視。扱いは案外難しい部類に入るが、扱い慣れればかなり強力な力を発揮する。重さは軽くもなければ重くもない。リーチも長い。一撃の威力も、魔力、早さも万能的だ。…なる程な。“理解”した。

「……よつと！」

キーブレードを地面に突き刺す。

「エラクウス。お前の弟子、俺が救ってやるよ。お前の弟子は俺の弟子でもある存在だからな。…友としてでもな。」

そして俺はこの世界を去った。さて、キープレード墓場へと向かう。ゼアノート…貴様だけは許さない！

と案外かつこいい台詞を吐いたのはいいが…

「…そう言えば、キープレード墓場って何処だ？」

…やってしまった俺であった。

キープレード墓場：イレギュラーとして…（前書き）

ツッコミはいらん！

現実逃避です！

上手くないんですよ。シリアス？シーンが。ではご覧ください。

キープレード墓場：イレギュラーとして…

…ふう。ここがキープレード墓場。なんとかたどり着いた。

俺こと岸帛零斗はなんとかキープレード墓場らしき場所へとたどり着いた。何故それが分かるかと？それは…目の前にはキープレード使いという強力な力を持つ者が戦ったと見られる跡がある。

そこにあるのは岩、岩…辺りが茶色い。そして巨大なクレーターが多数ある。

「…最悪だな。」

ここで数多くのキープレード使いが死んだ。嫌になるな。ただ一つの武器を我が物にしようとして。

「…俺はこの世界では本来存在しない者…イレギュラーだ。だが…」
右手を前に出し、レーヴァティンを出現させる。この剣に誓おう。

「…ヴェン、テラ、アクア。お前らは…俺が守る。イレギュラーだが、これは俺なりの覚悟だ。」

…イレギュラー、か。嫌だな。本来存在しない者か。だが…

「…親友である事は変わらない。そうだよな…皆。」

剣を消滅させて足を進める。さて…皆を救いに行くか。

暫く進むと大量のキーブレードが刺さっている場所へと辿り着く。
その先に、ヴェン、アクア、テラと集まっていた。

「…レイト？」

「ああ、アクア。…エラクウスは死んだ。」

「…ええ。知ってる。」

皆俯いてしまった。テラは後悔、アクアとヴェンは悲しみ。

「…テラ。後悔するな。俺達は間違った事はしていない。例えXブレードの誕生の条件だとしてもヴェン親友だ。親友を守るために戦ったんだ。」

「レイト…それでは俺達がマスターと戦い消した事が正しいって言うのか…！」

胸ぐらをつかみ、テラは俺を問い詰める。

「……俺も後悔してる。だけど…こうでもしなくちゃ…もたない…。」

「…………。」

胸ぐらを掴んでる手をそつとどかす。

「テラ…悔しいのはお前だけじゃないんだ！！俺だって…俺だったな！エラクウスを友として見ていた！！そいつが目の前で消えた！！…すまん。」

頭に血が上ってしまった。はあ。

「…皆、それで頼みたい事があるんだ。俺を…消してくれ。」

「…「ヴェン…。」」

ヴェンの発言。確かにヴェンさえ消えればすべては終わる。だが…

「…歯くいしばれ！！」

「グハッ！！」

俺がヴェンを殴る。この音は辺りに響き、ヴェンは倒れる。

「…いいか。二度と消してくれという台詞を吐くな。いいな。」

これまでもとはない怒気でヴェンを睨み付ける。

「…………。」

「…返答が欲しいか？いいだろう。その俺からの返答はふざけるな

だ。お前が死んで喜ぶ奴がいるか？いたとしても俺は泣くだろっな。そして自分の身も消しにかかるだろっな。」

くアクア sideく

レイトが珍しく、いや初めて怒った。私達に優しい笑みをくれていたレイトが怒った。

後悔。けれど後悔しても何もかわらない。そうは知っても後悔してしまう。

そしてヴェンのあの発言でレイトはヴェンを殴った。力強く、辺りに響きわたるような力で。

今回のレイトの一つ一つの言葉には覚悟と決意が感じられる。私達を守ろうと。その守ろうとしていた者が自分を消してくれなんて言ったら怒るだろう。当然だけれど、守られるというのが少し気に入らない。

レイト…今度は私にも守らせてよ。ヴェン、テラ、そして…レイト。

くヴェントウス sideく

俺はレイトに殴られた。何故殴られたのか分からない。

俺さえ消えればすべてが終わるのに…。

レイトは俺にこのような事を言っていた。お前が消えるなら俺も消えると。

…なんだかこの言葉が深く心に響いた。

…けれど、これは俺の覚悟なんだ。俺の闇、ヴァニタスを倒す。それが駄目なら…

くテラ sideく

ついレイトに怒ってしまった。レイトの言葉を聞いた時、本当に怒ってしまった。マスターと戦った事が正しい。友を守るとは言え、マスターにキーブレードを向け、さらには消した。なのにそれは正しい事だと…。友を守るために戦った。それは正しかったのだと自分でもわかってる。だが…我が師…我が父が死んだのだ。俺達が消したと言っても良い。問い詰めた時レイトはこう言った。

もたないと。

レイトも俺と同じ心境だった。なのに…！

ヴェンを殴った時も…本当に友を守ろうと…その決意が感じられた。

ゼアノート…何が狙いかは分からないが、俺は貴様を倒す！この闇の力…友のために有り！

「零斗side」

ヴェンに手を貸し、ヴェンを立たせる。

「…二つの闇の力が感じられる。一つはゼアノート。そしてもう一つは…闇しか感じられない誰かだ。多分そいつがXブレード誕生の事件の一つなのだろう。」

「…ゼアノートか。あともう一つは誰だ？」

「ヴァニタス…。」

俺の呟きにヴェンが答える。あれがヴァニタス。仮面をつけている少年。

「…キープレード使いでは無いが、乱入させてもらおうか。キープレード使いの戦いに。」

レーヴァティンを右手に出現させる。キープレード使って皆強いよな。不完全だが切り札である剣を構える。

「…やるぞ。ヴェン、テラ、アクア。」

「おう。」

「ああ。」

「ええ。」

そして俺達の戦いが始まった。

闇VS光+俺（前書き）

…恥ずかしいですよ。これは。では、ご覧ください。…自信がある。

闇VS光+俺

二人が迫り来る。

戦いが…Xブレードをめぐる戦いがまた始まるうとしている。

俺、岸帛零斗はレーヴァティンを強く握る。

…Xブレードは世界を壊す、対界の武器。俺の力で頑張ったとしても、Xブレードを持たれたら勝ち目がほぼ皆無。使い主にもよるがな。

ゼアノートと仮面の少年、ヴァニタスが立ち止まる。

「見よ。かつては主人の心と一つにあって力を宿していた鍵の残骸を。」

周りに地面に刺さっているキーブレードを示すが如く、ゼアノートは話し続ける。

「この地で繰り広げられた光と闇のキーブレードの戦い…キーブレード戦争の跡だ。多くのキーブレード使いがこの地で消えた。ただ一つの鍵を求めて…。今こそ私は手に入れる…」

Xブレード。」

三人は鎧姿になる。

そして、俺達の戦いの幕は落とされた。

ヴェンが先手必勝が如く駆け出そうとしたが、テラが抑え、自分が先に行くto駆けた。

「てああああ!!」

ジャンプし、ゼアノートに斬りかかるうとしたが…

「ぐおおおお!!ぐっ!!」

ゼアノートは魔法で平らな場所だったところを、ゼアノートがいる場所をかなり高くし、崖と化した。

俺達も駆け出し、ゼアノートを目指す。

すると周りのキープレードが竜巻のように集まり、そして俺達目掛けて飛んてくる。

「ヴェン!!」

アクアが叫び、注意をするがもう遅い。

「がつー!!」

ヴェンはキープレードに当たり、倒れる。

「うわああああー!!」

テラは崖から落ち、アクアはキープレードに命中。さらにテラはキープレードの渦の中、キープレードで斬られている。

「アクア！大丈夫か！？」

「ええ。平気…テラ！」

俺の問いかけに反応し、さらにテラの事も気づく。

テラを魔法で守り、なんとかしたが、テラはゼアノートのいる場所に飛ばされた。ヴェンも仇だと言わんばかりに駆け出し、ゼアノートの元へ向かう。

「ああー！ぐあー！ぐあー！ぐあー!!」

だがヴェンはたどり着いたはいいもの、ゼアノートに頭を掴まれもがいている。一方テラはキープレードの渦に巻き込まれ、そして落下。

「ヴェン！」

アクアがヴェンの事に気づく。が…

「……………うわ！」

鎧は凍り、動けない状態のヴェンが落とされる。それをアクアが受け止め、ヴェンのダメージを防ぐ。

「ヴェン！大丈夫か！？」

俺もかけより、ヴェンを見るが頭の鎧は碎け、頭が丸出し。アクアもよく見ればそうだった。

「…酷い凍傷だ。」

「レイト！上を見て！」

見上げるとハートの形をした月…キングダムハーツがあった。

「…ヴェンを頼む！俺はゼアノートに戦いを挑む！」

そして俺はゼアノートの元へと飛んだ。

くテラ sideく

一人早くゼアノートの元へ着いた俺。レイトもまだ来ていない…やはり俺がゼアノートを倒し、俺がすべてを終わらせる。

「お前ならば、たどり着くと信じていた。光と闇の壁を越えて私の元へ…待ちわびたぞテラ！」

歓迎しているのか？ゼアノート…有り難い事だ。

「…俺には友がいる。答えろゼアノート…あいつの心に何をした！
」

キープレードを出現させる。

「心の闇を抜き出してやったただけだ。だが、ヴェントウスの心は耐えられなかったようだかな。」

「ああそうかい。だが今あいつは正常かつ活発的に動いてるぜ？」

「「「！？」」「」」

何処からか声が聞こえる。この声は…俺の師匠でもあり友でもある、俺の最高の親友…

「…レイト。」

レイトがいた。レイトはゼアノートの後ろに立っており、剣を右手に持っていた。

「き、貴様は！！」

「たどり着くと信じていたは？おいおい…俺にも歓迎の言葉くらいかけてくれたっていいだろ？」

レイトが来る事は予想外だったか。ゼアノートと、その隣にいるヴァニタスが驚いていた。

「テラ…ヴァニタスは俺が殺る。お前はゼアノートの相手をしな。」

レイト…字が恐い。

（零斗side）

テラはゼアノートの相手…俺はヴァニタスの相手か。

「…初めましてだな。俺は岸帛零斗。初めて戦うからな。名乗りをあげなくちゃだ。」

「俺はヴァニタスだ。…どうやらお前は闇を否定しないんだな。どうだ？俺と一緒にXブレードを誕生させてみないか？」

この質問…答えは決まってるしな。

「ぶつちやけ、友に危害をくわえなけりや好きにしてくださいですむんだかなあ。」

つまりどちらにしろ戦う事となる。条件がヴェンである以上、俺の答えはふざけんなど言っているようなもの。

「それじゃあ仕方ない。…俺の相手をしてもらおう。」

ヴァニタスはキーブレードを構える。闇しか感じられない。

レーヴァティンを構える。そして…俺とヴァニタスは刃を交えた。

「ほらほらほら！」

「ぐっ！」

…が、しょっぱなヴァニタスは防戦一方。なにこれ？

横に一閃。

「ぐっ！！！」

余裕。何これ？俺もしかしてさ、エラクウスのバグバージョンと戦っちまったから強くなっちまったってやつ？

ヴァニタスは防いではいるが威力が強すぎたのか吹っ飛ばされる。と思いきや…

「…ん？」

ヴァニタスが消えた。何処だ？

「ここだ。」

上からヴァニタスの声が…！！

「ちい！」

ヴァニタスの一閃。それは地面に衝突したら氷の結晶が出来た。避けたが、あれに当たったらひとたまりもないな。

「当たれ！！！」

その後、ヴァニタスは追撃のごとく魔法を俺にめがけて放つ。炎系か。

「『サンダガ』!!」

「!？」回避はされたが、相手の攻撃も相殺できた。しかし、嬉しい事だ。サンダガ使えたわ。

「…強い。素直に認めよう。いや、認めざるを得ないな。」

「有り難い言葉。んじゃ、悪いけど消すぜ?」

剣を構える。だがかなり悪いタイミングで声が聞こえる。

「ヴェントウスの全てを奪い、アクアを消せ!!」

ゼアノートの命令。テラが相手している筈だが…

ヴァニタスは頷き、そして後ろを向く。

「やめろ!貴様!逃がすかあああ!!」

あの二人が消される!!

ヴァニタスの後を追うが、ゼアノートが俺の前に。テラも俺の横でキーブレードを構える。

「お前達はヴェントウスもアクアも救えん!」

黙れ…

「己の無力に怒るがいい…怒りを力とするのだ!!」

「黙れ!!」

こいつは…消す…!

「許さんぞ…ゼアノート!」

テラも隣で言う。闇の力が感じられる…。

「我が師、いや、我が父エラクスだけでなくあの二人まで!!」

闇が…増幅している…テラの闇が…

「そうだ!いいぞ!もっとだ!怒りで心を闇に染めあげろ!!」

「う…ぐ…う…うわあああああ!!」

そして完全にテラの心は闇に染まった…。

「…テラ…。」

「ふ、ふふふ…ふははは!!」

ゼアノートは何故か笑い出す。こいつは…許さない。

「ゼアノート…ゼアノートオオオオ!!」

テラは闇のオーラを纏いながらゼアノートに突っ込む。

「素晴らしい…素晴らしいぞ！」

ゼアノートも応戦。だがゼアノートが押し負けている。そこに…

「おらああああー！」

「ガハッ！？」

ゼアノートに蹴りをいれる俺。飛んでゼアノートにいつきに近づき、蹴りをいれた。

吹っ飛ばされたゼアノートだが、流石にマスターだけあってまだ立ち上がる。

「「うおおおおー！！」」

俺とテラがゼアノートのもとに走りだす。

「…はあ！」

ゼアノートは岩を操り崖という名の壁を作る。本当に垂直だな。だが…

「俺には無意味なんだよおおー！！」

レーヴァティンに炎を纏わせ、炎の大剣にする。そして縦に一閃。

「なにい！」

岩（崖）は粉々になり、そしてテラはその先へと行く。

「ゼアノートオオオオオ！」

土埃で見えないが、いや…岩埃？まあそれで見えないがキーブレードの交える音は聞こえる。そして…

「ぐわっ！」

ゼアノートがこちらに吹っ飛ばされてきた。うむ…左手を握る。そして…

「おらあああ！！！」

「ガハッ！」

左のパンチをくらわせた。

「ガハッ…が…」

苦しんでいるゼアノート。だがな…

「貴様はそれ程の事をしたんだよ。」

「ガッ！？」

倒れているゼアノートを蹴っ飛ばす。そしてテラは俺の隣までくる。

ゼアノートはまだ立ち上がろうとしていた。血を吐きながらもキーブレードを杖にしながら立ち上がる。

「はあ…はあ…おお！？あれを見る！」

ゼアノートはいつきに歓喜の声に変わる。俺達はゼアノートを気にしながらも後ろをむくと…

光が…光の柱が…もしかして…

「Xブレードの完成だ！」

Xブレードが完成した…つまり…ヴェンは…

「ヴェン！」

右手に力がこもる。くっそ…俺が…俺があのときヴァニタスを倒せていれば…！

「次は…我々の番だ…テラ！」

ゼアノートの方を向く。するとゼアノートは自分の胸にキープレードを刺していた。…自殺？いや、違う…

「この時を待っていた！老いて脆弱な器を捨て、若く強い器を手にいれようとな！」

ゼアノートの胸からは光の玉…心が出てきた。

「…だが、嬉しい誤算があった。それは貴様だ…レイト！」

！？

もしや…いやもしやなんて言葉はいらない…これは…

「レイト…聞けばお前は不老の身と聞く。その力…闇を支配するに適した力…さらに光までもが闇を失わずに私のものになる！…これで見届けられる！キープレード戦争の先に待つものを！」

そして心は俺へと飛んでくる。…かわせない。反応が遅すぎた！最早…これまで…

「レイト…！」

「！？ テラ！」

テラは俺を庇った。そしてゼアノートの心がテラに当たる。

…ゼアノートの体は消滅。そしてテラは鎧姿…。テラは乱暴に鎧を剥がし、そしてキープレードを捨てた。

「…レイトの体は叶わなかったか…だが、それでも充分だ。」

そのテラの髪は白く染まっていた。いや、俺と同じ銀か？

「…心は闇に帰った。」

テラが何かを呟きだす。

「世界は闇に始まり、闇に終わる。」

…いや、あれはテラじゃない。テラであってほしいと願っていたが

…違う。やはりあれは…

「心も同じだ。心に芽生えた小さな闇が、やがて心の全てを飲み込む。それが心のあるべき姿。」

…あれはやはり…

「あらゆる心は…闇に帰るべきなのだよ!」

…ゼアノート。

テラの体に乗っ取ったゼアノートは、あの前まで使っていたキープレードが出現する。

「…レイトよ。お前もそうとは思わないか？」

そして俺に振り返ってくる。目の色が黄色…。

「…テラの…テラの心を返せ!!」

そう叫んだと同時に、この空間に異変がおこる。辺りの景色が赤い鎖でおおわれた。

「なに!?!」

ゼアノートは慌てる。そして後ろを見ると…。

「……………テラ?」

テラの鎧が…。これは…皆を守ろうとしているテラの…思念?

「…思念となつてなお逆らい、留まろうというのか!」

量^{しゅ}膝ついていた鎧^{よろい}は立ち上がり、キープレードを構える。

—レイト!—

…テラ? テラの声が脳裏に響く。

—ゼアノートは俺が片付ける。だからはやく…アクアだけでも…願わくは、ヴェンを救ってくれ!—

…テラ…。

「ああ。わかったよ。…だがアクア、ヴェンだけじゃない。俺はいつか必ず、テラも救いだす。…頼んだぞ…マスター・テラ。」

—…ああ! 我が最高の師であり、友であるレイト! マスターの名にかけて…ゼアノートを倒す!—

…そして俺は駆け出し、外の空間にでようとする。鎖の壁は、俺が通ると透き通り、そして俺は崖から落ちる。

…テラ。頼んだぞ。

…俺は、皆を救う!!

X ブレード（前書き）

とても痛い…心が痛い…。

ああ…なんかシリアスの展開にしたつもりですが、シリアスもどきになってます…。過度な期待はしないでください。では、ご覧ください。

Xブレード

下に取りてみるとそこにはヴェンとアクアがいた。ヴェンは何かを右手に持ち、アクアは倒れて気絶。ああ、なんだかんだでヴァニタスは倒したんだな。

「アクア！大丈夫か！？」

「ん…レイ…ト…？」

アクアに駆け寄り、起こす。

「ああ。…はあ。良かったよ。アクアが無事で。」

「あ、有り難う。」

アクアも立ち上がる。

「ああ…本当に心配だった…良かった。」

「……え？」

…今、俺は何をしてるんだ？何故かわからないがなんかしなくちゃいけないような気がした。いや、しなくちゃいけないような気がした。

今、アクアを抱き締めている。

「ちょ！レイト！何してるの！？／／／」

…何故だかわからないが、なんかこうしていたい…て、そうじゃねえだろ俺！アクアが嫌がつてるじゃねえか！

「ああ！ご、ごめん！」

アクアを離し、そして暫く気まずい空気が流れる。なんだろうなこの気持ち…暖かい。アクアといると、親友では感じられないなにかが感じられる。

「……と、とにかく今はヴェンのところへ行こうか。」

「…ええ／＼／」

そしてヴェンのところへ駆け寄る。が、なにかおかしい。顔はヴェン。だが…そのヴェンは俯いたまま。そして闇が感じられる。

「ヴェン！無事だったのね！」

アクアがヴェンに語りかけるが、無反応。不思議に思ったアクアはヴェンの顔を覗く。その時…

いきなりヴェンが何かをアクアにふりおろした。

「「危ない！！！」」

俺と誰かの声が重なる。俺と誰かはヴァニタスの何かを弾き、そしてアクアを守る。俺の右にいるものは…

「ミッキー！？」

「大丈夫かい？」

特徴あるキーブレードを持つミッキー。そして結論をつけよう。奴は…

「…こいつは…ヴァニタスカ…やはり…。」

そしてヴァニタスの体が闇に覆われる。

「そう…俺はヴェントウスじゃない。あいつの心は俺が取り込んでやった…。」

「…!!」

アクアとミッキーは驚きを。そして俺はそのヴァニタスの言葉を聞き、自分に絶望したような…負の感情が込み上がってくる…が、力がいつきに抜けるような…悲しみがわいてくる。

「このXブレードで扉を開き、全ての世界が繋がる！そして光の心…キングダムハーツを求め、あらゆる世界からキーブレードを持つ者がここに集うのだ！これぞ伝説の再来…キーブレード戦争だ！」

「黙れ!!」

アクアが前に出てキーブレードを構える。駄目だ…アクア。Xブレードはすなわち世界だ。世界を敵にまわしているようなものだ。例えキーブレードマスターのアクアでも、世界を凌駕する力を持つのか？答えは否。結果は分かっている。

いつきに力が抜ける。助けると言った筈なのに…はは…もう約束を破ってるよ。

「戯れ言を聞く気は無い！ヴェンの心を返してもらおう！…」

…俺の手からレーヴァテインが落ちる。

…はは…いつその事…俺もエラクウスの元へ逝こうかな…。

金属音、時には爆発音が聞こえ、そしてアクアとミッキーの悲鳴が聞こえる。

無理だつて…。勝てるわけないだろ？

「ほら！どうした？キープレードマスターさん？…ん？ああ、レイトがいたな。やられた分はやり返さなくてはだな。」

そして俺に突風が襲い、そして吹っ飛ばされる。

…頭に岩がぶつかる。…激痛がはしる。

「ははは！絶望したのか！？次は…お前らだ！…」

そしてアクア、ミッキーも飛ばされる。ああ…勝てるわけないだろ…う？

「どうした？もう終わりか？」

俺達を見下すヴァニタス。ああ…逝くのか。

そして、ふと下を見た。なにかが落ちていた。

「…ヴェン。」

それは繋がりのお守り。ヴェンが持っていた、緑色の絆の証を示す物。

…ヴェン。

「レイトもなんだ？それでもキーブレードマスターの師をしていた奴か？お前のせいで弟子がやられてるなあ。」

……………。

「黙れ！！レイトを…馬鹿にするな！！私の友達の名を語るなあ！！！」

そして轟音が聞こえる。アクアが対抗しているのだろう。

「貴様は友を知らない。レイトは…レイトはいつも私を支えてくれた！！！」

…アクア。

「危機に駆け付けてくれて助けてくれて…私達を守ってくれた！！！」

……。

「何も知らないくせに…ヴェンの事も…」

……。

「何も知らず、私達を離れ離れにさせた原因の貴様が…ヴェンやテラ、レイトの名を語るなあああ！！」

そこでふとアクアを見る。アクアは…泣いていた。

「ふん！何が友だ！所詮屑の奴を友と呼ぶか？Xブレードを作る道具を友と呼ぶか？」

……………。

「キヤアアアア！！」

悲鳴…そしてアクアの持っていた繋がりのお守りが俺の元に落ちてくる。

…許さない。

右手に力を込める。光をイメージする。膨大で、全てを優しく包み込むような暖かい光を。

「ふん！これでとどめ…なに！？」

そして、俺の右手が光り出した。右手に持っている物は…

キーブレード。

「キーブレード！？貴様が…何故！？」

そして俺の右手にあるキーブレード。それはエラクウスの使っていたキーブレード。しかもこれは本物と同じだ。強さも…全てが。

…力が“戻ってくる”。あのザックスと戦った時のように。そして俺の能力、“剣を司る程度の能力”が完全に戻ったような気がした。

「マスター・エラクウス…？なんで…レイトがそれを…？」

立ち上がり、そしてキーブレードをもう一本左手に出現させる。そのキーブレードはテラの使っていたキーブレード。

「…アクア。必ずお前を守る事をここに誓う。そして…必ずヴェンやテラを救う事を…新たに決意する！このキーブレードマスターの持っていたキーブレードに誓おう！」

俺は…世界に挑めるのか？いくら俺の能力でもまず大きさが違う。相手は“全て”。その力の膨大さでは劣る。つまり俺の力でXブレードに干渉する事は不可。さらに作る事も不可。例え不完全でも見た目はXブレード、中身は剣より弱いものを作っても仕方がない。

「レイト…。」

アクアの呟き。だがそれは俺の耳には届かない。今目にあるのはヴァニタス…貴様だけ。貴様を消し、ヴェンを返してもらう。

俺のポケットの中には銀、緑、青の絆がある。そして…何かに踏む。それはオレンジの絆…。

「…………。」

無言で拾い、そしてしまふ。必ず…お前らを救うからな。

「…ヴァニタス。貴様は罪を犯しすぎたな。ヴェンの体を…心を取り込んで、Xブレードを誕生させた。」

「ふん！だからなんだ？」

俺の体から二つの何かが覆う。左側は闇。そして右は光。

「…貴様を消し、Xブレードを破壊する。そして…ヴェンを返してもらう！…！」

二本のキープレードを構え、ヴァニタスに突っ込む。

「貴様でもXブレードを越す事は出来ない！！はぁ！！！」

「おらぁ！！！！！」

Xブレードとキープレードが交わる。

そして、俺とヴァニタスの最後の戦いが始まった。

Xブレード破壊（前書き）

後半につれて駄文化…はあ。

あと裏ボスで出てくる謎の男は出しません。申し訳ないです。今のところ出てるのがアリーナで出るエラクウスの思念…。

謎の男の登場にご期待していた方々、申し訳ございません。

では、ご覧ください。

Xブレード破壊

俺の右手に握られているキーブレードとヴァニタスの持つXブレードが交わる。

轟音。そして衝撃により真空波が発生し、俺とヴァニタスの周囲をボロボロにする。

「流石レイトだ！まさかXブレードを片手で互角の威力とはな！だが！」

Xブレードが離れ、そしてまた俺に振るわれる。ヴァニタスが一閃。俺はその攻撃を防ぐ形となる。

俺の付近にはクレーターができる。そしてキーブレードが粉碎していた。

「Xブレードの前では無力！」

「…だが残念。俺は剣を創りだす事が可能なんだよな。」

そして再び右手にキーブレードを出現させる。

「今度はこちらからだな。おらああああ！！」

左手のテラが持っていたキーブレードも今度は振るう。だが…

「その程度か？」

ヴァニタスも余裕の表情。やはり次元が違うか。なら…

「ふん！」

「グハッ！！」

二本のキープレードでXブレードの動きを封じ、そしてヴァニタスに蹴りを喰らわす。

蹴りとばし、ヴァニタスとの距離を離す。が…

「ほら。後ろだぞ？」

またヴァニタスと戦ったように後ろに移動している。同じ手は二度喰らわんよ。喰らってないけどな。

降り下ろされたXブレード。その周辺にはクレーターができる。はあ、やっぱり強い。

…Xブレードは大剣。大剣は広範囲に攻撃。だったらかなり近距離でやればいけるかも。

地面を蹴り、一気に間合いを詰める。

轟音。結果は無理。やはりXブレード。でかいわりに万能だ。

Xブレードと二本のキープレードが押し合っている。

「はははは！楽しい！楽しい！最高だ！…これはキープレード戦争よりも楽しめる戦いができそうだ！！」

「…最悪だな、ヴァニタス。キープレード戦争の再来と互角レベルに最悪だな。」

そして押し合っていると辺りが光に包まれていく。光は俺とヴァニタスを包み、そして辺りは暗く、かと言って暗すぎない。星空輝く夜みたいな空間が広がる。いつのまにか俺とヴァニタスは浮いている。

「はあ！」

「ちい！」

またしても押し返される。だが…好都合もある。

なんか知らん空間だが、これで心置きなく戦える！！

「ヴァニタス！今から俺は本気を出す！本当の弾幕勝負はこれからだああ！！」

「は！Xブレードの前では全てが無意味！」

魔力を引き出す。戻った力…存分に使う！

「弾幕勝負…開催だ！禁弾『漆黒の幻想』！！」

辺りに小さく、そして速く、さらにいつもより多くの量の弾幕がヴァニタスを襲う。

「その程度で俺を倒せると？ふん！『サンダガ』！！」

魔法で弾幕を相殺。さらにヴァニタスの放ったサンダガは黒く、まさに闇そのものだった。

「禁魔『辺りはとても暗くなる』」

辺りを魔力で暗くする。闇ならばこちらでも闇でやってやろう。

「！？何処だ！？暗い…なんだこれは！？」

「さて…避けられるか？『フレア』『バースト』『トルネド』」

暗闇の中、上級魔法を連続で放つ。これならいくらなんでも効いただろう…。

暗闇が消え、そしていたのは無傷のヴァニタス。

「…成る程。『リフレク』か。」

「次はこちらからいこう。…凍れ！！」

辺りがブリザガ…いや、それ以上の魔力があるものが数多く放たれた。

「禁弾『禁じられた闘争』。」

「な、なんだと！？」

巨大な弾幕がヴァニタスを襲う。その弾幕はヴァニタスの放った魔法を打ち消し、そしてヴァニタスへと向かう。

「…はあ！！」

轟音。そしてまた轟音。一つ一つ防いでいるが、その一つ一つの弾幕を打ち消すごとに轟音が鳴り響く。

「さて…そろそろ打ち合うか！はああああ！！！」

キーブレードを構え直し、そしてヴァニタスへ向かう。

「Xブレードの前では無力と知ったではないか！」

轟音。そしてXブレードと俺のキーブレードが交わる。そして左のキーブレードをヴァニタスに向け、そして弾幕を放つ。

「がつ！？！」

直撃。吹っ飛ばされるヴァニタス。

「ガアアアア！！！！レイトオオオオ！！！！！」

ヴァニタスは今暴走状態。打たれ弱いのか？

「はあああああ！！！！！」

Xブレードを前に構えられ、そしてXブレードに魔力が集中。

「闇に堕ちろおお！！！」

蒼く、そして黒くもある極太のレーザーが放たれた。

「……弹幕は威力かよ……。」

こちらキープレードを構え、レーザーを放つ。こちらは光。

俺の放ったレーザーとヴァニタスの放ったレーザーがぶつかる。

「……拮抗してるか。だが勝つのは……俺だあ……！」

そして若干俺が押す。

「なに……！」

少しずつ俺が押す。そして……

「ぐ……ぐがああああああああ……！」

俺の放ったレーザーが当たった。が……

「はあ……はあ……」

まだ耐えるか。ヴァニタスは傷だらけだがまだ立てている。

「……終わりだ。終焉『破壊を楽しむ者』。」

「……！！？」

そして辺りは歪み、さらに俺には黒いオーラのようなものが纏われる。

「……………むん!!」

キープレードを投げる。二つのキープレードが消えた。その途端…

「なに!？」

辺りから数えきれない程のキープレード。それだけではない。漆黒の剣、レーヴァテインも炎を纏っている状態でいくつも出現。

「…俺の勝ちだ。ヴァニタス。」

一斉に放たれる。さらに超巨大な弾幕が数えきれない程にヴァニタスに向かう。それも速度も速く、威力も絶大。

「ぐがあああああ!!!!!!」

ヴァニタスを中心に大爆発。それと同時に空間がひび割れる。

そして…世界は元へと戻り、残ったのは俺と力尽きたヴァニタス。

…Xブレード。ヴァニタスの近くにより、Xブレードを取ってみる。その途端、Xブレードがパリンツと音をたて、壊れる。

そしてXブレードから光が放たれる。

「レイト!!」

アクアがミツキーとともにかけよる。

「よかった…無事だったのね。」

「そんなことより…この光は…！それより…ヴェン…！」

辺りを見回すとヴァニタスの倒れていた場所にヴェンがいた。

「ヴェン！」

ヴェンは光へと呑み込まれるが…俺とアクアが同時に駆け、そしてヴェンの手を掴む。

そして、俺、ヴェン、アクアは光に呑み込まれた。

?????：スペルカード（前書き）

少々遅くなりました。

東方の要素が入っています。まあ、スペカだけですけどね。

しかし、今さら気づきました。なんで主人公を東方の世界と絡ませたんだ？と。

.....。

ま、まあとにかくご覧ください。

?????：スベルカード

…浮いている？

何処だここは？

…なんだか凄く眠い。

謎の浮遊感が感じられる。ここはいったい何処なのか…。

ああ、そうだ。確かXブレードを破壊したんだ。そうだった。

なんとなく、俺のポケットに触れる。

……！？

お守りが一つ無い！？何故！？

ハッと目をあけ、そして中を確認する。あるのは、俺の銀色のお守りとヴェンの緑色とテラのオレンジ色のお守りのみ。

だが…ここは何処だ？飛ばされた？何処に？

辺りは暗い。だが俺自身の体ははっきりと見える、不思議な空間。
…闇の世界…なのか？

―ふむ、そうとらえたか。だが、まあそれも良しだ。―

…脳裏に響く声。神か？

―そうだ。―

…成る程。ならここは神が作り出した空間か。

―そうだ。いきなりだが、本題に入ろう。零斗よ。君の能力、“剣を司る程度の能力”は戻った。さらにはキープレードまで手に入れた。―

…キープレード。あれは俺が創り出した物じゃないと？

―そうだ。テラの持っていたキープレードは創っていたが、エラクウスを持っていたキープレードは本物。故に…お前の力は今、かなり危険だ。―

…それで、俺をどうするんだ？このまま俺を封印でもする気か？

―いや、違う。お前にこれを渡し、少しでも力を抑えてもらおう。―

そして、俺の手元に現れたのは…カード。

そのカードには、俺の技の名前が書かれていた。

禁忌『レーヴァテイン』

禁弾『漆黒の幻想』

禁魔『そして辺りは暗くなる』

禁弾『禁じられた闘争』

増絶『重なりし絶望』

禁剣『ブレイドマスター』

禁剣『降り注ぐ漆黒の剣』

終焉『破壊を楽しむ者』

そして、一枚知らないカード、技名があつた。

鍵符『マスターキーパー』

…これは、“スペルカード”。“スペルカード”とは、全ての技を非殺傷にするもの。平和的解決を元にして作られたのだが…殺さなくても怪我は負う。はっきり言って、これが本当に平和的解決なのが気になるが…まあいいか。今は俺の“スペルカード”だな。

…ふむ。本来“スペルカード”はその技名を宣言しなくてはならない。つまり、不意打ちは不可だ。だが、これは別だ。“スペルカード”であつてそうではない。これはゲームではなく戦い。つまり、同じ技が何回も使用可能。さらに宣言は不要。お前の力を抑えてはいるが、非殺傷ではない。――

…つまり、こいつが言いたい事とは、この“スペルカード”とは“ごっこ”で使う筈のカード。だが今回は戦い。相手も本気で殺しにかかる。だが俺の力が解放状態であると危険。さらにキーブレードを手に入れた事により、さらにこの世界の危険度が増す。だから“スペルカード”の中身を神が少し変更し、力を抑え、なおかつ相手をも倒せるようにした。

…説明出来てなかったらごめん。

—誰に謝っているのだ？ふむ、とにかくだ。早速だが、新しく出来たカードを使え。アクアが困っているぞ。—

そして、俺の前に現れたのはモニター。…神よ、お前こんなの持ってたんだな。

そして映し出されたものは、旅立ちの地の城の中にいるヴェンを抱えているアクアだ。キーブレードを構え、何かを唱えているが、上手いかないようだ。

—あれは城を封印しようとしているのだ。零斗を選んだそのキーブレードで本来封印する筈だが、それが無いため、アクアは自分のキーブレードで封印しようと試しているのだが…無理なようだ。—

…成る程。だが何故封印しようとしているのかが理解出来ないが、まあやるか。

「…“スペルカード”…」

手元のカードは消え、そして残っているのは『マスターキーパー』のみ。

「…鍵符『マスターキーパー』!!」

カードを上に掲げ、宣言する。

—…宣言しなくても可能と言った筈だが?—

いいじゃねえかよ！やってみたかったんだよ！

カードが消え、そして掲げた手に光が集う。光は鍵の形を創り、そしてキーブレードが出現した。

―キーブレードの力も抑えている。ふむ、そうであった。力は戻っても不死は戻っていないぞ。―

…マジかよ。不死はいつ戻るのかねえ。さて、キーブレードを出現させたのは良いが、これでどうする？

―魔力を集中させ、そしてあの城を封印させよ。―

…ここからか？

―ここからだ。―

…呪文知らないのに？

―なんとかなるだろう。―

ご都合主義…。

まあ、いいだろう。なんとかできるかな。魔力を集中させる。キーブレードを前に構え、そして魔力をさらに集中させる。

…封印だな。城を封印させるような感じだ。

そして、俺の足元から魔方阵が出現。円の形をしている。

…さて、複雑にやってしまったのか？まあ、いい。

―正確にはヴェンのいる部屋を、零斗とアクア、テラ以外に入れなようにするのだ。―

それを早く言え！！

…まあ、いいか。ヴェンを救うつもりだしな。ヴェンは今、心の無い存在、寝ている状態だろう。だから、ヴェンの心を取り戻す。いつか…必ず。

モニターから白い光が見える。その光が収まるとそこは城だったのが真っ白な城に変わる。…成功か？

―成功だ。―

…とにかく良かった。

―さて、そしてお前にはレイディアントガーデンに行ってゼアノートと決着をつけてもらう。―

…レイディアントガーデンにゼアノートがいるのか？

―…お前原作知っているだろう？―

もう何年前の事だよ。忘れた。

―…まあ、何百年と経つと忘れるものであるな。とにかく、そこにゼアノートがいる。私がそこに送ろう。―

有り難い。…そして神、“スペルカード”はどうやって出すんだ？

―それは使いたい物を出ろと思うだけで出現する。もういいか？―

ああ。ゼアノートを倒して、テラの心を返してもらおう！

―…では、行ってこい。―

辺りの闇は消えて、そしていつの間にか地面に立っている。

辺りを見回すと、ここは既にレイディアントガーデンだった。だが、何かおかしい。

辺りが若干暗く、そして輝きも欠けていた。広場の中央にポツリと人が立っている。

その人物は白い髪。俯いていて、何かに苦しんでいるようだった。

…ゼアノート。

広場の中央にゼアノートがいた。

さて、ゼアノート。テラの心を…返してもらおう！

レイディアントガーデン：マスター・ゼアノート

広場の中央に立っているゼアノート。だが目が何故か混乱しているような、今にも閉じてしまいそうな感じだ。

…俯いていた顔を上げ、闇に覆われている空を見るゼアノート。いや…テラか？

「テラ！」

アクアもこの世界に来たのか。アクアは中央にいるゼアノートに駆け寄る。

だが様子がおかしい事に気づくアクア。テラはアクアを見て、そして手を伸ばし、アクアの胸ぐらを掴み、持ち上げる。

「ぐ…ぐ……！！！」

苦しみ、もがくアクア。…行くか。

「ゼアノート！」

俺もゼアノートのところへ行き、一般的な剣を出現させ、構える。

「レ……レイ……ト…？」

ゼアノートは俺の方に向く。ゼアノートから闇が溢れでてくる。

「…私は……誰だ？」

「この力…闇の…！」

さらにアクアを掴む力が上がったのか、苦しみながらしゃべるアクア。

「……違う…貴方はテラ！」

「テラ…だと？」

闇が収まり、アクアを掴んでいた手を話す。

「アクア…大丈夫か？」

「レ…レイト？」

「ああ…零斗だ。」

しゃがみ、目線をアクアに合わせてぐわいを聞く。まあ大丈夫だな。

「う…う…う…」

途端、急にゼアノートは頭を抱え、苦しみ始めた。

「……………」

その光景を見る事しかできない。どうやらあれはテラの心も存在する。願わくは、テラの心であって欲しいが…。

「……奴の心は闇に消えた。」

…が、その願いは儚く消えた。やはり…ゼアノートか。

「自らの闇に溺れたのだ!!」

キーブレードを出現させ、それを振り下ろしてくるゼアノート。

それを剣で抑え、アクアを守るように抵抗する。

「…ゼアノート…貴様…貴様ああ!!」

押し返し、そしてキーブレードを払う。

アクアも立ち上がり、そして手を前に向ける。

「我が名は…マスター・アクア!」

アクアもキーブレードを出現させる。

「…異世界から来たマスター・アクア、マスター・テラ、マスター・ヴェントウスの師匠であり友である……岸帛零斗!!」

手を上に向ける。そしてスペルカードが出現。

…スペルカード。

「鍵符『マスターキーパー』!!」

右手が光に包まれる。その光はだんだんと鍵の形を作り、そしてキーブレードが出現。

「「キープレード!?!」」

アクア、ゼアノートとともに驚きの声を上げる。

キープレードを構える。

「ゼアノート…テラの心を返して貰おう。」

「ちい!何故貴様がキープレードを持っている!それはエラクウスのキープレードの筈ではないのか!」

「確かに…エラクウスはキープレードを俺に託したのではないか?エラクウスの代わりだが…ゼアノート…貴様を倒す!」

重くも無く、軽くもない。リーチも長く、防御も何故かとりやすい。そして扱いにくい。だが慣れればかなり強力な力を発揮するキープレード。

「…ふ…ふはは…ならいいだろう!岸帛零斗よ!貴様には感謝しているぞ!テラを鍛えてくれたおかげで…予想を遥かに上回る力で…貴様らを私の手で消してやろう!」

するとゼアノートから闇が溢れ出てくる。その量がだんだんと増え、更にはゼアノートを隠すほどの量の闇が溢れ出た。その闇は俺達を覆う。

そして、闇が消え、そして闇が消えた。

…景色が違う。そこは俺達、俺、ヴェン、アクア、テラ、そしてエ

ラクウスがいた場所。よく修行場に使い、キープレードマスターの試験で使われた場所。俺達の故郷…旅立ちの地。そして、その玉座の間。

「…！？レイト！あれを！」

「！？」

アクアが途端に叫び、そして指を指す。その方を見てみると玉座には灰色の鎧…ピンク…いや、赤…朱…そのようなマントが腕に…表現するならば…無。

あれはゼアノートだろう。そのゼアノートからは莫大な闇…そして…無。無の力も感じられる。

そのゼアノートは、玉座に座り、俺らを見ている。

「…レイトよ。これが私の新たな力だ。」

強大な闇…なんだよ…これ…。まるでバグだ…。エラクウス以上だ…。

さらにこれは結界らしきものであろう。相手が有利になるであろう。

「…レイトよ。やはりお前の体が欲しい。」

「…同性愛？」

「ち、違うわ！…何をどうとったら私が同性愛となるのだ！」

流石のゼアノートもツツコミをいれる。まあ、ふざけるのはこのあたりで終了だな。

「…と、とにかく…どうだ？お前がテラの代わりとなるのはどうだ？」

「レイト！」

アクアが止める。まだなにも言っていないけど…そして、答えも決まってるしな。

「…ふん。ふざけんな。俺は生憎、テラ、ヴェン、アクアの三人と共にありたい。それに…アクアと…一緒にいたいしな…。」

「え…／／／」

…最後の方をボソリと言った。…恥ずかしいしな／／／

俺は、旅をしてきて分かった。アクアといるとなんか楽しく、そしてもっと一緒にいたいと思ってしまふ。願わくは、久遠に一緒にいたいと思ってしまう。

笑顔を見ると、なんか顔が熱くなるし…ドキリツと心臓が…。

ああ、やっとわかった。これが恋なんだなと。

くアクアsideく

…今…確かに聞こえた。

レイトは…私に聞こえないように言っ たつもりだろうけど、確かに聞こえた。

アクアと一緒にいたいしな…と。

か、顔が熱い…／／／

あの言葉がとても嬉しかった。

やっぱり…告白しよう。私も…結局は一人の女だったんだ…。

けど、それはまずゼアノートを倒して、テラの心を返してもらっ…。

キーブレードマスターとして…まずは闇を払っ…！

く零斗sideく

…聞こえた…のかな？

ボソリと言っ たつもりなんだが…。

まあ、今はともかくだ。あいつを倒すことを優先しよう。

「ふふふ…Xブレードの暴走…やはりXブレードは凄まじい。」

…Xブレードの暴走…あれか。

「Xブレードの暴走時、私はそのXブレードの暴走で無の力をもらった。」

「…つまりXブレードの暴走で“偶々”無の力と闇の力の上昇があったわけか。」

… なんといい運の良さだ。 あいつなら俺の前の世界でも生きていくのではないか？

とにかく…

今はゼアノートを倒す！

「… 偶々と言うな。 では… 相手になろう。 レイトよ。」

ゼアノートも玉座から立ち上がり、そして右手にはキープレードが握られていた。

「… レイト、いくよ！」

「ああ！アクア！」

キープレードを構え、そしてゼアノートに向かって走る。

ゼアノートとの最後の戦いが始まった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9496t/>

キングダムハーツ～剣の御遣い？の戦士～

2011年11月12日07時21分発行